

第28回全国バス学習研究大会要項

学校は変わるか



平成8年11月15・16日

主催 東京都文京区立第六中学校
全国バス学習研究会
後援 東京都教育委員会
東京都文京区教育委員会

はじめに

第28回全国バズ学習研究大会会長
東京都文京区立第六中学校校長

有元佐興

本日は全国から多くの方々にご参加いただき有り難うございます。また、ご後援くださる東京都教育委員会の市川正教育長、文京区教育委員会の小高偉之教育長はじめ多くの方々のご臨席をいただき、ここに第28回全国バズ学習研究大会を開会できますことは誠に感謝に堪えません。改めて深くお礼申し上げる次第であります。

今、大きな社会的課題として、教育改革が叫ばれております。即ち今までの教育を構造的にも内部的にも改革せねばならないということでもあります。

国際化、科学技術の発展、情報化、産業構造の変化、勤労時間の短縮、女性の社会進出等々の社会の変化に対応する教育が望まれているにもかかわらず、旧態依然とした体制に対する批判が積み積み積もっているものと察せられます。

今教育を変えねばなりません。即ち、教育を行う学校こそ変えねばならないのでしょうか。はたして学校は変わるでしょうか。

私はこのことに今、挑戦しつづけております。

学校を変えることについて、最大の焦点は直接指導にあたる教員の意識改革であると認識しております。教員の意識改革は教育に対する姿勢と指導技術にあるはずであります。

特に、教員は多くの指導技術を身につけ、その場その場の子供の変化に対応し、子供を取り巻く環境の変化に対応しつつ、力強く子供の教育に邁進していくことを期待しております。

バズ学習の論理とともに、指導技術を本校職員に習得させ、生徒育成の効果を挙げるのが、第六中学校校長として会場を提供する私の役目だと考えております。

バズ学習は子供の表現を鼓舞し、協同学習、話し合い学習を進め、人間関係の育成に極めて効果があると考えております。「いじめ」「不登校」の発生は基を正せば、人間関係の構築での問題だと私は捉えています。バズ学習の勉強を通して、本校教師共々お集まりいただいた皆様の指導技術の向上を期待しております。

どうぞご参会の皆様も、全国各地からの提案者と一緒にご討議をなさり、実のりある大会にさせていただきたいと願っております。

最後になりましたが、助言者の皆様のご協力に厚く感謝申し上げます、ご挨拶と致します。

全国バズ学習研究大会の開催にさいして

全国バズ学習研究会研究者代表
名古屋大学教育学部教授

梶 田 正 巳

この度、第28回全国バズ学習研究大会が、東京都文京区立第六中学校において開催されることになりました。久方ぶりの大会で、関係者の一人として、心から研究大会の開催を喜んでおります。

ここに至るまでには、開催校である第六中学校の有元佐興校長先生はじめ、先生方の大きなご努力がありました。骨身を惜しまれない諸先生のご尽力があって、初めて本大会の開催に漕ぎつけることができました。と同時に、自発的な民間の教育研究活動に対して、積極的に支援された東京都教育委員会、文京区教育委員会の皆様方に厚く御礼を申しあげたいと思います。教育活動の原点は、なんといっても、関係する人々の内発的な活動です。それを支えてくださった方々に感謝いたします。

バズ学習は、言うまでもなく、故・塩田芳久名古屋大学名誉教授の発案になるもので、昭和30年代から40年代、50年代にかけて熱心に実践されました。40代以上の年配の先生方なら、きっと頭の片隅に“バズ学習”という言葉は残っているでしょう。

塩田先生の言葉によれば、バズ学習の基本精神は、豊かな人間のかかわりの創造の上に、授業や学習を進めようとするものです。児童・生徒の間の人間のかかわり、先生と生徒との人間のかかわり、親子の人間のかかわりを一番大切にしたい、豊かにしたいという願いがあります。この基本的考え方は、時代が変わっても、普遍性を持つものです。実際に、授業の風景を垣間見ると、先生と児童・生徒との人間的に豊かなかかわりが、子どもたちの可能性を拓くことは誰もが確信できます。こうした基本的考え方を、時代の流れや流行によって捨てさってしまうことは、余りにも惜しいことだと言わねばなりません。

身の周りを見わたすと、青少年問題がさまざまなかたちで噴出しています。結局、これは、親と子ども、先生と児童・生徒、地域の人々の豊かな“かかわりの喪失”から生まれていると言ったら間違いでしょうか、いろいろな思いはありますが、一つ確かなことは、豊かな人間のかかわりを基盤に授業や学習を進める“バズ学習”が復活しなければならぬということです。

本大会を契機にして、教育研究活動の当たり前のアプローチが、今一度間違いなく受け止められるようになることを願っています。

目 次

はじめに	第28回全国バズ学習研究大会会長 東京都文京区立第六中学校校長 有元 佐興……………	1
全国バズ学習研究大会の開催にさいして	全国バズ学習研究会研究者代表 名古屋大学教育学部教授 梶田 正巳……………	2
<全体会（問題提起）>		
学校は変わるかー3年間の授業公開週間を通して	東京都文京区立第六中学校教諭 齊藤 進……………	7
バズ学習ーその理論と実践、今後の展望	中京大学教授 杉江 修治……………	13
<第1分科会>		
研究的実践のすすめ	元愛知県豊川市立天王小学校教頭 丸山 正克……………	25
<第2分科会>		
バズ協同学習の原理を生かしたコンピュータ学習	名城大学助教授 伊藤 康児……………	33
学びの場にコンピュータは異質なもののなか	関西大学助教授 田中 俊也……………	37
マルチメディアソフトを利用した協同学習	東京都荒川区立第五峡田小学校教諭 小池 孝之……………	45
<第3分科会>		
自由バズを取り入れた校内授業研究	三重県一志町立波瀬小学校教頭 吉井 秀人……………	49
自らの生き方を考えさせる道徳指導ー話し合い活動を生かして	愛知県春日井市立西藤山台小学校教諭 畠山 明美……………	59
一人ひとりの子どもの個性を引き出し「育て→高め→広げる」バズ学習	兵庫県尼崎市立園和北小学校教諭 市来 初義……………	69

<第4分科会>

英語における協同学習の姿 新潟県新潟市立大形中学校教諭 井上 哲郎…………… 75

英語科のスクランブル学習－英語科におけるバズ学習の活用
岐阜県中津川市立坂本中学校教諭 可知 達也…………… 83

バズ学習を取り入れた人権教育
－ディスカッションを中核に据えた社会科授業を通して
愛知県春日井市立南城中学校教諭 堤 泰喜…………… 91

<第5分科会>

バズ学習を取り入れた保健体育科（球技）の指導法の工夫
東京都青梅市立第一中学校教諭 堺水尾祐文…………… 101

保育の授業を通して「こころ」を育てる
菊華学園菊華中学高等学校教諭 朝日 啓子…………… 105

発展的なバズ学習による多様な学習形態の工夫
岐阜県土岐私立泉中学校教諭 橋本 勇治…………… 110

<第6分科会>

生徒一人一人が生き生きとして楽しめる授業－いじめ対策とバズ学習
東京都清瀬市立清瀬第四中学校教諭 田中 博…………… 121

<第2日 全体会>

分科会報告 東京都調布市立第五中学校教頭 根深 得英…………… 131

阪神大震災からの報告 兵庫県尼崎市立武庫北小学校校長 谷口 寛二…………… 133

記念講演：学校は変わるか 東京大学教授 藤田 英典…………… 135

全体会(問題提起)

学校は変わるかー3年間の授業公開週間を通して

齊藤 進 (東京都文京区立第六中学校教諭)

バズ学習ーその理論と実践、今後の展望

杉江 修治 (中京大学教授)

司会者

木村 幸夫 (東京都豊島区立道和中学校校長)



学校は変わるかー 3年間の授業公開週間を通してー

東京都文京区立第六中学校教務主任

齊 藤 進

1 はじめに

「教育は、公開が原則」本校校長の教育理念の1つである。

現在、東京都の今日的課題として、公立学校の危機があげられる。公立より私立を志向する傾向が近年急速に高まり、出生率の低下と共に公立校における生徒数の確保が問題となっている。都民の生活水準の向上や少子化、そして学力偏重などを時代背景として、保護者の教育に対する目は厳しく、今や学校が選ばれる時代になっている。こうした傾向は周辺地区より都心部の学校ほど極めて強い。

これを校長は「教育の都市化環境現象」と言っている。

- ①交通が便利である。
- ②選べる学校が周囲に幾つかある。
- ③親に経済的な能力がある程度備わっている。

こうした3つの条件が揃ったとき、私学を選択するのであろう。

保護者・地域の支持を獲得し、公立中学校を再生させるためには、公立中学校の実態をはっきりと公開し、評価してもらうことが大切である。批判をおそれず、あらゆる人々の道理にかなう意見であれば、必ず取り入れていくという学校の姿勢は活性化を生む。活性化は批判の精神から生まれてくるものであり、賛成の精神からは生まれてこない。地域には地域の、保護者には保護者の意志を発言してもらうこと、それが公立学校活性化の第一歩である。

学校を公開するとなればそれなりの工夫や努力も必要となってくる。その過程で学校の中だけでしか通用しない常識と共有されてくるのである。

公立には公立の意義がある。遅く生きる力をつけるためには、公立が最適である、と私どもは思っている。

- ①いろいろな子供がいることにより、それぞれの人を理解し、自分を生かしていける。

②個性を確立させながら、社会を勉強できる。

このような公立学校の良さを我々は十分認識し、公立中学校の生き残りをかけて、教育活動をアピールしていく必要がある。現状を踏まえ、今こそ公立中学校は「魅力ある学校づくり」に努めなければならない。

2 なぜ授業公開か (開かれた学校づくりを目指して)

今、世間では公立学校というと「いじめ」「不登校」「体罰」「校内暴力」などの深刻な問題に直面して、授業も満足に成立せず、とても保護者が安心して子供を学校に預けることができない状況だと受け取られているふしがある。本校でもこうした疑いの目がないわけではない。そこで、「なるほど良くやっている」と保護者・地域の信頼を得るために授業公開週間を設け、始業時から放課後まで、学校の教育活動の全てを毎学期1回ずつ1週間にわたって公開することにした。公開の対象は、本校並びに地域小学校の保護者、地域住民、近隣の小中学校の教師などあらゆる層の方々である。

授業公開のねらいは、こうした開かれた学校づくりを目指していくことと教員の意識改革を図りながら資質を向上させることにある。年間1回程度の授業参観で、教員の資質向上は望み得ない。長期の公開授業によって多くの人々に厳しく観察され、授業者自身が教材研究への妥協のない勉強の必要性を理解することと、生徒理解・生徒指導の実践に磨きかける必要性を知らせることが資質向上になくってはならない。

校長は常々「名コーチあるところに名選手あり」と言っている。すなわち教職員が良ければ必ず良い生徒が育つ、という考えである。外部に教育活動を公開することによって、「本校教職員は頑張っています。本校生徒はこんなに育っています。」という姿を見せていくことが学校の閉鎖性を打破し、教師の資質を向上させ、公立学校の活性化に結びつくのではないだろうか。

3 授業公開の実践

平成6年度から、各学期に1回ずつ1週間にわたり、始業時から放課後まで、学校の教育活動の全てを公開している。下記の日程と時程および授業の時間割等の案内を以下を対象に通知した。

- ・本校保護者 ・地域小学校 5, 6年生の保護者 ・地域町会長 ・地域ご老人
- ・地域小学校教職員 ・区校長会およびP T A ・地区教育研究会 ・区教育委員会

◇平成8年度 1学期の授業公開週間

6月10日(月)

6月11日(火)

6月12日(水) 校内研修会(3年生研究授業)

6月13日(木)

6月14日(金)

◇平成8年度 2学期の授業公開週間

11月10日(日)日曜授業参観日 学級懇談

11月11日(月)振替休業日

11月12日(火)新入生保護者会

11月13日(水)校内研修会(2年生研究授業)

11月14日(木)ふれ合い給食 3年生進路説明会

11月15日(金)バズ学習全国大会

◇平成8年度 3学期の授業公開週間

1月27日(月)

1月28日(火)意見発表会

1月29日(水)校内研修会(1年生研究授業)

1月30日(木)国際理解講座

1月31日(金)

4 反響

授業公開週間に対しては、初年度から大きな反響があった。地域から学校の姿勢を支持する多くの声はもちろん、過去2年間に、読売新聞、朝日新聞、講談社、朝日ウィークリー、週間教育プロ、等マスコミ各社の取材があり、それぞれ大きく取り上げられた。また本年度はNHK朝のニュース番組「おはよう日本」で4月と7月の2回にわたり、教育の情報公開という方針でクラス編成についての学年会議や授業公開の様子が放映された。引き続き今後においても放映される予定である。

次に、本年度1学期の授業公開週間に訪れた参観者の声を紹介したい。

(1) 本校の教育推進の在り方について

(本校保護者の意見から)

- ①全面的に賛成である (39%)
- ②だいたい賛成である (47%)
- ③特に取り上げることはない (6%)
- ④検討の余地がある (8%)
- ⑤方向性に大きな疑問がある (0%)

(全体の意見から)

- ・公開週間やボランティア活動など、地域との関わり、開放を高く評価しています。子供たちの元気、活気がもっと高まることを期待します。
- ・オープンにすることによって、教師・生徒のやる気につながると思います。全面的に

賛成というのはむつかしいと思います。今日見せていただいた限りでは数年前よりずっと先生方が先生に見えます。それぞれに個性を持った授業をしてくださっていますこれからもずっと良い個性を生かして下さいますようお願いいたします。

- ・区立中学の存在復活のためにも我々、先生方、生徒ともにがんばりたいと実感しております。
- ・“公開”の姿勢が一番評価できると思います。校長先生の人格、教育方針によるところが大きいと思いますが、この姿勢や方向性を六中の伝統として根づかせていくことを切に望みます。

その他多数

(2) 指導者について

(本校保護者の意見から)

- ①良くやっている(87%) ②努力しているが課題あり(10%) ③課題あり(3%)

(全体の意見から)

- ・3-A音楽 熱意が伝わり子供たちが大好きだという理由(様子)が分かりました。
- ・1-A体育(女子) 体育の時くらい整列などきびきび号令に従ってやらせてもよいのでは。子供がダラダラしている。

音楽 たのしい授業だった。こうして音楽に興味をもってくれるとよいと思った。

英語 声が小さい。初めての英語の授業なので教室中にひびくくらい大きな声で発音してほしい。早口なので少しゆっくりと。

数学 先生の穏やかなお人柄のあふれる授業でした。女子をもう少し活性化してほしい。

- ・2年理科 理科は理論の筋道や考えるプロセスを大切にする学問だと思います。いろいろな発想がより多く出てくることが望ましく、そういう考える場を提供することで学力が育っていくものと思われます。画一的な答えを期待すると創造的な力が育たなくなると思います。先生の対応に心配が感じられました。
- ・3年社会 現代社会に興味を持つように今日の授業(終戦)はとても重要とされます。これから卒業し、社会生活を営む上で、また選挙のとき投票に行けるよう、色々な問題意識を持つような人間になってくれるよう望んでいます。社会は重要な科ですこれからも(生徒の聞く態度が先生の努力にむくいているかどうかは不問として)このような熱心な努力(先生の)が、社会をより良い方向に向かわせると信じています

(3)教室環境について

- ・全体的に古いというか汚い。これはお掃除ウンヌンということではなく、区の問題かもしれないが、早めに建て直すとかしないとみっともない。
- ・外観より教室は思ったよりきれいに使われていると思います。
- ・ソフトウェアの変化に対してハードウェアが余りにも旧態依然としているのでおかしいくらいです。先生方がやりやすいようにどんどん希望を出されて、予算を要求なさるようでしたら、署名でも何でも協力させていただきます。
- ・玄関前の花壇がすばらしいと思います。
- ・古い校舎ですが、使っている所は手入れがされている様子がわかります。また、生徒減少の折、使用されていない教室の改善や別な使用方法について生徒たちの意見を多く取り入れて見直して行って頂きたいと思います。

その他多数

(4)生徒の様子・感想

- ・1年 とにかく投げやりな態度の子供が多くてびっくりしました。何が悲しくて12～13歳であんなに投げやりになってしまうのでしょうか？ 授業中行儀が悪い子供が多いのにもびっくりしました。行儀は家庭のしつけだと思います。保護者会の時などにこの点を取り上げて学校と家庭で協力して子供を変える必要があるのではないのでしょうか。
- ・生き生きとして素晴らしかったです。授業の後で歌いながら廊下を歩いている生徒を見かけたのは初めてでした。
- ・廊下で生徒に会うと知っているお子さんでなくとも挨拶してくださる生徒が多いので感心しております。

その他多数

(5)その他

- ・生意気盛りの子供たちを指導していく毎日は本当に大変だと思います。種類の行事や部活、日々の生活に実際生き生きと取り組んでいる姿が見られ、先生たちのご指導に本当に感謝しております。より一層の発展の余地があるとすれば、授業をもっともっと面白くする工夫をしていくことだと思います。平易でしかも質の高い授業、生徒も教師も楽しみな授業を是非目指して行ってください。
- ・3年生の選択授業は少人数できめ細かい授業ができそうで楽しみです。

- ・子供たちが伸び伸びした授業風景でホットしました。
- ・とても分かりやすい授業でした。子供たちも先生の講義を一生懸命に聞いていて、自然に引き込まれている様子が感じられました。

その他多数

以上は多数のアンケートの中から、主に好意的な感想・意見と課題となる感想・意見を抽出したものである。本校の教育推進に対してはおおむね好意的であるが、授業への手厳しい注文や批判も多く見受けられた。

5 まとめ

今年で3年目を迎える授業公開週間も始めるに当たっては教員の中に少なからず抵抗があったのも確かである。こうした教員の懸念や不安については授業改善をテーマとした校内研修会を通して教員の意識改革を図った。

回収したアンケートはそのまま教員に回覧している。直接名指しされ、批判を受ける場合もある。しかし、公立中学校を再生させるためには批判をおそれず、道理にかなう意見であれば必ず取り入れなければならない。「チョーク1本に黒板」の旧態依然の授業からは、次代を担う生徒の育成は難しい。教師自身の意識改革と技術改革なくしては、授業公開週間の充実はありえない。

アンケートを見るかぎり、未だ授業改善がきびしく図られているとは思えない。新しい指導技術を取り入れながら、さらに研修を深めていくことが今後の課題となる。

最後に、読売新聞に掲載された本校 有元校長の発言を紹介し、締めくくりとしたい。「ずっと見られているのが大変なのはわかる。見せるための工夫も必要でしょう。批判も承知でさらけだす勇気を持つべきです。そこから教師としての哲学や信念が生まれる。」

バス学習－その理論と実践、今後の展望

中京大学教授

杉 江 修 治

1 バス学習の理論

(1) バス学習の歴史

大勢を対象とした講演会などで、その途中に聴衆を少人数のグループに分けての話し合いを導入すると講演内容の定着が良いというグループ・ダイナミックスの研究が日本に紹介されたのは、戦後数年を経てのことであった。話し合いがはじまると、会場は人々の声のうねりで満たされ、それはあたかも蜜蜂の巣箱近くの羽音のうなりを聞くように感じられることから、蜂の羽音を表わす buzz という語を用いたバス・セッションと呼ばれる技法となった。

1950年代に入り、系統学習へと授業が移っていったとき、このバス・セッションを一斉指導の授業の中に技法として導入しようという試みがなされるようになった。今だに多くの教育学辞典などで紹介されている「バス学習」は、その当時の、技法としてのバス学習である。

バス学習が広く知られるようになったのは、故塩田芳久名古屋大学名誉教授が、1962年に著した『バス学習方式－落伍者をつくらぬ教育』によってである。全国バス学習研究会が30余年を重ねて実践的、理論的検討を重ねてきたバス学習は、辞典に記されているような単なる技法ではない。塩田教授による実践化、理論化の当初から、それは人間の学習の原理の追求という方向性をもった教育理論であった。

(2) 人間の学習の原理からの指導論

バス学習の基本は、「人間関係は教育の基盤である」という考えにある。人が成長、発達する過程は人間関係と共にある。人は、信頼に支えられた人間関係の中で最も意欲づけられる。他人は最も貴重な情報提供者である。学校教育の原理はそのような人間の発達と学習の原理と違うものだろうか。人は「教え込む」から学習をするのではなく「学ぼうとする」から学習が起きる。教え込むことだけに留意することで、教師から生徒への「教え方」ばかりに目が行き、学校における学習指導が特殊化されているという側面が今非常に強くはないか。学校での子どもの発達の援助に際して、人間関係という基本を強調するこ

とは意義あることといえよう。バズ学習では小集団による話し合いをしばしば導入するが、その話し合いがあるからバズ学習なのではない。人間関係という教育環境を効果的にする工夫として、話し合いが考えられる場面が多くあるということなのである。

バズ学習ではまた、「認知的目標と態度的目標の同時達成」を当初から提唱してきた。教科の学習でも、子どもたちは同時に、教科に対する興味・関心というような一般的な構え、他人の意見を聞く態度、意見発表の仕方、同級生との人間関係の持ち方、成人モデルとしての教師の観察など、さまざまな事柄を学習する。当然のこととして生じる同時学習を、教師が指導目標として明確化することは、子どもたちの学習を豊かにし、意味あるものにする有力な手立てとなるだろう。

バズ学習は「学習指導過程における統合性と一貫性」を図ろうとしてきた。競争と協同を場面に応じて使い分けることは、教師はできたつもりでも子どもたちには混乱しかもたらさない。学年、教科・教材、指導の領域、を通した統合性と一貫性があるこそ、子どもたちの落ち着いた、持続的な学習意欲が開発されよう。

学校教育に生かす発達と学習の原理は、個々の教師の中で追求され続けられるべきものである。また、それはバズ学習に関わる研究者の課題でもある。バズ学習では効果的な学習指導の条件を求めて多様な実践的、実証的研究成果を生み出してきた。それらの中でも、アクション・リサーチという方法で、実践場面での実証的研究を生み出してきたことはひとつの特徴となっている。また、そのような研究の構えは、教師の普段の実践に際しても、それが「研究的実践」であるべきだという主張（丸山 1996）につながっていく。

(3) 今求められる学力とバズ学習

変化のきわめて大きな現代に求められている学力には、一人一人が生きる基礎的な力に加えて、生涯にわたって意欲的に自ら学習しようとする態度と、そのための技能がある。人は本来さらなる自身の成長を求めるものである。学校にはその本来的な傾向性をさらに促す働きが求められる。

人間性の原理にそった学習指導場面では、子どもたちは意欲を削がれることはない。協同的、主体的な学習場をさまざまに提供される過程で、学習技能も習得されていく。統合性を持ち、一貫した学習指導経験により、子どもたちは場当たりのでない学習態度を身につけることができる。

なお、近年、子どもの「個」を強調する論調が強い。「個を生かす」「個性を伸ばす」等々。しかし「個」は誰が生かすものなのか、「個性」は誰が伸ばすものなのか。近年の

論調には、子どもの個人差にのみ注目したものが多い。特定の学習領域の得意なところがさらに得意になるように援助することだけが個性を生かし伸ばすことなのだろうか。

子どもには個性と呼ばれる個人個人の相違以上に、共通する「人間性」の側面があることを忘れてはならない。人間性に目を向けた教師の働き掛けの過程で、子どもたちの相互作用と学習活動が生起し、そこに次第に個性が現われていくという図式が本来の個性化教育なのではないだろうか。教師主導の個性化教育は、「助長」の故事の轍を踏むことになるように思うのである。

2 バズ学習の実践

(1) バズ学習による授業モデル

バズ学習に特定の方式はない。人間関係を教育の基盤に据えた教育実践ならば、それが講義中心の一斉指導であってもバズ学習と呼んでさしつかえない。完全習得学習はその学力観に特徴があり、そこでの基本的な考えの実現に向けた多様な実践努力を完全習得学習と呼んでいる。バズ学習と類似の立場である。

とはいえ、完全習得学習でも、一部に習熟度別形態を導入したモデルが知られているように、バズ学習もこれまでの成果を取り入れたモデルを持っている。ただ、それはそのまま真似をすべきルールなのではない。教師が、子どもの状態、学級集団の特性、教科・教材の種類、教師自身の教育観に照らして応用を図るべきものであることは断っておきたい。ここでは「単元見通し方式」を紹介しよう。

単元見通し方式の特徴 この方式では、単元のような数時間から十数時間分の学習のひとまとまりを単位として計画を立てる。さらにその学習計画を子どもたちに予め十分に伝える。このことによって、教師も子どもたちも何を学ぶのかの共通認識ができる。目標が明確であることは学習意欲を喚起する重要な条件であるし、学習者の自己評価の大切な手がかりとなる。

なお、学習すべき内容は、指導目標から学習課題という形へ、子どもたちに理解できるように翻訳したものでなくてはいけない。子どもたちが何を学習すべきかをどれほどはっきり認識しているかが学習に大きな影響を及ぼす。「課題のないところに学習は存在しない」（塩田 1989）のである。

単元第1時間目 第1時間目は学習計画の解説に重点を置く。すぐに内容に入らないこのやり方は、時間の無駄のように思われるかもしれない。しかし、このステップはきわめ

て有効なもので、ぜひとり入れたい。実証的研究でもその有効性は確かめられている。とくに低学力の子どもたちには好評な指導ステップである。

第2時間目以降 教材に応じた指導の工夫を行う。ただ、折に触れ子どもたちの相互作用を促す機会を設定することが望ましい。

グループでの話し合いでは、まず、個人思考の時間をとり、個々の子どもが課題を理解し、自分の意見を持ってグループに臨むという形をとるのが一般的である。話し合いは、時に確認だけの短時間のものもあろうが、できれば十分な時間、子どもたちの主体的な学習活動が保障され得るような時間をとることができれば望ましい。サイズの大きい課題を準備することが相互作用のメリットを生かす手立てとなる。

グループでの話し合いの後、教師が司会者となって話し合いの内容を学級に出させ、全体討議を図る。最後に教師がまとめを行う。必要に応じて確認の話し合いをグループにもどす。

グループの編成 一般的には4～6人で編成する。学力を含むさまざまな特性で、できるだけグループの中が異質である方が効果的である。能力等質のグループは、それが高い者同士のものも低い者同士のものも効果的ではない。また、いわゆる仲良しグループをそのまま編成することはしない。

話し合いの司会者など、リーダー的役割は持ち回りとし、固定的なリーダーを作らない。リーダーシップをとる経験も同時学習の重要な内容である。消極的な子どもがリーダーになった場合は、仲間からの援助が与えられる関係を作っておくことが必要になる。

グループで培った人間関係を学級集団に広げていくために、編成替えも1学期に複数回行なう必要がある。

単元最終時 最終時には単元全体のまとめが必要になる。教材に応じたさまざまな工夫が要求されよう。この段階で、単元目標が個々の子どもに十分達成されたかを検討するための、また、子どもたち自身が自己評価できるための、形成的な評価機会を設定することが望ましい。

(2) バズ学習の幅広い実践展開

教科学習以外の指導場面でのバズ学習の原理の実践的適用は、統合性、一貫性を唱える立場から、当然多い。その幾つかを簡単に紹介し、バズ学習の原理の実践への幅広い適用可能性を見てみよう。

クラブ活動・部活動 クラブ・部活動で、信頼に支えられた人間関係の形成を図り、子

どもたちの主体的な運営を通して、対外的な成果も同時に上げていった事例が幾つか報告されている。『バズ学習方式』の八開中学校、兵庫県の日新中学校の実践がよく知られている。

非行への対応 非行への対応は、対症療法的なものでは根本的な解決はないことは明らかである。教師と子ども、子ども相互の間で、互いの成長を願っているという信頼感に支えられた人間関係を、学級、学校に作り上げていくことが必要である。バズ学習の原理を学校教育のあらゆる場面に一貫させ、さらには地域でのバズ学習までも実現させていく過程で非行を克服していった姫路市高丘中学校の事例は興味深い（永井・杉江 1995）。資料1に当時の実践を要約した新聞記事を付す。

地域の諸問題への取り組み 瀬戸内海の離島、豊島と大崎下島にある広島県豊浜町と豊町では、産業活性化への地域づくり、そして根強く残る同和問題への取り組みとして、学校教育に期待をかけ、2町内の1高校、2中学校、6小学校、2幼稚園の教職員全員参加による「豊高校区教育推進協議会」を設置し、人間関係を基盤とした教育実践を重ねる試みをした。人が人として生きるための基礎づくりにバズ学習の原理が意義を持つ。そこには人間の生きる原理の大切な部分が含まれているように思われるのである。

3 協同学習とバズ学習

(1) 協同と競争

バズ学習は競争を排除する。ただし、競争と協同という2つの用語の意味を正しく理解した上でこの文言を評価してほしい。

競争は競い合うこと、協同は助け合うこと、という理解が一般的であろう。しかし、このように、集団活動のプロセスに注目した意味づけは、協同と競争の本質を理解するには適切ではない。グループ・ダイナミックスでは競争と協同を活動のゴールの違いとして定義している。競争は最終的に序列づけが行なわれる事態をいい、協同は全員が同時にゴールに着ける事態をいう。教育的に表現しなおせば、協同は仲間一人一人の伸びを互いの喜びとし得る事態であるといえよう。

バズ学習では序列づけをゴールとするような学習事態は作らない。学級のメンバー一人一人の成長を互いの喜びとする学習事態を一貫させる。なお、良きライバルと競い合い、共に伸ばし合う切磋琢磨の場面は、実は協同事態なのだという理解が必要である。時に取り入れても良いといわれる競争は、競争的な見かけをもつ協同なのである。

(2) 協同学習の現況

わが国では、「個に応じた指導」が強く言われて以来、個別指導に研究的、実践的関心が集中している。しかし個に応じた指導方法は個別指導だけなのだろうか。あまりに短絡的に結びつけてはいないか。時にそれは指導に重点が置かれ、本来の主役である学習者の心理に沿わないものとなっている場合も多い。「集団を通して個を生かす」というような観点に対する感受性がなかなか見られないように思われる。

さて、しかし、わが国の動向とは異なり、諸外国では今、最も関心を呼んでいる学習指導法は「協同学習 (Cooperative Learning)」である。アメリカ合衆国のような、子どもの生活背景が多様であり、しかも個人主義的な考えが強い文化を持つ国でさえ、学校における子どもたちの援助の方法として協同の原理の重要性が高く評価されてきている。そこで協同学習の実践の積み重ね、研究書の刊行は日本をはるかに凌ぐものとなっている。協同学習の広がりはいわゆる予想を超えて広がっている。最近出された 'International Journal of Educational Research' の目次を資料2として示しておく。

(3) バズ学習の原理の可能性

バズ学習の原理は、諸外国の関心を強く引く協同学習の原理と基本的に共通している。文化を越えて教育にとり入れられる協同の原理は、集団主義的といわれる日本に固有のものではなかった。それは人間発達の原理であるというさらに大きな意義が認められる。バズ学習の原理から教育に接近することは、自ら成長、発達をしていこうとしている子どもたちを支える教育活動の方向として、十分評価できるものではないだろうか。

終わりに、塩田教授が1987年に東京都清瀬市立清瀬第5中学校で開催された第22回全国バズ学習研究会の講演で述べられたことばをあげておくことは意味あることと思う。

「差異の強調でなく、共通性への着目を」 / 「排除の論理でなく、共存の論理を」

文 献

- 丸山正克 1996 仲間との絆を育てるバズ学習のすすめ (株)みらい
永井辰夫・杉江修治 1995 非行をのりこえたバズ学習の事例 中京大学教養論叢 36
-1, 201-242.
塩田芳久 1962 バズ学習方式：落伍者をつくらぬ教育 黎明書房
塩田芳久 1989 授業活性化のバズ学習入門 明治図書

資料1 姫路市立高丘中学校の非行克服の実践概要

<神戸新聞 1967年5月29日>

地域をめざめさせた中学：姫路市立高丘中学の二年の歩み

家庭と学校と地域社会の連携を進めようという「三つのコンビ、一つの広場」を兵庫県教委が提唱してことしは二年目。この運動にとって示唆するところ多い一つ的话题を提供したい。それは姫路市高丘中学校の二年間の歩みである。

「せめて授業だけでもなんとかまともにできる学校にしたい」——これが当時の願いだったと、鈴木武士校長が回想している。毎年警察に捕導される生徒が三十人前後、集団非行、窃盗、飲酒、家出など。校内でも「野生化した犬」のような非行生徒が荒れ回り、授業の妨害、施設の破壊をはじめ、しばしば先生にも暴力をふるった。これだけいえば大体の様子は察しがつこう。暴力教室はどこでも同じだ。

ウミがたまりにたまって、やがて爆発的な事件が起こるのもたいがい同じで、高丘中学の場合もいわゆる「二月事件」が起こった。昭和四十年二月のことである。この事件には同和問題がからんでおり、ある先生の差別的な言動を憤った生徒たちが強引に生徒大会を開き、包丁をもってつめより、先生をつるしあげた事件である。さすがにこれは各方面にショックを与えたが、これを聞いてもだれ一人学校へやってくる親もないというPTAだった。この事件をだれよりも深く反省の契機にしたのが先生たちだったことが、その後の再建に大きな意味をもつ。

先生たちの反省、研究、討議が重ねられた。あきらめムードに支配され、勇気と努力に欠けていなかったか、同和教育と民主教育をどうかみ合わせるか、学習の場が個人を伸ばし、人間関係や集団を高める場にならずして、生徒指導ができるか、バラバラな親たちと地域社会、力強いPTAをどう目ざめさせるかなど、問題はうんとあった。先生が分かれて参考になる他府県の中学を見学にもいった。講師を招いて話も聞いた。こうしていよいよ地域ぐるみの学校再建運動がスタートした。まず、校長、教頭が率先して校区内の一六町にでかけ、町別懇談会を開いた。開校以来のことである。これが四十年六月から八月までかかった。先生の方は洗いざらい学校の現状を話し、親もつもりつもった感情をぶちまけ、会合はしばしば深夜に及んだ。効果はあった。パイプが通りはじめたのである。PTAの出席率が九十%に高まり、通学路の改修に乗り出す地区が出てきた。

一方、生徒に対しては四十年十月から学年別に嬉野公民研修所で二泊三日の集団宿泊訓練をはじめた。生徒の結束や、士気を高めるうえでこの効果は大きかったようだ。その後昨年、ことしと年中行事になっている。日常の学習活動で、注目すべきは、バズ・セッションを学習に取り入れたいわゆる「バズ学習」を実施したことだ。いかにこれまで取り残される生徒が多かったかという反省からで、一人一人を

生かし、もれなく役割を持たせ、人間関係を深め、集団を高めるねらいで、学習と同時に生徒指導でもある。

もっとも大きい特色は「町別バズ学習」である。これも町別懇談会を重ねたうえ、四一年三月に発足し、六月に全町がそろった。町ごとに一週間一回二時間、各町の公民館に生徒たちが集まり、当番の父兄の監督のもとに一週間の復習中心のバズ学習をやる。生徒間の人間関係の深まりだけでなく、親同士が協同で地域の子を守り合う気分を育てた。公民館のなかった町がこの活動をきっかけに公民館をつくった。これらの地域ぐるみの再建運動でさしもの非行も影をひそめ、昨年警察に補導された生徒は二人、学校は見違えるほど明るくなった。もちろん、よいことばかりでなく、地域に批判的な意見もある。本年の高校入試では名門校への入学者が例年より少ない不満の声も出た。つまりバズ学習は低い者を引き上げる効果はあるかわり、高い者を犠牲にしていないかという疑問である。これにどう答えるかも無視できぬ課題である。まだいまだに小学校段階からこの学区を避ける越境者が多い。これも長い努力の必要な地域課題だろう。しかしたしかに学校が地域を目ざめさせつつある。はなやかな成果はないかわり「地すべり」のようなほんもの前進が感じられる。何より大きいのは先生が一体となって再建に取り組んだことだ。本年四月の異動で二五人の職員中十一人がかわったが、さっそく職員の一泊研修をやっている。一人、二人の名人より全体のチームワークの大切さを改めて教えられる。

姫路市内とはいえ、戦前は全くの農村地帯だった。それが姫路市の発達につれ、急激に都市化の波に洗われた。父親は勤め人になる。新しい人口が流れ込む。家庭も学校も地域社会も生活意識や価値観の混乱の中にある。そこに新しい秩序、新しい共同体意識をだれが育てるか。どこにも通じる示唆があるはずだ。



Pergamon

Int. J. Educ. Res., Vol. 23, No. 3, pp. 191-300, 1995
Copyright © 1995 Elsevier Science Ltd
Printed in Great Britain. All rights reserved
0883-0355/95 \$29.00

0883-0355(95)00003-8

COOPERATIVE LEARNING IN CULTURAL CONTEXT

BARBARA J. SHWALB and DAVID W. SHWALB
(GUEST EDITORS)

Nagoya Shoka University, Sagamine, Komenoki-cho, Nisshin City, Aichi-Ken,
470-01 Japan

CONTENTS

	GUEST EDITORS' PREFACE — Barbara J. Shwalb and David W. Shwalb	195
	Organization of the Volume	195
	The Goals of this Volume	195
	References	196
CHAPTER 1	INTERNATIONAL PERSPECTIVES ON COOPERATIVE AND COLLABORATIVE LEARNING: AN OVERVIEW — Neil Davidson	197
	Background	197
	Research Base	198
	International Network	198
	The Present Volume	199
	References	200
	Biography	200
CHAPTER 2	COOPERATIVE LEARNING IN GERMAN SCHOOLS — Gunter L. Huber	201
	Abstract	201
	Background: The German School System	201
	The Fate of CL Over the Past 25 Years	203
	The Current State of CL	206
	Necessary Changes in Research and Implementation	208
	Cooperation and Work: A New Start?	209
	References	210
	Biography	211
CHAPTER 3	COOPERATIVE LEARNING IN JAPAN — Shuji Sugie	213
	Abstract	213
	Positive Applications of Cooperative Small Groups	213
	Principles of CL in Japan	214
	Cooperation in Wide-Ranging School Activities	215
	Cultural Change and the Development of CL	216
	Cultural Receptivity Toward Cooperation in Japan	218
	CL and the Educational System in Japan	220
	The Future of CL in Japan	222
	Future Prospects	223
	References	223
	Biography	225

CHAPTER 4	COOPERATIVE GROUP WORK: A PERSPECTIVE FROM THE U.K. — Helen Cowie	227
	Abstract	227
	The Three Approaches to Cooperative Group Work	227
	Strand One: The Growth of the Person	229
	Strand Two: Learning through Talk	230
	Strand Three: Social and Political Change	232
	Conclusions	235
	References	237
	Biography	238
CHAPTER 5	COOPERATIVE LEARNING IN AN AFRICAN CONTEXT — Cedric A. Taylor	239
	Abstract	239
	Historical Background	240
	South Africa	244
	Summary	252
	References	252
	Biography	253
CHAPTER 6	COOPERATIVE LEARNING IN LATIN AMERICA: A PERSPECTIVE FROM THE ALTERNATIVE EDUCATION EXPERIENCE — William Brown and Pamela Bohrer Brown	255
	Abstract	255
	Introduction	255
	The Concept of Culture in the L. A. Context	256
	Alternative Education in L. A.	257
	Comparing CL and Alternative Education	258
	Formal vs. Alternative Educational Models	258
	Reality and Educational Practice	260
	Cooperation, Competition and Alternative Education	261
	Popular Sayings and Dominant Culture	263
	Cooperation and Affirmation: The Challenge Ahead	264
	References	264
	Biographies	265
CHAPTER 7	COOPERATIVE LEARNING IN ISRAEL: HISTORICAL, CULTURAL AND EDUCATIONAL PERSPECTIVES — Rachel Hertz-Lazarowitz and Tamar Zelniker	267
	Abstract	267
	Introduction	267
	Ancient Roots of SGT in Judaism	268
	Humanistic and Socialistic Values in the Israeli Society	269
	A Changing Society: Centralization of the Educational System	270
	The Small Group Teaching Project: A Major Breakthrough	271
	Imported Cooperative Learning Methods	273
	Cultural Considerations	275
	SGT Today and Reflections on the Future	276
	References	279
	Biographies	281
CHAPTER 8	COOPERATIVE LEARNING IN THE HETEROGENEOUS ISRAELI CLASSROOM — Hanna Shachar and Shlomo Sharan	283
	Abstract	283
	Introduction	283
	Heterogeneous Classrooms: Some Critical Characteristics	285
	Impediments to be Overcome	290
	References	291
	Biographies	292
CHAPTER 9	COOPERATIVE LEARNING IN CULTURAL CONTEXTS: AN INTEGRATIVE REVIEW — Barbara J. Shwalb and David W. Shwalb	293
	Abstract	293
	The Research Findings	293
	Cultural Contexts	296
	Research vs. Advocacy	298
	Implications	298
	References	299



第1分科会

研究的実践のすすめ

丸山 正克 (元愛知県豊川市立天王小学校教頭)

助言者

梶田 正巳 (名古屋大学教授・全国バズ学習研究会研究者代表)

猪爪 貴保 (東京都江戸川区立鹿骨中学校校長)

司会者

阿部 吉一 (愛知県春日井市立神屋小学校校長)

記録者

榎本 輝之 (東京都文京区立第六中学校教諭)



研究の実践のすすめ

元愛知県豊川市立天王小学校教頭

丸山正克

1. まえがき

中教審の答申が発表されたが、その核となっている「生きる力」を、「学ぶ力」と置き換えることが出来る。

常に目標を持ち、その実現のために最大の努力し、結果を反省し評価して、再び、新しい目標を設定して努力をするのが、生きる力であると説明されている。人が生きるということは、生きる目的と知恵を獲得する行為である。そこから、「学ぶ」ということを取り去ることは出来ない。

今、私たちは、好むと好まざるとにかかわらず、社会の中で生活している。他の人とのかわりを拒否することは出来ない。その中で、お互いに情報を交換して、それぞれの人が、それぞれの生きる力を発揮し生活を営んでいる。そこには必然的に「人間関係」と「相互作用」が生まれる。その道具が言語であり、手法が「話し合い」である。

2. バズ学習はナチュラルである

バズ学習は、人間関係と相互作用を重視している。極めてナチュラルであると共に、この方法でよりよい関係をつくり上げていくという目的も内蔵している。従って、バズ学習は方法であり目的であると言うのが、私の主張である。

子どもをよくしたい、よい学級をつくりたい、一人ひとりを大切にしたい、授業で勝負したい・・・教師であれば、誰でもが願うことである。最近では、個性尊重が重視され、個人をとりまく集団の人間関係の形成が、その陰に隠れてしまったような印象が強い。しかし、いじめの問題がクローズアップして、再び人間関係が注目され始め。

個性は、集団の中で認められ発揮されるという性質のものである。絶海の孤島で、たった一人で生活する人間に、個性尊重が成り立たない。

3. 統合と同時学習

バズ学習は、集団と個の関係に着目している。よりよい集団は、よりよい個の形成に貢献し、よりよい個は、よりよい集団の育成に貢献すると考えている。また、これを同時に具現しようとしている。統合と同時学習である。

これは、バズ学習の独壇場ではない。恐らく誰でも日常実践していることである。みんなに迷惑をかけるな、勝手なことをするな、協力しなさい等、集団の中の個のあるべき姿、集団のあるべき姿を、その都度、子どもの実態に即応して、具体的に指示している例である。しかも、授業中に最も多くみられることである。

4. 授業と相互作用

そこに着目し授業を見直すと、2つの目標を持を設定していることになる。1つは、教科の目標で、極めて計画的に立案され指導が行われる。他の目標は、必ずしも計画的ではないが、状況に応じた即時的に設定される。まじめに取り組み、人に頼るな、間違いを笑うな等、意欲や態度にかかわることが多。

前者を認知目標と言い、後者を態度目標と言っている。

バズ学習は、授業を核として、認知目標と態度目標の同時達成を意図している。従って、計画的でなければならない。その方策が「小集団による相互作用の重視」である。小集団を使うのは、人間関係を密にし相互作用を円滑にするためである。

小集団編成の方法は、大別すると2通りになる。その一つは、メンバーを固定する方法であり、他の方法は、授業過程で提示された課題に従って、その場で自由に組織する方法で、自由バズと呼んでいる。これは、中学校の教科担任が、担当教科の授業でバズ学習を実践するために提案されたものである。小集団の形態が異なるのみで、原理は異なるものではない。研究の中心は、三重大大学の市川千秋教授である。

バズ学習イコール話し合い学習とか、グループ学習と言われている。形の上ではほとんど知らない人がないほど普及したと言ってよい。「形の上で」断ったのは、相互作用の目的と方法を、自分の理論として構築しているかどうかということである。

相互作用という言葉は、教育現場ではあまり馴染みがない。ある目的を達成するために、相互に影響を与えながら活動する状態が相互作用と考えている。必ずしも話し合う、討議するとは決まっていない。一緒に操作する、お互いにチェックする、共同で作り上げるなど、その形態はさまざまである。活動を円滑にするために、会話が重要な役割を果たして

いるので、それを象徴して「話し合い」と呼んでいる。

相互作用には、評価活動が伴うことが多い。相手の考えを聞いたり、質問に答えたりしている間に、自分の発見したり、相手を理解したり、同一視の対象にしたりすることは、大方の人は経験しているはずです。ここが、個人の態度変容の動機付けの場である。話し合っている内容は、認知目標に関係あることであっても、その過程で感情的な影響を受けることが多い。同時学習が行われる場である。

5. 場の設定

同時学習が効果的に行われるような場を、授業過程に意図的に設定することは、認知目標の達成と重要なかわりがある。これまでの実践を総合すると、極めて原則的に次に示す段階に設定されている。

- ①導入段階 本時の認知目標を達成するためのレディネスの調整をする。
 - ・前時の学習内容の確認
 - ・本時の学習内容にかかわる情報の交換
 - ・前時で残された課題の整理確認・本時に必要な内容の練習など
- ②中心段階 理解促進あるいは拡大と習熟を図る。内容によっては2～3回設定することもある。
 - ・いわゆる指導事項の確認
 - ・学習事項の練習
 - ・意見・情報の交換
 - ・質問事項の整理
など、本時の目標達成を効果的にする活動
- ③整理段階 学習事項の確認と評価活動が行われる。
 - ・教師の指示にしたがって、内容を確認
 - ・質問事項をまとめて、次時の課題とするよう要求
 - ・ノートの点検
など。

これは、マニュアルではない。今までの実践をまとめると、このような傾向がみられるということである。

6. 評価活動

バズ学習の評価活動に「即時評価」というものがある。俗に「確認」と言われるものであるが、問題は、方法と基準の設定である。

「出来た人、分かった人は手を挙げなさい」この方法が間違っているわけではない。しかし、出来たとか、分かったということ判断する基準を、子どもが理解しているかどうか、また、教師自身が持っているかということである。

子どもがどう変わったとき「分かった、理解できた」と判断しようとしているのか、判断基準を持っているはずである。

教師の願いは、子どもの願いでもある。教師が理解させたいということは、子どもの分かりたいという欲求と同質である。判断基準を、子どもに示して、自己評価あるいは相互評価の機会を与えるべきです。

また、子どもを評価するということは、教師の自己評価でもある。そのためにも、判断基準は設定して置くべきです。

7. 期待する学力

学力として評価能力を育てることも、評価活動として重要なことである。生きて働く評価、子どもに役立つ評価の必要性が指摘されている。評価の結果も大切であるが、評価をすること、評価をしようとする態度の育成も大変重要なことである。

学力を次のように考えている。

- (1) 認知目標を達成することによって得られる知的能力
- (2) 所属集団を望ましい集団にしようとする技術能力
- (3) 目的達成のために自己変容を試みる意欲と評価能力

これが同時に機能するのが、学力であると考えてる。評価活動は教師の独占行為ではない。

8. 研究的実践としてのバズ学習

バズ学習は、バズ学習方式ではなく、子どもと教師が作り上げていく自由度の高い学習体制である。とはいえ、多くの実践を集約すると、結果的に法則に類似する経験則はある。しかし、これは血液型で性格を占うようなもので、結果論である。

ある実践者が構築した理論や方法は、その人が、目の前にいる子どもの実状に合わせて、子どもために創造した所産である。担任と子どもとのオリジナリティーである。それを、

何の関係もない子どもに当てはめようとするのは、子どもの存在を無視した授業に等しいものである。授業で勝負するとか、教育は創造であるというところには、借り物や模倣はないはずである。勿論、自分の理論と子ども実態をベースに、納得のいくものであるなら、おおいに参考にすべきである。

きょうの指導の結果を評価し、明日はどうすべきか、毎日、努力をしているはずである。私は、これを研究的実践と呼んでいる。自分は子どもに何を要求しているのか、子どもがどう変容することを願っているか、自分自身に問いかけてみるべきである。

子どもとともに創造するあなたのバズ学習は、子どもに理解されていなければならない。子どもと共通の目的意識を、常に持っていることが、バズ学習を成功させる鍵である。

9. 実践のために

ここで、改めてバズ学習の基本的な理念と原理をまとめてみよう。

- ①人間は、個人として存在するとともに、集団の一員としての存在である。
- ②望ましい人間関係の形成は、教育効果を高める。快適な環境の中では、リラックスでき自己実現への努力が期待できる。人間関係は生活の基盤である。
- ③教育は、認知目標の達成と態度目標の達成と志向している。それは望ましい個人を形成する基盤である。
- ④教育は、教師が目の前にいる子どもの成長を願い、子どもと目的を共通にし、研究に実践することである。
- ⑤常に具体的なイメージをもち、到達状況の確認を子どもと共通にすべきである。
- ⑥相互作用を重視し、認知目標と態度目標、個人の育成と集団の育成にかかわる事柄の、同時学習の機会を設定すべきである。
- ⑦バズ学習は教師と子どもとで創るフレキシビリティな学習体制である。したがって、方式や法則はない。

10. あとがき

拙著「仲間との絆を育てるバズ学習」は、30余年の実践を自己評価しつつまとめたものである。ご一読願いたい。失敗や成功とと、もに、私のバズ学習を紹介したものである。また、バズ学習実践への提案でもある。私が、あえて研究的実践としてのバズ学習を提案するのは、あなたとあなたの子どもの誇れるバズ学習を実践して欲しいからである。

第2分科会

バズ協同学習の原理を生かしたコンピュータ学習

伊藤 康児 (名城大学助教授)

学びの場にコンピュータは異質なもののなのか

田中 俊也 (関西大学助教授)

マルチメディアソフトを利用した協同学習

小池 孝之 (東京都荒川区立第五峽田小学校教諭)

助言者

大野木裕明 (福井大学教授)

新藤 久典 (東京都文京区教育委員会指導主事)

司会者

太田 信夫 (筑波大学教授)

記録者

笠井信一郎 (東京都文京区立第六中学校教諭)

バズ協同学習の原理を生かしたコンピュータ学習

名城大学教職課程部助教授

伊藤 康 児

A. 教材・教具のひとつとしてコンピュータを学習指導に生かす

1. 2人に1台のコンピュータ

各学校に配備されるコンピュータの台数は、ここしばらくは20台程度、という場合が多いようであり、クラスごとの授業でコンピュータを利用する時には、児童・生徒2～3人に1台の割合になる。そうした条件の下で、児童・生徒ひとりにコンピュータが1台どうしても必要、と考えると、どうなるだろうか。1時限の授業の前半では、クラスの半数の子どもがまずコンピュータを使って個別学習し、あとの半数は別の教材を使って学習していて、後半に入ると両者が交代する、という指導も行われているようである。

顕微鏡は一度にひとりしかのぞき込むことはできないけれども、2人で1台、ということなら、いっしょに顕微鏡を扱って交代でのぞき込むのがふつうである。コンピュータだけは個別学習でひとり1台、と決めてかかることはない。2～3人で1台をいっしょに扱い、協同学習すればよいわけで、コンピュータの台数が少ない、という条件は、協同学習にとってはむしろ追い風になっている。

2. 教材・教具としてのコンピュータ

コンピュータは教材・教具のひとつ、と今のところは考えておいてかまわない。とするなら、教師はコンピュータを学習指導のどのあたりでどう使うか、を工夫する、という話になる。コンピュータを使う適切な課題が提示されれば、あとはふつうに協同学習を進めていくことができる。

3. ソフトウェア

コンピュータがどのような教材・教具となるかは、ソフトウェアで決まる。ただし、とくに「協同学習用」のソフトウェアが豊富にあるわけではなく、また、そうしたソフトウェアでないと使えない、というわけでもない。教材・教具であるコンピュータをどう使い、何をどこまでどうする、という具体的な課題を協同学習のメンバーに提示するのは教師なので、極端に言えば、ソフトウェアは何でもかまわない。

最近になり、市販のソフトウェアや原則無料のフリーソフトウェアの種類が多くなってきた。流通しているこれらのソフトを見渡してみると、工夫しだいで協同学習に利用できそうなものがいろいろある。百人一首のかかるたを使って坊主めくりゲームを3人でするソフト、迷路をたどり、途中で出会った敵の出題する問題に正解できると次に進む、というゲーム仕

立ての算数学習ソフト、採集してきた身近な野草が何であるかを図鑑で調べたい時、葉は丸いかギザギザか、花びらの数は何枚か、などと分類のポイントになる個所を調べるよう指示してくれる支援ソフト、切符を買って電車に乗り、車窓の美しい風景のビデオ映像を楽しみながら外国の都市を歴訪し、地理、歴史、文化、人々の暮らしを写真、文章、音声を交えて紹介するソフトなど、楽しさ、美しさ、情報の豊かさに配慮したソフトが多くなっている。

たとえばこうしたソフトを使い、児童・生徒がいっしょにコンピュータを操作したり、答や行き先を相談して決めたり、3つ以上の意見を出したり、といった協同しあう課題を提示することで、協同学習が成り立つ。

4. 個別学習・競争学習・協同学習

一方、反復練習によって個人の技能を高めたり、文章を読んで意味を理解し知識を取り入れたりする、といった協同学習にはもともと不向きな課題は、たとえコンピュータを使ったとしても、やはり協同学習には不適切である。

また、児童・生徒は、何かというと競争したがる。ゲーム仕立てで得点を重ねていくタイプのソフトをただ1種類、クラス内のどのグループでも用いると、なるべく得点を上げようとメンバーが一生懸命になる反面、他のグループからコツを聞かれても教えない、などという事態も起きてくる。

個別、競争、そして協同といった教室での児童・生徒の学習のあり方に目配りする必要は、コンピュータを使う場合でも、まったく同じ、と言えよう。

B. コミュニケーションの道具としてコンピュータを生かす

1. コンピュータ同士の接続

コンピュータが他の教具と異なる特徴のひとつは、コミュニケーションができる、ということである。教室や学校内のコンピュータ同士を接続したり、電話や光ファイバーの回線網に接続して、家庭や地域、さらには国内外の遠く離れた地点のコンピュータを利用して人ともコミュニケーションができる。

2. 豊かなメッセージのやりとり

これまでのコンピュータは、せいぜい文字情報をやりとりすることができる程度であったけれども、最近では、コンピュータや回線網の機能が向上し、文字・音声・画像（静止画／動画）を相互にやりとりできるようになってきた。テレビ電話や遠隔会議といった、お互いの表情や声を多人数同士で同時にやりとりすることもできるようになってきた。

3. 相互に接続されたコンピュータを利用する協同学習

バズ学習をはじめとする協同学習は、ふつうは同じ教室で同じ時間に児童・生徒が対面しあって学習課題をめぐりコミュニケーションをする。相互に接続されたコンピュータを使うと、同じ教室で対面して、という枠を外すことができ、そこからさらに子ども同士、という枠を越えることもできる。保護者や地域の住民といっしょに学習することもできるし、教育センターの指導主事、博物館の学芸員、大学の教員などの専門家とやりとりすることもできる。

4. バズらしくない協同学習

コンピュータや通信の技術は、今後いっそう向上しよう。やりとりに要する時間も短くなり、「チャット」と呼ばれる、離れたところにいる何人かの人同士のやりとりも、いかにも対面し合ったやりとりとまったく変わらない感じを実現できるものと期待される。

ただし、現段階では、「バズ」と表現するにふさわしい、にぎやかなやりとりとはなりにくい。メッセージのやりとりに、多少とも時間がかかるためである。

5. 時間のゆとりと思考の深まり

しかし、このことは必ずしもマイナスばかりではない。メッセージのやりとりのペースが対面しあった会話よりもゆっくりになるし、その気になれば、自分のペースを守ってやりとりすることもできる。他の人を待たせたり、また、沈黙がつづいたり、といったことも、気にする必要がない。さらに、会話のペースに追われなくてもよいために、各個人の思考が深まる、との研究結果もある。バズ学習も、最初から小集団で課題に取り組むわけではなく、まず各個人で課題に取り組み、考える活動を大切にしている。接続されたコンピュータを用いることで、やりとりのペースがゆっくりになってしまっても、協同しあう途中で各個人で考える活動が多くなるのである。

6. やりとりに長い時間をかける協同学習

また、もっと長い時間をかけるメッセージのやりとりにも、良い点がある。欧米の心理学研究者の間では、電子メールと呼ばれるコンピュータ通信機能を利用して論文の草稿を仲間を送り、同じく電子メールで送られてくる批評を参考にして論文を仕上げる、といったことがすでに15年ほど前から盛んになっている。

欧米の高等教育の分野では、郵便を利用した伝統的な通信教育やテレビ・ラジオを使う放送教育に加えて、電子メールやチャットを利用した遠隔教育が行われている。受講生は先生とやりとりするのはもちろんのこと、遠く離れていて会ったこともない他の受講生ともやりとりして、協同して課題に取り組むこともできる。こうしたコースを修了して所定の単位を取得すると、大学・大学院の卒業認定を得ることができる。

これらのシステムの中で、研究者仲間、先生や受講生たち、といった人たちは、いわば長い時間をかけてメッセージをやりとりし、じっくり考えながら協同学習を展開している、と考えられる。

7. 説明する必要

教室内でふだん対面しあっている児童・生徒同士で協同して学習課題に取り組んでいる時には、お互いよく知っていることに関する説明を省略することが多いはずである。しかし、もし、お互い未知のことがらをめぐって協同しあうとなると、自分の考えや意見を他のメンバーによく分かるように説明する必要が生じる。たとえば「振り子の1分間に振れる回数は重りの重さ、糸の長さ、最初に振り出すスピード、のどれで決まるか、各自の予想を述べなさい」といった課題では、メンバーの意見がさまざまになり、なぜ、そう考えたのか、他のメンバーから説明するよう求められる。

相互に接続されたコンピュータを使い、教室外の知らない人とも協同しあう場合には、説明はいっそう求められよう。まして、協同しあう相手が文化や習慣の異なる地域や外国の児

童・生徒、となると、よくよく調べたり考えたりして説明することになる。たとえば「昼の食事はどのようにして食べていますか」とたずねられたら、自分たちの学校の給食がどのように作られ、ふだんどんなものを食べているか、あらためて調べることになるだろうし、「日本人は羽織を着て靴をはいている、と授業で習いましたが、本当ですか」と質問されれば、わが国の近代化の歴史を振り返るよいチャンスとなる。

相手に説明しようとすることで、自身の思考が深まり、調べたり意見を交す活動を通じて興味は喚起されたり理解が深まったりする。このことは協同学習の実践研究では以前からよく知られていたが、最近の知的な働きについての心理学研究でも重視されてきている。コンピュータを利用した協同学習がさまざまな人との交流を促し、そこから説明する必要性が増して、その結果、学習が発展する、といった一連の効果が期待できる。

C. 対人技能の育成にコンピュータを生かす

1. 対人技能の育成

バズ学習は、小集団で課題に取り組む経験を重ねる中から、対人関係の技能を育成するねらいをもっている。コンピュータをバズ学習に取り入れると、対人技能の育成は、どのように進むのだろうか。これについては、まだこれからの研究課題と言ってよいが、現在までに分かっていることをもとに考えてみる。

2. 活発でフランクなメッセージの発信

一般に、コンピュータを用いると、メッセージが発せられやすい、と言われてはいる。対面していない場合なら、自身の体験や意見・感想を、あたかも日記に書くような感じで気軽にコンピュータに伝えてネットワークに送り出す、との指摘もある。

3. リーダーシップ技能の育成

しかし、その一方で、対面していないために他のメンバーを攻撃するメッセージも出やすくなるようである。リーダー役のメンバーがメッセージのやりとりを見渡して、必要なら調整を行い、課題達成に向けてメンバーの活動をまとめていく、といったリーダーシップ技能は、コンピュータを使う協同学習でも、やはり育成すべき重要な指導目標である。

4. 相互に接続されたコンピュータによる小集団の構成

対人技能の育成に大きな役割をはたすのが、小集団のメンバー構成である。仲良しグループではなく、ふだんはやりとりしないメンバーと小集団を構成し、そこでのやりとりを経験することで、さまざまな人とやりとりする技能を発展させていける。相互に接続されたコンピュータを用いると、教室にとどまらず、きわめて多様な人たちとやりとりする可能性が開けてくる。しかし、子どもの知的な面の発達によっては、まずはすぐそばにいる具体的な人物との対面しあうやりとりがあって、これをふまえて離れたところにいる顔も知らない人とのやりとりをありありと実感できる、ということもある。やはり最初は対面しあう小集団を構成し、そのバズ・セッションに遠くの人にも参加してもらい、あるいはメンバーのひとりがメッセンジャーになり、メンバー外の人とやりとりして、これを他のメンバーに伝える、という形が望ましい。

学びの場にコンピュータは異質なもののなのか

関西大学文学部助教授

田 中 俊 也

学びの活動を中心に据えた学級運営

1. 学びの場の基本構造

われわれが教室での協同学習とコンピュータの関係を考えるにあたって、まず、その学びの場がどのような構造になっているのかを確認しておく必要がある。

教室で「学び」を構成するのは、生徒、教師、教材・教具である。教材とは「学び」が直接目的とする教育内容を含む媒体（メディア）であり、教具とはそれを直接生徒に操作させたり、教師が操作したりして実際に生徒の五感に触れるメディアである。

重要なことは、教材そのものが「学び」の内容ではない、あくまでも学びの媒体である、ということである。ましてや教具については言うまでもない。

教室においては上記の3つの構成要素で「学び」が構成されている、といえる。しかしながら、生徒も教師も教室にいるのは1日のうちのたかだか1/3程度の時間であり、それぞれ背後に家族や社会を背負っている。教室は真空の世界ではなく、具体的にそれぞれが生きている世界をも反映したものである。教材や教具にもその時々「文化」が強く反映される。その意味で、学びの場は本質的に協同的世界の反映の場といえる。

2. 学習と学び

「学びの場」としての教室は、多くは学習の場、と捉えられる。心理学における「学習」は、それを行うもの以外の第三者からの視点での定義で、学習者本人の、「学習しよう」という意図は必要としない。機械的学習という用語が如実に示すように、学習過程に「意志」「意図」が介在しなくても、繰り返しているうちに「憶えた」場合も学習したと定義される。また、「学習」と通常言う場合は、その学習内容については不問に付す。

学びの概念は学習の概念とは大きく異なる。まず第一に本人の学びの意図が前提とされる。またその内容は、個人にとっても社会的視点からも「望ましい」ものが前提され、学ぶ過程を重視し、学んだ結果についての自己のイメージも非常に重要となる。

教室での学びがどうしても「学習」ではあっても「学び」たりえないのか、学習を「学び」とする手だては考えられないのか、この点に関して、コンピュータを通した協同学習という視点

から考えてみよう。

3. 創造的学びの教室；知の社会的構成主義実践の場

発見学習においては、直観的学習を事象認識の基本的な方法として取り入れている。すなわち、知識を、言語や数値レベルでの抽象的・分析的・論理的方法で再構成するのではなく、自らの5感を通じた、分析に先立つ直観で学んでいく、という方法を重視する。ここでは、既存の概念や論理・常識といったものを使って事象のまわりをぐるぐる回っていることによってその事象の本質をつかんだと錯覚をおこす従来の再帰的学びに対して、それらをいったん捨て去って、自らの5感で事象を理解しようと努めることによって新たな、創造的知識を生みだそうとする。

発見学習をさらに越えた創造的学びを形成するには、物理的環境整備も必要であるし、教師自身の意識改革が何より必要とされる。そうした困難さの中で、教室にコンピュータを導入することによる、主体的学びについて考えてみよう。

ここにおける「知識」は、どこか天から「与えられた」ものではなく、子どもたち自身の学びの活動の中で、教師や教具、家族や社会に支えられて、「社会的」に「構成」されたものである。知はまさに社会的に構成されるものであると考える。

知の社会的構成主義の実践

個々の生徒は独立した科学者である。ある課題に直面したとき、過去経験から、ある程度の解決の予測はたてることができる。自分の既存のパラダイムで、新しい情報を次々に処理していく、通常科学の状態である。ここでは既存の概念、知識・論理がそのまま援用されるので、個対問題状況という図式になる。

ところが、旧来のパラダイムではどうしても処理できない状況に直面したとき、それまでの、既存の知識で分析的に対象を「眺める」、すなわち「観察」の態度の変更を余儀なくされる。それに替わって、対象の内部に自分をおいてみていく「直観」の姿勢が要求される。直観の姿勢は個人的なこだわりへの固執の姿勢であり、自分の「理論」と目の当たりにしている「現象」との矛盾の解消へ向けての姿勢である。

次にそれは、仲間からの別の情報と対比される。自分のこだわりがきわめて個別のものなのか、他の人たちと共有できる、ある種の社会的知になっているのか、の確認が行われる。また、こだわりに自信をもっていれば、それを他者に説得するだけの根拠・迫力ができて、共感を勝ち取ることができる。ここに協同学習の意義が認められる。

こうして旧パラダイムは捨て去られ、新しいパラダイムで当該の現象が解釈できることを、クラスの総意で確認する。この段階で、直観から得られた個人的な知は、社会的相互作用を経て立派な社会的知となっていく。

教師の関わり

こうした、社会的構成主義による知の獲得過程では、教師は基本的には脇役である。すなわち、宝探しの地図を生徒に与えておいて生徒が「主体的」に宝を探した、と満足する発見学習での教師の関わりと違って、どんな経路でどんなことがらを発見するか、自分自身も生徒の社会的仲間の一員となって行動することが要求される。

ここでの生徒の学びとは、経験の個人的解釈・直観を通して知識の内的表象をつくりあげ、それを他の仲間と共有する言語・シンタックスをつくりあげていく過程、ということになる。そうした知の構成過程を側面からアレンジしていくことが教師の重要な仕事となるであろう。そのためには、教育実践を行うと同時に常にその内省を行う、反省的実践家の素養が強く要求されることとなる。

知の構成過程の、側面からのアレンジ、という作業は、実は非常に大変な作業である。そんなもどかしいことをするよりは、構成された結果としての知識を「教え込」んでいく従来の有意味受容学習の方がはるかに手間はかからない。しかし、このことこそが、教職を本来の意味で専門化していくことになるのである。なぜかなら、常に当該の「知識」の意味や価値を念頭におき、子どもの発達過程を考慮しながらもっとも有効に「知」が構成される環境条件を整備していくことは、教職の専門性の根幹であるからだ。学びの場におけるコンピュータは、このようなところに位置づける必要がある。

実際には学校にどのようにコンピュータが導入されたか

1. 歴史的経緯 —学校の情報化対応の流れ—

わが国の文部省が押し進める学校における情報教育の特徴は、コンピュータ・リテラシーの教育としての情報教育と、一方での、新しい学力観に基づく情報教育の並立にある。

(1)コンピュータ・リテラシー

コンピュータ・リテラシーとは、コンピュータを介したさまざまな情報活用のできる能力のことであり、こうした、コンピュータについての能力は、さらに細かく分けると、次のように規定できる。

コンピュータについての能力の1つは、コンピュータについての理解能力で、これは教養と知識で

構成される。教養には、コンピュータの社会への影響について、社会生活との関わり、プライバシーや著作権の問題等が含まれる。また、知識は、コンピュータの仕組みや働きを知ることである。こうした教養と知識をもって初めてコンピュータを理解している、ということができる。

もう1つの能力は、コンピュータについての技能であり、コンピュータの利用技能と処理技能とに分けられる。利用技能は、既存のさまざまなアプリケーション・ソフトやプログラムを自在に使える技能であり、運用能力と言い換えても良からう。それに対して処理技能は、情報の分析からプログラミングに至る、一連の情報処理をいわば産出する技能である。

(2)新しい学力観

新しい学力観とは、要は、学んで得た結果としての力という旧来の学力観に対して、「学ぼうとする力」「学んでいく過程としての力」を、重視しようとするものである。これは、情報化社会のなかで、ただ受け身に生活している限りではさまざまな情報の渦に埋没してしまうから、自分にとっての問題状況を把握する力、その見通し・手段の発見、実行という、主体的な諸活動が要求される、という考え方からくる。

したがって、新しい学力観と結びつくコンピュータ利用法、情報教育の姿は、旧来慣れ親しんできた、コンピュータが次々と問題を出して、正答・誤答別に次に進んでいくといったCAI的な利用法ではなく、むしろ、教科を越えて、社会生活で本質的に重要な事柄を自らの力で納得しながら進めていく、発見学習的な、あるいはさらに進めて、創造的学びの創出的な利用法が望まれる。

そうした考え方が生まれてきた経過を、事実レベルに従って辿ってみよう。

自己教育力

中央教育審議会、教育内容等小委員会審議経過報告（1983年11月）で、情報活用能力の育成に絡んで、今後の情報化社会では「自己教育力」を育成することが重要であり、そのためには、主体的に目標を設定し、必要な情報を選択、活用していく能力の育成が重要であることがうたわれた。

この「自己教育力」は、自分自身の主体的な人間形成の力であり、それは、自分で学べる、「自己学習力」をその根元に据える。すなわち、自己学習力を持った者が自己教育力を発揮できる、と考える。

(4)教育におけるコンピュータ利用の基本方針

社会教育審議会教育放送分科会『教育におけるマイクロコンピュータ利用について（報告）』（1985年3月）では、学校教育、社会教育とマイクロコンピュータの関わりについて総合的に解

説がなされ、今後の実際の導入の際の指針とならんことを期してまとめが行われた。

「情報化への対応」：臨教審

1984年に設置された臨時教育審議会（臨教審）は、85、86、87年に亘って、計4次の答申を行ってきた。

まず、第一次答申（1985年6月）では、現状の社会を情報化、国際化、成熟化の社会と認識し、それぞれ、情報教育、国際理解教育、生涯教育がになっていくものとされた。情報化社会に適応した教育の在り方が、今後の指針の柱の1つとされたのである。

第二次答申（1986年4月）では、特に情報活用能力の育成があげられた。すなわち、「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」の育成が重視された。

さらに第三次答申（1987年4月）、最終答申（1987年8月）と進み、結局、情報教育に対する臨教審の基本姿勢は、以下の4点にまとめることができる。

1. 情報活用能力の育成
2. 情報手段の活用による学校教育の活性化
3. 情報モラルの確立
4. 情報化の「光と影」への対応

すなわち、情報化社会において自在に情報の発信・受容・処理等ができる主体的な人間をつくり、そのためには学校にコンピュータを導入し、積極的に活用して教育そのものも活性化し、一方で情報に関するさまざまな基本的モラルを確立しつつ、社会の情報化のプラスの側面とマイナスの側面を公平に評価しなければならない、ということ述べたものである。

情報活用能力、情報基礎：教課審

臨教審の動向と並行して、具体的にそれを教育カリキュラムに活かす方途をさぐる教育課程審議会（教課審）でも検討が行われていた。1986年10月の、教育課程審議会の中間まとめ「教育課程の基準の改善に関する基本方向について」では、情報活用能力の育成の具体的な手段として、中学校の技術・家庭科の領域に「情報基礎」という1領域を追加することも示唆された。

また、この中間まとめで、情報活用能力は、以下の4点から構成されることを明らかにした。

1. 情報の判断、選択、整理、処理能力および新たな情報の創造、伝達能力
2. 情報化社会の特質、情報化の社会や人間に対する影響の理解

3.情報の重要性の認識、情報に対する責任感

4.情報科学の基礎および情報手段（とくにコンピュータ）の特徴の理解、基本的な操作能力の習得

1987年12月の最終答申で、21世紀に向かって、国際社会に生きる日本人を育成するという観点に立って、以下のような4つの柱が確認された。

1.豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ること

2.自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること

3.国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図ること

4.国際理解を深め、わが国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること

新学習指導要領

教課審の最終答申に基づいて、具体的な学習指導要領が改訂され（1989年3月）、小学校では1992年より、中学校では1993年より実施されている。

新しい指導要領では、上の、情報活用能力の育成はあらゆる教科で実現されることが期待されている。以上のような経過を経て、学校教育のあらゆる側面でコンピュータ利用の方向が探られ、実践されている状況となっている。

特に重要なのは、これまで個人的な趣味の領域の問題だと扱われてきたコンピュータ利用が、中学校では明らかに学力の一部を構成することになる教育内容として取り上げられている点である。今後、学校でコンピュータのことを「学んで」きた者たちが社会参加をしていくことになる。このことは、教師が、「パソコンおたく」などと同僚をひやかすことができなくなることを意味する。

2. 設置台数等の変遷

上に述べたように、学校の情報化対応は1983年（昭和58年）より本格的に始まったと言って良からう。その年から、文部省は「学校における情報教育の実態等に関する調査結果」を発表し始めた。1984年度の資料はないが、その後毎年調査・発表を続けている。この中から、いくつかの重要な項目を取り上げて、学校のコンピュータ利用の実態の変遷を眺めてみよう。

(1)コンピュータの設置率

1983年度の学校へのコンピュータ設置率は、小学校でわずか0.6%、中学で3.1%、高等学校に

においても56.4%にとどまっていた。上にも述べた通り、この年は、学校の情報化対応元年であり、その段階で、自主的にコンピュータを導入していた小中学校はほんの例外的な事例しかなかったことをまず、確認しておこう。

その後の行政上の対応から、コンピュータ設置率は順調な増加を示してきた。中学校で「情報基礎」の始まる1993年度には、98.4%の中学校にコンピュータが設置されている。

小学校においても単調に増加はしているが、依然70%弱で、一校あたりの平均設置台数も、中学校22.1台、高校53.7台に較べて、5.3台であり、初等教育段階での対応は、遅いし、あまり質のいい対応とはいえない状況にある。

(2)コンピュータの設置状況

導入されている機種に関しては、小中学校ともに、1993年度（平成5年度）の段階では、マルチメディア対応可能な32ビットパソコンが16ビットパソコンを追い抜いている。今後は、ますます高性能なパソコンが初等・中等教育の現場に入っていくであろう。

機種の選定に関しては、購入方法が大きく関係してくる。

毎年、7割から8割くらいの学校がコンピュータを買い取って購入しているが、徐々にレンタル・リースの方法も取り入れられ始めた。それでもなお、中学校ではレンタル・リースは20%に満たない（1993年度）。

(3)コンピュータの設置場所

同様に、買い取られ、レンタル・リースで導入されたコンピュータが、どこに設置されているかを検討すると、小学校においては、圧倒的に職員室に置かれてあり、何年もこの事情は変わっていない。

中学校でも、1989年（平成元年）ころまでは小学校と同様に、職員室に置かれていたが、情報基礎の開講に伴い、専用教室に数十台のパソコンが置かれている状況がよくみてとれる。1994年からの新整備計画に従って、小学校では22台、中学校では42台が1つの学校あたり配備されることになる。

(4)どんな教科で利用されるか

やはりどの学校種においても、数学での利用が多いが、小学校では次いで、国語での利用が多いし、中学校でも、外国語関係のソフトを比較的整備しているようである。

1987年段階での調査結果と較べてみると、87年では小学校で算数ソフトが全体の61.7%を占め、中学校でも数学ソフトが44.2%であったのが、それぞれ、相対的な割合を半減させている（絶対数はいうまでもなく、小学校で10,378→399,440本へ、中学校で6,043→61

3,144へと、4倍から10倍以上増えている)。これは、パソコン=CAIといった固いイメージが払拭されて、さまざまなツールとして使用されるようになったことを示している、といえよう。

(5)操作できる教員，指導できる教員

1993年度段階で、コンピュータの操作のできる教員の割合は、全体で34.3%であった。高等学校教員が47.4%と最も多く、ついで中学校教員の41.5%、小学校教員の24.4%、特殊教育諸学校の教員の23.5%であった。

どの学校においても、数学や理科といった、いわゆる理系の科目の担当教員がコンピュータ操作を担っているが、1993年段階では、どの教科の教員もわずかではあってもコンピュータを操作し始めている。

以上の諸点を踏まえて、以下の項目について話題提供をしたい。

教室においてコンピュータをどう

使うか

1. コンピュータで教える
2. コンピュータで学ぶ
3. コンピュータで表現する
4. コミュニケーション手段としてのコンピュータ通信

学び，かかわりとコンピュータ

1. こだわりを援助するコンピュータ
2. 学びを援助するコンピュータ
3. 人とのかかわりを援助するコンピュータ
4. コンピュータを介した共に学ぶよるこび

文献

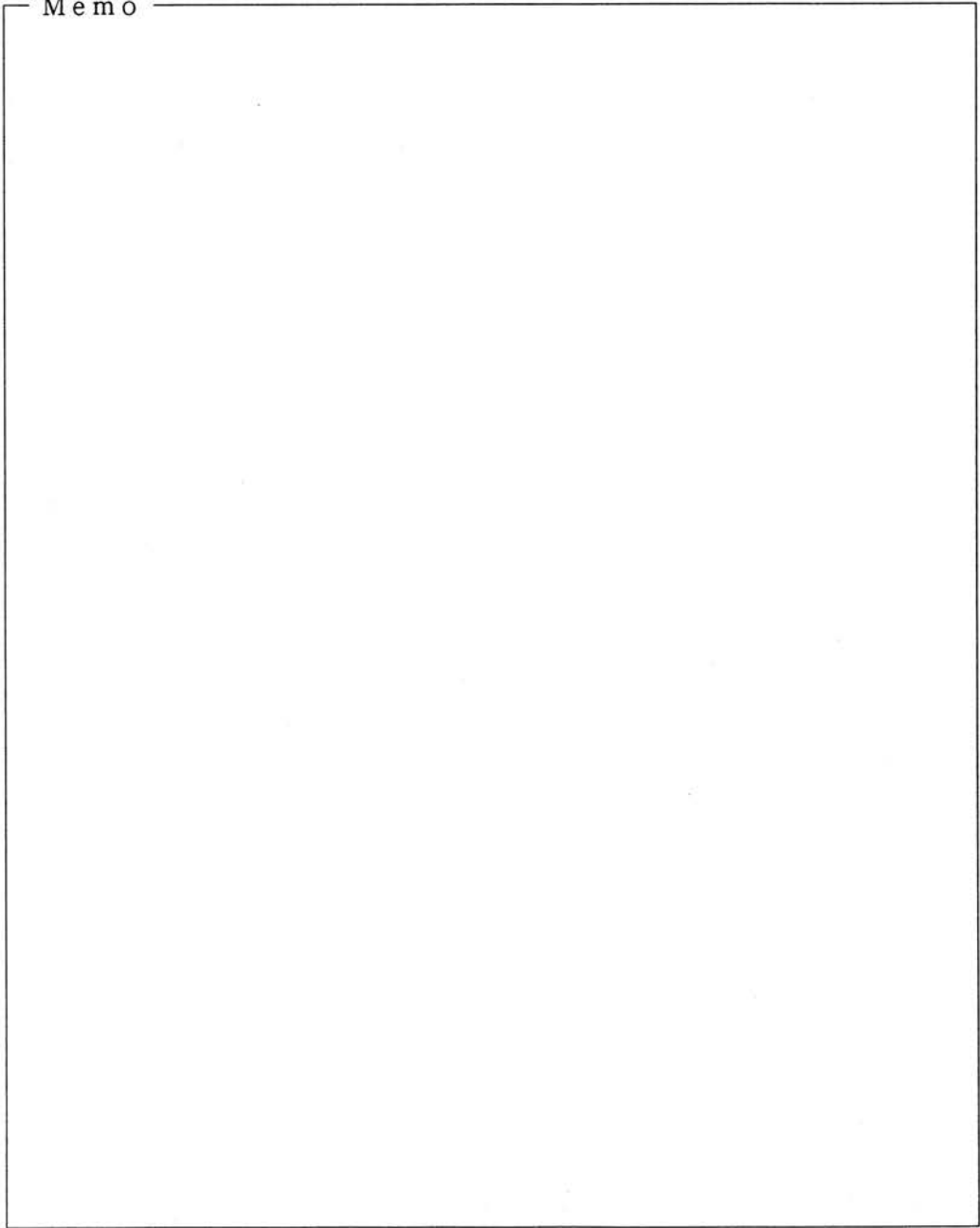
田中俊也（編著） コンピュータがひらく豊かな教育-情報化時代の教育環境と教師-
北大路書房，1996

マルチメディアソフトを利用した協同学習

東京都荒川区立第五峽田小学校教諭

小池孝之

Memo



第3分科会

自由バズを取り入れた校内授業研究

吉井 秀人 (三重県一志町立波瀬小学校教頭)

自らの生き方を考えさせる道徳授業—話し合い活動を生かして

畠山 明美 (愛知県春日井市立西藤山台小学校教諭)

一人ひとりの子どもの個性を引き出し「育て→高め→広げる」バズ学習

市来 初義 (兵庫県尼崎市立園和小学校教諭)

助言者

市川 千秋 (三重大学教授)

伊藤 篤 (神戸大学助教授)

岩田 鎮人 (元愛知県春日井市立鷹来中学校校長)

宮下 英雄 (東京都府中市立府中第一小学校校長)

司会者

大関 巖 (新潟県新潟市立小合小学校教頭)

記録者

山下 裕夫 (東京都清瀬市立第六小学校教頭)

自由バスを取り入れた校内授業研究

三重県一志町立波瀬小学校教頭

吉井 秀人

1 研究主題および主題設定の理由

(1) 研究主題 自ら考え 生き生きと学習する子どもを育てる

— 算数科を中心にして —

(2) 主題設定の理由

子どもたちが生き生きと活動しようとする意欲・態度・能力を育てるためにまず、一人ひとりのよさや可能性を発揮して、学ぶことの楽しさと喜びを体得させることが必要である。つまり、知識を一方向的に教えこむことから、子どもたち自らの手で問題を解決していく意欲を、そして解決していく力を身につけさせるための学習をめざしていかなくてはならない。

本校の子どもは、純朴な子どもが多く、言われたことは素直に聞ける。しかし、自ら物事を考え、進んで行動する態度は十分に育っているとは言い難い。学習面においても、与えられた課題に真面目に取り組み発言しようとする意欲もあるが、考えが浅く、また、最後まで考えずにあきらめてしまったり、安易に答えだけを知りたがったりする傾向があった。

2 研究の内容

やす

(1) 矢頭の子タイム

一昨年度末にすべての学年で、「三重県算数学力調査」を実施し、子どもたちの学習習熟度の実態把握調査を行った。その結果の分析から、個人差が大きいこと、特に算数が好きでない子どもに基礎計算力の不足が目立つことや、考え方は良くても計算ミスで正しい答えの出せないことが多くあることも指摘された。

また、学習課題の解決に十分な時間を確保できる授業形態にするためには、その前提として基礎計算の反復学習による計算力の定着が求められる。しかし、学年が進むにつれて、

基礎計算の反復学習に充てる時間の確保が難しくなることもわかった。

そこで昨年4月より朝の会終了後の5分間を「矢頭の子タイム」に設定し、基礎計算を中心に、毎日反復学習を継続することで、計算力の向上をはかることにした。学年により、内容はそれぞれ異なるが、数字に慣れ親しむことから始め、計算のより正確さとより迅速さを身につけることをねらっている。主に、プリントやドリルを使つての復習問題が中心であるが、時には、子どもの自主学習力を伸ばすために、子どもたち同士で問題を作ったり、一人ひとりが自己の計算力に応じて前学年までに習った問題にも取り組んだりしてきた。

取り組みが進むに連れて、児童会の放送委員会が中心になり、「矢頭の子タイム」の開始や終了のアナウンス、学習中のBGMをかけるようになったことなど、児童の意識の中にも「矢頭の子タイム」が根付き、子どもたちの自主活動となつ現れてきている。

(2) 授 業

① 予習課題

「自ら考え 生き生きと学習する子どもを育てる」ためには、学校での学習に入る前に、子どもたち一人ひとりがその単元の学習内容に興味・関心を持ったり、目的意識を持ったることが大切である。そこで、本校では学校での学習以前に「予習課題」を提示している。

「予習課題」というと、教師から与えられた家庭学習（宿題）という感じが強く、「自ら学ぶ」とは相反するように思われがちである。しかし、本校は、できる限り自然やまわりの事物に対し子どもたちが自分から働きかけていくもの、「勉強」や「算数」を強く意識せずにできるものを「予習課題」と考えている。

すなわち、「予習課題」＝直接体験学習（無意識的学習）から、学校での学習＝間接体験学習（意図的学習）へ入っていくのである。

一単元のすべての授業において、「予習課題」を提示することは必要ないが、可能な限り、次のことに留意して設定している。

- これから学習する単元に、興味・関心を持てるもの
- 直接体験学習ができるもの
- よりスムーズに、学習課題に入っていけるもの

- 学習内容の理解を容易にさせるもの
- だれでも取り組めるもの
- 授業の中で生かせるもの

上記の留意点をすべて網羅することは難しいが、どの学年も子どもたちの実態を見ながら、少しでも本校がねらっている「予習課題」に近づくように努めている。

また、子どもたちが楽しく親しみを持って取り組めるように「予習課題」には全学年とも名前を付けている。

【授業実践より・予習課題例】

3年生

算数ランド

単元「円と球」

- ①みんなで、「おはじきとばしゲーム」をしましょう。
- ②円をかきましょう。
- ③身のまわりで、円の形をしたものをさがしましょう。

6年生

WAKU WAKU

単元「比と比の値」

- ①青色と黄色のポスターカラーを色混ぜして、色をぬっていきましょう。
- ②比の性質を利用して表すと分かりやすくなるものを生活の中から見つけよう。

②つかむ段階

学習課題

前述した予習課題により、遊びや事前の体験活動などを通して、子どもたちの学習への期待は高まってくる。授業の中心となるのはその時間の学習課題であり、学習のねらいを達成する上で、課題づくりは大変重要である。望ましい学習課題とその提示方法について考えた。

1、課題設定の視点

- ・子どもの身近にあって、親しみやすいもの
- ・子どもの多様な考えを引き出すことができるもの
- ・具体的な操作活動ができるもの
- ・単元のねらいにせまるもの
- ・単元全体を見通し、次の時間へと発展していけるもの

2、提示の方法

子どもが課題をしっかりと「つかむ」には、子どもにとってとらえやすい課題づくりをすることはもちろんであるが、課題提示の方法も考えなければならない。提示方法には、次のようなものが考えられる。

- ・具体物を使って提示
- ・板書して提示
- ・小黒板や模造紙などを使って提示
- ・あらかじめワークシートに書いておいて提示
- ・図や絵を使って提示
- ・視聴覚機器を使って提示

これらの方法は、課題によって、あるいは子どもの状態に合わせて選択している。また、課題は、いつも授業の最初に提示するとは限らない。予習課題の、確認の後や発展として提示したり、子どもの様子を見ながら提示する場所を考えたりしている。

③見通しを立てる段階

子どもにとって「つかむ、見通しを持つ、筋道を立てて考える、まとめる」段階の区別の意識はないが、この段階は個人思考の場であり、課題に対する直観的な自分の考えを持たせるといって生かす場面である。また、結果（予測）を見通すことは、大きな間違いを防ぐという意味から、大切な段階である。その際、一人ひとりの子どもが解決への手がかりとなるものを持っているが、個人差は大きい。課題解決への意欲につながる手がかりとして、既習学習や生活体験に目を向けたり、予習課題で考えてきたことが大切な視点で

ありヒントとなっていくので、体験や予習課題を生かせる方向で指導をしたい。

じっくり筋道を立てて考える前段階であるが、自力解決の場であるので、可能な限り十分な時間保障をしたい。過去の生活体験や既習学習をよりどころとしたひらめきを大切に抜しつつ、単元によっては、操作活動も取り入れるようにしている。

この段階では、子どもの「これでどうか自信がない」「わからない」というのも認めていく必要がある。ただし、次の活動である「筋道を立てて考える段階」につなげていく意味で、どこが分からないのかを考えさせたり、ヒントを示したり、課題を再度確認し直すなど、個別に支援をしていく必要がある。

ワークシート

ワークシートは、学習中、個を生かし思考を進める場であり、学習の記録としても利用されるものである。そのため、課題を「つかむ」「見通しを立てる」「筋道を立てて考える」「発表、まとめる」の各段階でどのように活用するかを明確にして、ワークシートを作ってきた。あくまでも、子どもたちが、学習を展開しやすく、記入しやすいスタイルが望ましい。形式は、画一的ではなく、課題によって最適と考えられる活用方法（①シート上での具体的操作をする、②シートへの書き込みを通しての活用、③発表の段階で活用など）によって、自由な形式をとる。

ワークシートを作る際の各段階での留意点として、

- ・「つかむ」段階では、課題を確認できるよう、課題を書き写させたり、課題を印刷したりしておく（主に図形の場合）。
- ・「見通しを立てる」段階では、直観的な考え（ひらめき）を表現すればよい。よって、学年や学習内容に応じて、文章や図又は絵による簡単な表現あるいは、シート上での操作など、子どもが記入しやすい柔軟な形式をとる。
- ・「筋道を立てて考える」段階では、自由バズの時間にいろいろな書き込みをしたり、教えてもらったことや、相談して理解できたことや新たな考え等を整理したりしやすいような形式を工夫する。
- ・「まとめる」の段階では、その一時間の学習で分かったことを簡単に言葉で整理できるようにする。単元によっては、一時間の感想を書いて、短時間で学習のまとめをしたり、練習問題や発展問題を取り入れたりする。

以上のような考え方を基本に、子どもたちがより活用しやすいワークシートのあり方を研究している。

④「筋道を立てて考える」段階

バズ学習

バズ学習は、次の2つのタイプに分けて考えることができる。

- 1, たとえば生活班をそのまま利用するような、すでにできあがっている小集団で課題解決に取り組む場合・・・固定バズ
- 2, 課題を解決するために、子どもが自由に相手を求めて小集団を作り取り組む場合・・・自由バズ

学習の個別化・個性化がうたわれる中、一斉授業においては集団の中に個が埋没してしまう危険性のあることをよく指摘される。私たちがめざすものは、一斉授業の中での個の尊重である。自由バズは、子ども一人ひとりの個性や能力を十分に発揮し、それを生かすために作られた方法である。個と個のかかわりはあくまで対等の立場に立ち、子どもの主体性や独自性が尊重され、大切にされる。私たちは、個を生かしながら集団とともに、学力、態度、意欲づけの側面からなる全面的な発達をバズ学習でめざしている。すなわち、学力と人間関係の同時達成をねらっている。

学習内容によって2つのタイプを使い分けていく必要があるが、特に次のような効果がある、自由バズを中心にして学習を組み立てている。

自由バズで学習する効果

(1) 学力と人間関係の同時達成

○個人思考のあと、わからない子、あるいはわかりにくい子は、わかる子から説明を聞く。そこで、自らの考えの誤りに気づいたり、導かれていったりする。説明をした子は、説明をしたことによって自らの考えをさらにはっきりさせ、深めることができる。自由バズにはいる前に、わかるかわからないかはっきりさせることからスタートする。自らの課題をはっきりさせて学習に取り組むことができる。また、同時にお互いを認め、はげまし合う学習の中で、友だち関係の広がりや深まりが出て来る。

○低学年では、休み時間や帰宅後、全員で一緒に遊ぶ姿が見られるようになったり、高学年でも限られた友だちとしか遊ばなかった子どもが、新たな友だちと遊んだり学習したりする姿が見られるようになり、担任ばかりでなく子どもたちや保護者を驚かせることもしばしば出てきている。

(2) 個人学習と集団相互作用の統合

○自由バズでは、自らの必要性によって自主的に小集団を作っていく。そしてお互いに協力し合って課題解決に取り組んでいく。つまり、子どもたち同士で学習を工夫し、創造していくことができる。

○算数科に限らず、まず自ら課題に取り組んだのち、分からないところがはっきりすると、休み時間などに友だちに聞く姿が見られるようになってきた。その際、説明を行った子どもはさらに詳しく理解するために図書室の本で調べたり、友だちと確認をしあう姿が高学年で見られるようになってきた。新たな課題が子どもたちの中から作り出されてくることもある。子どもたちの中に、わからないことがはずかしいことではなくて、わからないことをそのままにしておいてはだめなのだということがわかりつつある。

(3) 自己の考えの明確化と個性化・自己確立

○自由バズを取り入れ始めた頃（5月）は、一定の動きしか見られず、限られた子どもの発表にとどまっていた。しかし、繰り返しの中で、「わからない」と言えない子が「わからない」といえるようになり、わからないところをはっきりさせてバズ学習に入り、課題解決をはかり、発表をする姿が低学年でも見られるようになってきた。

(4) 個の発達・成長と学級集団の発達・成長

○わからないところを一人ひとりがはっきりさせ、自発的に話し合いに入るため、課題解決への関心や意欲が高められる。わからない子は相談に行くとき、はじめは恥ずかしさや厳しさを感じるであろうが、わかるように一生懸命に教えてくれるため、わかるようになる喜びを体得でき、仲間意識を高めることができる。説明する側の子にとっても、聞きに来た子に親切に分かりやすく説明ができないと聞きに来てもらえないので真剣になる。共に厳しい場であるが、互いに認め合い、求め合い、支え合いながら取り組んでいく。

○個人思考を中心に学習を進め、一斉授業の中で課題を解決することに慣れていた子ども

もの中には、自由バズによる学習にはじめ抵抗がある子どももいた。自由バズを繰り返すうちに、より学習が深められることに気づくとともに、まわりから自分が認められる中で、バズ学習に積極的に取り組むようになってきている子どもが多い。

⑤発表

全体の中で、お互いに自分の考えを発表するという段階に入る。前述したように、バズ学習によって誰もが考えを更に明確にすることができるため、自信を持って積極的に発表ができるようになって考えられる。この発表を通して、全体で話し合いをすることにより、多様な考えはまとめられ高められていくのである。

まず、教師はバズ学習中に机間巡視をして、どの子どもがどのような方法で課題解決をしようとしているかを事前に把握しておく。そして前に出て発表する子どもは、できる限り聞く側にわかりやすいように、時には具体的な学習材を操作しながら自分の考え方を説明する。操作活動の時に使ったワークシートをそのまま黒板に貼って説明する場面もあった。

次に、子どもどうしの質疑の時間を取る。それは、前に出た子どもの説明が終わった後、一つ一つの考えを学級の子どもたち全員に納得させるためである。発表する子どもは、必ずしもバズ学習中に教えていた側ではなく、相談したり教えられてから理解できた側である場合もある。発表した子どもの考えが全体の子どもたちにわかるように説明できない時は、同じ考えの子どもがいれば補足説明の場を与える。また対立する意見があれば、その時に出させるようにする。教師は、板書したり具体的な学習材を提示したりするなどの支援を行う。当然、工夫された板書計画や学習材の準備が必要となってくる。

そして、板書されたそれぞれの考え方の長所や短所について、みんなで考え合う。もし発表された考えが間違っていたとしても、既習内容や経験を生かして考えを持とうとした点は認めていかなければならない。なぜなら、たとえ誤答であっても、それを導く上での大切な発想や考え方を認めて、子どもの考える姿勢を伸ばしていくとともに、誤答との対比を通して、よりすぐれた考え方に気付かせていくこともできるからである。このように子どもたちから出された多様な考えを積極的に認めていくことで、いろいろな考え方の良さを知ることができる。こうして学習課題に対する解決方法は十分に練り上げられ、更に一般化したものを目指すことによって高められていく。

また発表者が説明し終わった後、聞く側の子どもが「わかった。」とうなずいたり、拍

手をしたりする場面が見られた。発表する子どもにとっては自分の言いたいことを確実に伝えられたという満足感となり、さらには学級全体の子どもたちに理解され認められることで自信を持つようになる。つまり、お互いを認め合い励まし合える学習集団・学級集団になっていくことができるのである。

⑤「まとめる」段階

授業の最終段階のまとめでは、初めの学習課題に戻り、その時間に学習したことの整理をする。発表を通して練り上げられた考えは、一般化したものに高められているので、子ども一人ひとりがワークシートに学習のポイントとして記録することができる。このワークシートには学習して分かったことをまとめるだけでなく、使用した学習材を貼り付けたり、絵や図を使ってまとめたりするように工夫している。

また、発表された考え方が正しいかどうか検証が必要な場合は、頭の中だけに終わらせないためにも、まとめの段階で実際に操作・体験することにより確かめることが大切である。単元によっては、学習の感想を書いたり、練習問題や発展問題をするることによって、学習内容の定着をはかることもある。

このようにして学習のまとめをする中で、次時への方向付けができると、「次はこんなことを調べてみたい。」と意欲を表す子どもも出てきている。このまとめは、次の課題解決のために重要なものとなる。

3 研究の成果と今後の課題

研究の成果

予習課題によって、子どもたちが興味・関心を持ち、学習に臨めるようになってきた。また、直接体験をすることにより、子どもの発想が豊かになり多様な見方や考え方を引き出すことができ、学習意欲を高めた。

5月から取り組み始めたばかりの「バズ学習」では、学習方法に慣れるにつれて、子どもたち一人ひとりが意欲的に課題に対して意見交換をしながら、今までになく力強い討論がみられるようになってきている。同時に、子ども同士でお互いのよさを認めあい、相手をよく知ることによって個性を尊重し合うようになってきている。限られた友だちとしか関わりのもてなかった子どもが、バズ学習中の話し合いをきっかけとして一緒に遊ぶようになったり、お互いに考えを出し合うことによって学習を深めることがわかり、男女を

問わず小グループで自主的に学習をしたり、自由研究に取り組んだりする姿も見られるようになってきた。このことは、学級集団、学習集団をさらに高めていくきっかけとなっている。

算数に対する子どもたちの意識は、各学年の学習指導案の中の実態調査をみればわかるように、1学期当初の調査に比べ2学期に入り算数を「好き」と答える子どもが全般的に増えてきている。その理由として、矢頭の子タイムで計算が得意になった子、予習課題によって楽しく学習ができるようになった子、バズ学習によってよくわかり、学習に対して積極的になった子などがあげられる。また、「きれい」と答える子どもは、具体的にその理由が言えるようになり、今後の課題を明らかにできるようになってきている。

課 題

「バズ学習」の取り入れ方については、各学年の実態や単元、学習課題に対応した活用の仕方を考えていくことが大きな課題である。学習課題と学習の深まりは大きな関係がある。学習効果をよりあげるための課題設定をするために、今後も課題づくりの研究を続けていかなければならない。

一方、人間関係においては、これまでの取り組みにより友だち関係の広がりが見受けられるが、教師の共感的な子ども理解と共に、子ども同士の共感的なつながりをより一層推し進めていく必要を感じる。そして学級集団のダイナミックな関係を客観的にみていく方法も検討していかなければならない。

学習を通して子どもたち一人ひとりの考えが表現され、練り上げられ、個性が十分に発揮できるバズ学習を進めるために、可能な限り時間を保障してきた。しかし45分という限られた単位時間ではその組み立てが難しかった。今後授業の組み立てと時間配分について研究していかなければならない。

子どもたちが算数科の学習に意欲的に取り組んでいくためには、学習環境として学級図書、コンピューター、学習材、等を整備していく必要もあるし、われわれ教師集団は一人ひとりの子どものよさを認め、適切な支援を行えるよう今後取り組んでいかなければならない。

評価のあり方については、子どもの自己評価や相互評価を取り入れ始めているが、われわれ教師が先ず評価観をしっかりとつかみ、その上に立って指導と一体となった評価の具体化の実践に努める必要があると思う。

自らの生き方を考えさせる道徳指導 －話し合い活動を生かして

愛知県春日井市立西藤山台小学校教諭

島山 明 美

1 はじめに

現在、いじめが大きな社会問題となっている。自分の弱さ、醜さを感じるがゆえに抑圧された心がいじめという形で噴出しているとは考えられないだろうか。児童の心を深く理解し、本音で語り合う道徳が求められていると思われる。

そこで、資料に応じて授業の形態を3パターンに分類し、それぞれバズの手法を生かした話し合い活動を取り入れていくことが効果的であると考えた。

2 研究のねらい

道徳は人間社会におけるよりよい生き方を求めるものである。現在の世界の中での日本の立場を考えてみると、日本の法の精神にのっとり、しかも国際人として通用するような生き方を求めることが必要であろう。

そのためにはまず、実態把握をする。学年に応じて体験的諸活動等との結び付きを考慮した指導内容を考える。バズの手法を取り入れた児童の判断力と実践力を高めるための指導法を考えるという手順が有効と考える。

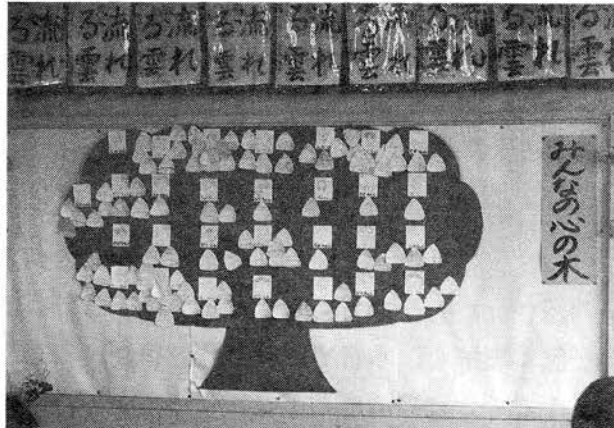
そして、次のような仮説を設定する。

- (1) 自然に本音が出、お互いの成長が認め合えるようなクラスの雰囲気づくりをすれば、本音で語り合うことができる。
- (2) 児童の実態、行事等に合わせて資料を精選し、効果的な指導内容の配置をすれば、より実生活に生きる。
- (3) 資料に応じて、役割演技を取り入れたもの、グループ討論を取り入れたもの、全体討論を取り入れたものの3パターンの授業の組み立てで、自らの経験と結び付けて考えさせれば、より実生活と結び付けることができ、今後の生き方を考えさせることができる。

3 研究の方法

- (1) 本音で語り合える、クラスの雰囲気づくり

何よりも大切なことは、ふざけたりからかったりせず、真剣に自由に発言できる雰囲気を作り出すことである。そのため、教師自ら日頃の学級経営を大事にすることを心がける。学習時はもとより、清掃、日直活動等に於いても4～5人のグループ単位の活動を基本とさせる。そして教師は児童と一緒に給食を食べたり、話しかけたりして、学級の児童の様子を把握することに努力する。



みんなの心の木

また、児童がお互いの良い所を認め合い、良いことを実践しようとする意欲を高めることも大事である。

そこで、学期に一回、「みんなの心の木」運動をする。

(2) 年間指導計画を立てる

計画を立てるにあたっては、実態把握、資料の精選、行事や学習等との考慮、効果的な内容項目の配置が重要である。

そこでまず、保護者と児童に対してアンケートをとり、より確かな実態把握をする。次にそのつかんだ実態をもとに内容項目を重点化する。そして、「明るい心」「読み物資料とその利用」(文部省)、各社の道徳の教科書、NHKテレビ学校放送などの中から資料を精選する。

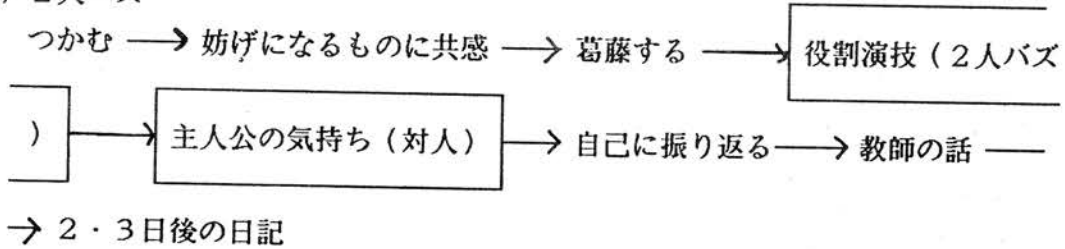
(3) 3つの授業の組み立てパターン

価値葛藤をすると効果的である資料については、2人バズを取り入れ、役割演技によって、心情を素直に自然に吐露させる。そして、心情を味わって話し合ったり自分達にできることを全員で話し合った方が効果的なものを全体討論の形で行う。具体的な自分の体験を話したり、グループで自他に対する意見を述べ合った方が効果的なものを4～5人のバズを取り入れた、グループ討論の形で行うことにする。

4 授業実践例(役割演技のパターン —— 6年生)

(1) 主題 ぼくはこうかいしない<4-(3) 公正・公平, 正義>

(2) 2人バズ



(3) 授業の流れ

指 導 内 容	留 意 点
<p>ア 導入</p> <p>資料を身近に感じる</p> <p>△ 今まで学級会で話し合ったこと、これから話し合いたいことは何か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 係決め ・ 雨の日の過ごし方 ・ 給食時間の過ごし方 ・ 遠足の班決め ・ 球技大会 <hr/> <p>イ 展開</p> <p>内容をつかむ</p> <p>△ 投票箱から出た議題で多かったものは何か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学級の新聞係への注文 ・ 学級のボールの使い方 <p>妨げになる出来事、人物に共感する</p> <p>△ 三郎は、正夫のことをどんな子だと思っているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 体が大きく、スポーツ万能 ・ さっぱりしている ・ 大好きな友達 	<p>○ この字の形態</p> <hr/> <p>○ 教師が一読</p> <p>○ 少ない質問で短時間で</p> <p>○ 絵、フラッシュカードを添付してまとめる</p>

葛藤する

- ▲ 三郎は、投票する時、どう思い、
どちらに投票したか
- ・赤……ボールの使い方
 - ・青……新聞係への注文

役割演技

- △ ボールの問題に投票する三郎とそ
うでない三郎とで役割演技をする

主人公の過ちや正しかったことに気づく

- △ 正夫の「三郎君は学級委員だけある。ぼくの悪いことは今日言われて気がついた。みんなと仲良くやるとよ。」の言葉を聞いて三郎はどう思ったか
- ・わかってくれた
 - ・やっぱり親友だ
 - ・これからはひいきしない

内面的自覚

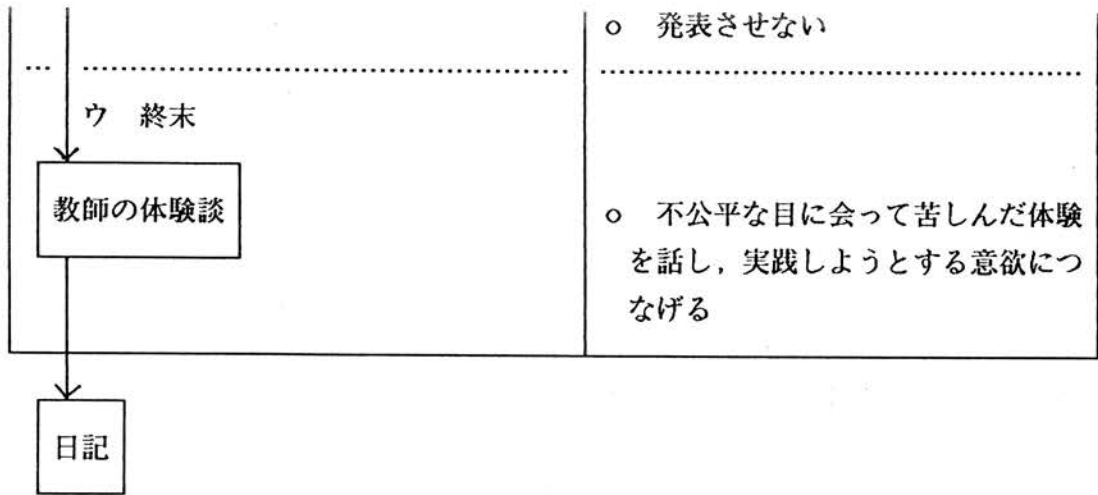
- △ そうするのが公平で正しいとわかっていながらもできなかった時のことを思い出しましょう

- プリントに書かせる
- 反応器で自分の立場を示させる
- 机間巡視をして、児童の考えをつかんでおく
- 発言が出つくしたところでまとめて板書

- 2・3組のペアに2人組のバズを取り入れた役割演技をさせる
- 途中で、三郎をいさめる母を登場させる

- プリントに書かせる
- 隣どうし（対人）で三郎になったつもりで言わせる
- 正しいと思うことを貫き通した充実感を味わわせる
- 発言が出尽くしたところでまとめて板書

- プリントに書かせる
- 正しいと思うことが貫き通せた例や、人に思い切って注意できた例も認める
- その時や今の気持ちも書かせる



(4) 授業の実際と考察

〔葛藤する〕

A男 正夫くんは、裏切れない。
 B子 そんなこと言ったら、もうぼくのこと、親友だなんて思ってくれないかもしれない。
 C子 ぼくは学級委員なんだから、正しい方に決める。

A男やB子のように、妨げるものに共感させた結果、三郎と正夫の関係を印象づけることができ、子どもたちは葛藤した。そして、様々な価値の高さの考えに気付くことができた。

〔役割演技（2人バズ）〕

D子 正夫には悪いけど、ボールの問題の方が大事だ。
 E男 そんなことはできないよ。正夫はぼくの大事な友達だ。
 D子 でも、ボールが使えなくて、クラスみんなが困っているんだよ。
 E男 ボールのことは、後で正夫に教えてあげればいいよ。
 D子 いけないことは、親友でもはっきり言った方がいいよ。
 E男 でも、ぼくには正夫を傷付けることはできない。

ボールの問題に投票する三郎とそうでない三郎とで、2人バズを取り入れた役割演技をした。違った人物に自分を置き換えることにより、自分の考えを自然に話すことができた。演技している児童はもちろんのこと、聞いている児童も同時に考え、深まっていった。また、次にいさめる母を登場させたことによって、E男は、素直に自分の誤りを認めることができた。

〔主人公の気持ち（対人）〕

正夫の思いがけない言葉「三郎君は学級委員だけある。ぼくの悪いことは今日言われて気が付いた。みんなと仲良くやるよ。」を聞いて、三郎はどう思ったか、まずプリントに書かせた。そして、それを隣どうしで言わせることにより、三郎になり切って自分の考えを話すことができ、相手との微妙な考えの違いをも知ることができた。

〔自己に振り返る〕

わたしは、学級会のときに女子が悪いということになってしまって、さすがに女子だけに言いにくかったんだけど思い切って注意としての意見を言いました。そのとき、正夫君と同じようにもやもやした気持ちがあったけど、その女の子の友達もわかってくれたときは、とても気持ちがよかったです。

左のF子は、自分の体験を思い出し、さわやかな気持ちを感じた。また、自分が弱かったと気付き始めた子、自分がいけなかった時のことを思い出し、反省した子、自分のしたことは良かったんだと満足感を持った子もいた。

〔2・3日後の日記〕

この前の20分放課、G君たちが先生が禁止した後で遊んでいたの注意しようとしたらできなくて、迷っていたら、G君が、「禁止されていたんだ。、これ。」と言ってなかなかやめないH君を必死に注意しているのを見て、ほくも言えるよ良かったなあと思いました。

H男は、力が強く不公平なことを平気でしてしまう子であったが、自分からやめて、他人に注意するようになった。

5 授業実践例Ⅱ（グループ討論のパターン —— 2年生）

- (1) 主題 おばあちゃんのにゅういん<4-(2) 家族愛>
- (2) 4~5人のバズ

おじいちゃん・おばあちゃん自慢（4~5人のバズ）

→資料の内容をつかむ

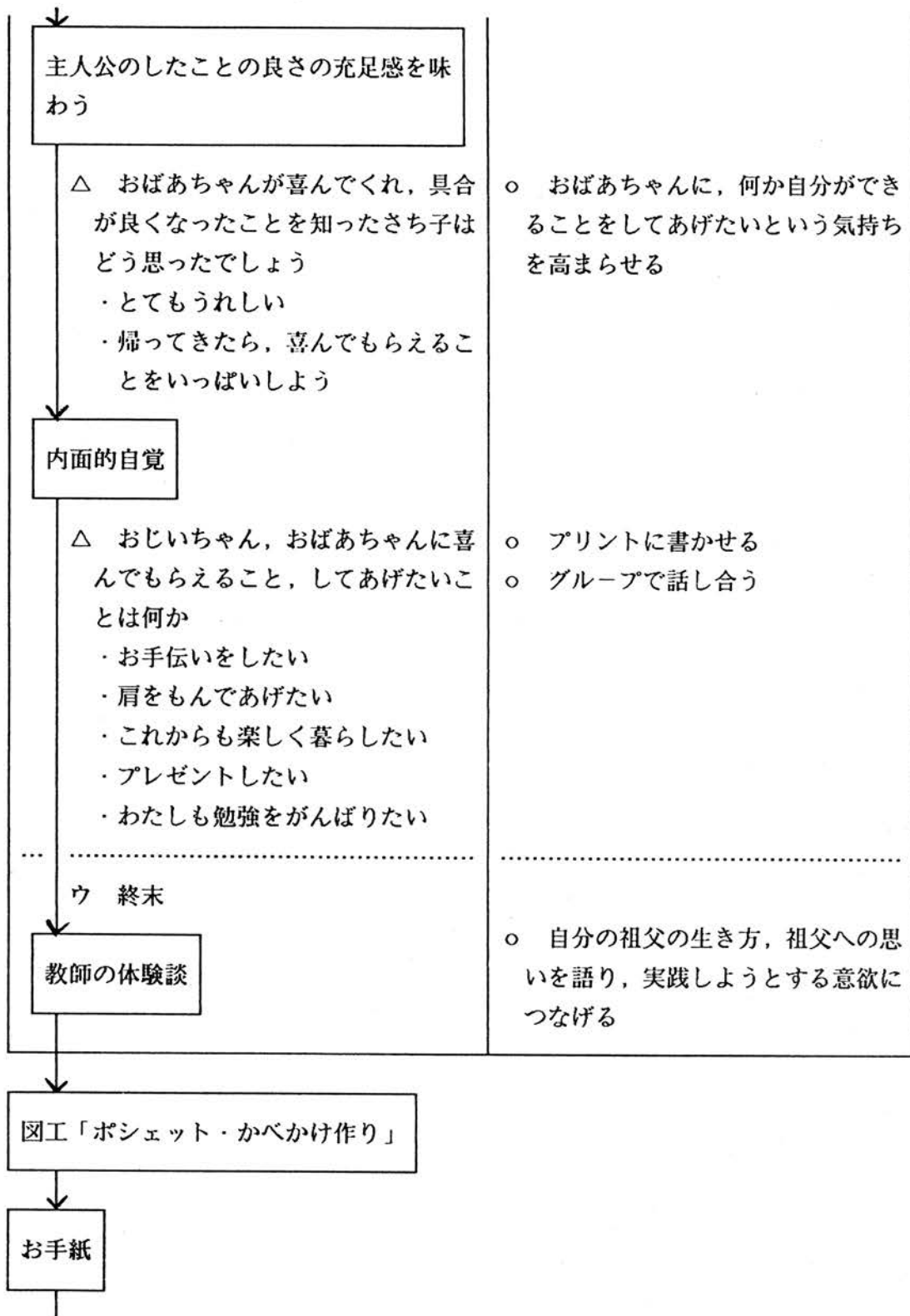
→自己に振り返る（4~5人のバズ）

→図工「ポシェット・かべかけ作り」

→お手紙 →プレゼントとお手紙を渡す →日記

(3) 授業の流れ

指 導 内 容	留 意 点
<p>ア 導入</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">資料を身近に感じる</div> <p>△ ぼくの、わたしのおじいちゃん、おばあちゃん自慢をしよう</p> <p>△ みんなの話を聞いて、どんなことを思ったか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・僕達にとっても優しい ・私達のできない事ができる ・いろんなものをくれる ・長生きしてほしい ・物知りだし、名人なんだね ・お仕事も大変なんだな <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>イ 展開</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">内容をつかむ</div> <p>△ いつも帰るといるはずのおばあちゃんがない。さち子は、どんなことを考えたでしょうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さみしいな ・何かしてあげられないかな ・お見舞に行こう ・折紙や手紙を渡そう 	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループの形態 ○ プリントに書かせる ○ グループで順に全員が発表する ○ プリントに書かせる ○ 若い頃の活躍された話も、積極的に引き出す。 <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教師が一読 ○ 少ない質問で、短時間で ○ 絵、フラッシュカードを添付してまとめる



(4) 授業の実際と考察

〔おじいちゃん・おばあちゃん自慢(4～5人のバズ)〕

- I男 おじいちゃんは、優しくて、昔のものがいっぱいあってある。
おばあちゃんは、いっぱい植木がある。前のミニトマトもまだ実がついていて、虫くいがいつもない。
- J男 おばあちゃんは、早起き。
おばあちゃんは、母さんの内職を手伝っている。
- K子 おばあちゃんは、早起きして、5時か6時に起きる。
おじいちゃんは、なんでも直すことができる。

おじいちゃん、おばあちゃんは、自分達にとっても優しいこと、特技があることなどを子ども達はうれしそうに自慢しあった。

そして、グループでの活発なみんなの自慢話を聞き、今まで自分が気付いていなかったことがわかったり、やっぱりおじいちゃん、おばあちゃんは素晴らしい人なんだと改めて認識することができた。また、L男のように長生きしてほしいと思いやりのある気持ちを書く子どもでできた。

- L男 これからも、おじいちゃんやおばあちゃん達は、ずっと、長生きしてほしいな。おじいちゃんとかおばあちゃんはすごいんだな。

〔自己に振り返る(4～5人のバズ)〕

- M男 肩をもんであげる。お仕事があると、手伝ってあげる。優しくしてあげる。
- N子 山へ行って、紅葉や川で泳いでいる魚やダムを見せてあげたい。
- O子 折紙をいっぱい作ってつるとか動物とか人間を作ってあげたり、お手伝いをしたりしてあげよう。おさらを洗ったり、お布団を敷いたりしてあげる。

グループで話し合うことにより、自分でできることをいっぱいしてあげたいという気持ちに高まっていった。M男は、おばあちゃん子で、甘えの気持ちが強く、おばあちゃんに対してわがままな態度をとっていた子である。N子は、ずっとおばあちゃんに育てられていて、自分の置かれた境遇を不満に思っていた子である。

〔日記〕

P男 ……後で、おばあちゃんから電話がかかってきて、ありがとうと言ったそうです。それを聞いてとてもうれしかったです。

Q男 ……寝る部屋の天井にはっとくと言っていたので……とてもうれしそうでした。

R男 ……おばあちゃんは、ありがとうと言いました。ほくもうれしい。……もっといっぱいあげると喜ぶなと思ったからいっぱいあげたいな。

S男 ……おばあちゃん、長生きしてください。

おじいちゃん、おばあちゃんはとっても喜ばれ、子どもたちもとてもうれしかったようだった。みんな、もっと長生きしてほしい、何かをしたいと思った。

6 まとめ

以上の実践の結果、次のような成果が得られた。

(1) 「みんなの心の木」運動により、実践意欲が増した。

人の善い行いを見付ける喜び、友達に見付けてもらった時のうれしさを感じた。それが、また次への実践意欲へとつながった。クラスが暖かな雰囲気になった。

(2) 実態に合わせた年間計画をすすめた結果、児童は成長した。

生活科の収穫祭では、児童自身でグループでゲームを工夫し、お店の当番や役割を決めた。そして、楽しくできた。

(3) バズの手法を取入れた、3パターンの授業の組み立てで行うことにより、これからの生き方を考えるようになった。

いろいろな角度から児童の心の中を引き出すことができ、友達の考えを聞いたり話し合ったりすることにより考えが深まり、実生活での実践により結び付くことができた。

今後も、児童と同じ高さにたち、児童とともに考える教師であるように努力していきたい。そして、バズを生かした体験的活動にも積極的に取り組んでいきたい。

一人ひとりの子どもの個性を引出し 「育て→高め→広げる」バズ学習

兵庫県尼崎市立園和北小学校教諭

市 来 初 義

はじめに

人間の社会は人と人のかかわりや相互作用が何より大切である。しかし、学校・学年・学級で学習（教育）する上で基本である「人と人のかかわりや相互作用」を育てる教育方法は決して多いとは言えない。

バズ学習は、人間の社会的まじわり（「人間関係を基盤とする教育」）を中心にすえた「学習指導」（教育実践）であると考えます。

最近、教師仲間から「バズ学習」って何！とよく聞かれる。私は「ハチがブンブン音をたてながら寄り添って暮らしている様子」つまり、「すべての子供が自分を表現できる場・機会づくり」だ。と答えている。そして、一度授業を参観にきてください。共に頑張りましょうと呼び掛けている。

1. 育てたい子ども像

本学年の子供は指示待ち・自己中心的で協調性に欠けている。これは、教師の旧態依然の画一的・知識伝達・詰め込み式が重点に置かれた一斉授業の結果であると考えます。

これから更に変化の激しい社会のなかで自ら課題意識を持ち、自ら考え、自ら判断・表現できる子供の育成が重要である。

そのためには、「バズ学習」の手法を導入することにより、一人ひとりの子供のよさを引き出し主体的に課題を見つけ、自分の考えを出し合い、バズグループのなかで深め、お互いに高め合う相互作用を通して自己教育力を身につけさせ、「生きて働く学力」を育てたい。

2. 一人ひとりを生かすバズ学習

教師主導の一斉授業形態から児童中心の授業形態への改造、つまり、バズ学習を取り入れることにより、次のような期待をしている。

- (1) 一人ひとりの子どもを学習に参加させることができるのではないか。
- (2) 子ども間の相互作用を生み出すことができるのではないか。
- (3) バズ学習を生かすことにより学習を能率化することができるのではないか。

(4) 学級集団の質を高めることができるのではないか。

3. 指導の実際

◇グループ編成とバズ活動

- ・当初6人グループで出発したがクラスの実態から4人グループ(男子2人、女子2人)へ編成がえする。
- ・グループ編成にあたっては希望調査を実施し、児童の長所(よさ)が生かせるグループ(例、得意な教科、好きな教科、したい係、忘れ物、スポーツ、信頼度等)にする。
- ・全員班長、全員リーダー制とし、一人ひとりを鍛え、伸ばすために役割分担をさせる。
- ・班長、各リーダーのリーダーシップのもとにバズ学習をすすめている。
- ・他のグループとの横のつながりを大切にするための班長会議を実施する。
- ・毎時間「授業の反省」を授業終了時の3分前に書かせることにより本時の反省及び次時とのジョイントに役立てる。
- ・教科、掃除、給食、遠足、自然学校、体育のチーム等、生活丸ごとのなかで活動させ、お互いの人間関係を深めている。
- ・バズコーナーをつくり、プリントや参考書、ドリル問題、マジック等が自由に使えるように工夫している。

4. バズ学習を生かす授業パターン

《課題 → バズ学習 → 一斉学習 → 確認学習 → ジョイント学習》

◇例、算数科「文章題」

- 1) 課題については児童が興味・関心を持ち、「アッ」と心を引きつける問題を提示する。……………《一斉》
- 2) 課題解決に当たっては、まず一人ひとりが自分の力で具体物や半具体物を使い、操作活動を通すなかで解決方法を見つける。……………《個人》
- 3) 一人ひとりの考えをバズ学習で練り上げ、班としての解決方法を持たせる。
☆ ……………《バズ学習》

4) 班としての考え方を全体へ発表し、話し合い、よりよい解決方法を見つける。

.....《全体》

5) 自分の考え方と全体の考え方を比較し、自分なりの解決方法をまとめる。

.....《個人》

6) 考え方があいまいな所、もっと勉強してみたいこと等を整理し、課題意識(意欲・関心)を持たせる。.....《バズ学習》

5. TTをとりいれたバズ学習

平成5年度実施された学校配置改善計画により、本校にも一名の加配教員があり平成7、8年度と算数科(3年)に絞りTTを導入し、日々取り組んでいる。

本校では学級を一つの単位として入り込みを行う「学級別TT」と学級の枠を解き、学年一斉で行う「学年一斉TT」を推進しているところである。

(1) バズ学習によるTTのメリット

- ① 二人で指導・援助することにより、よりきめ細かな対応が可能となる。
- ② 子供の特性をよく理解するTTのかかわりが強くなるで、教師と子供の人間関係を生かしながら学習が進められる。
- ③ 教師が役割を分担して、各バズグループの実態(よさ)を引き出すことができる。
- ④ 問題解決学習を展開する場合、子供の見通しや自力解決の場面でよい気づきをバズグループの場・全体の場へ引き出すことができる。
- ⑤ 他の学級のよさやバズグループのよさ等今まで気づかなかった子供の実態を、より広い視野でとらえることができる。

(2) 教師の研修・資質の向上

- ① 他の教師の発問の仕方・切り返しかたなど日ごろの授業のなかで学び、それをバズグループへ具体的に援助できる。
- ② 教材のとらえかた学習のポイント等生きて働く研修ができ、お互いに深め合うことができる。
- ③ 他の教師が子供にどう接しているか、それをどうバズグループのなかで生かしたらよいか、常に問題意識を持ち授業にのぞむことができる。
- ④ 教師同士の話し合いの機会や子供たちとの触れ合いが増え、普段から様々な情報を交流しあう雰囲気生まれる。

このようにTTをとり入れた「バズ学習」の手法の導入によって、効果がより高められる。

6. バズ学習による成果（反省）

- ・発言の回数が増え、学習への自信と目の輝きが見えてきている。
- ・他のグループの意見にも興味、関心がでて、学習への取り組みが意欲的になってきている。
- ・資料集めに班合同で図書館、地区会館、本屋等へ行っている。
- ・聞く力、書く力、話す力が身につきつつある。
- ・整理整頓についての意識が高まり、忘れ物が減ってきている。
- ・一人ひとりの所属感が育ち、掃除を協力的にやるようになった。。
- ・遠足等の行事でリーダーを中心に協力し、集合が早くできた。
- ・班で協力した結果、運動会のリレー大会、全校相撲大会、ドッジボール大会で優勝できた。

7. 今後の課題

- ・バズ学習が生かせる教材の精選（基礎・基本的内容）が必要である。
- ・バズ学習における望ましい学習訓練の在り方工夫が必要である。。
- ・バズ学習における評価をどうすすめるか。
- ・教室環境づくりとバズコーナーの工夫をどのようにするか。
- ・バズ学習における教師の位置はどうあるべきか。
- ・バズ学習と一斉学習とのかかわりをどうするか。

8. おわりに

一人の教師のみの意識改革・授業改革では学校はよくなる。 「一人の百歩より、百人の一步」である。一人ひとりの教師の実践を教師仲間を広げていく取り組みを通して子供は変容する。

本校では、三年生の教師が一丸となって「バズ学習」を導入するまで一步一步地道な話し合い・学年研究会の積み重ねがある。さらには、「バズ学習」の手法・理論研究や地道な実践を全校で組織的に取り組むことが重要である。

第4分科会

英語科における協同学習の姿

井上 哲郎 (新潟県新潟市立大形中学校教諭)

英語科のスクランブル学習ー英語科におけるバズ学習の活用

可知 達也 (岐阜県中津川市立坂本中学校教諭)

バズ学習を取り入れた人権教育ーディスカッションを中核に据えた

社会科授業を通して

堤 泰喜 (愛知県春日井市立南城中学校教諭)

助言者

宇田 光(松阪大学助教授)

小島 幸彦 (岐阜県中津川市立坂本中学校校長)

富山 謙一 (東京都教育庁指導部主任指導主事)

司会者

寺井 正輝 (愛知県春日井市立坂下中学校校長)

記録者

澤田 昌喜 (東京都豊島区立道和中学校教諭)

英語科における協同学習の姿

新潟県新潟市立大形中学校教諭

井上哲郎

1 はじめに

今回の私の実践の発表は、様々の要因の複合的結果として学習（授業）の成立がかなり困難な状況の中で、子ども（生徒）たちが本来持っていると思われる”分きたい”という欲求や、”分かってもらえた”という精神的な収穫、そして”他の者と共に活動する楽しさ”を保障していくことを最大限に優先させていくことで、どのくらい現状を変えられるかという一つの試みである。

いわゆる”荒れ”のない、授業の比較的小こないやすい学校では考えもしなかったようなことが次々と起こる中で、これまでの自分の実践の浅さを思い知り、子どもたちの置かれている状況の困難さを少しずつ探りながら、自分なりの状況の分析と解釈を行い、そこから一つずつ方策を試みてきた。

したがって、直接バズ学習あるいは小集団を使つての学習とは呼べないような部分も多いかと思われるが、一つの実践として読んで頂ければ幸いである。

2 学校、生徒の現状とそれに伴う授業の実態

(1) 学校、生徒の状況

現在の学校（赴任2年目）は古くから地域にある学校で、地域に住む人の多くが本校の卒業生である。生徒数は各学年4学級約160人で、全体では13学級約500人。

周囲の環境としては、新潟市の中心からやや東に位置し、商業地区と住宅地と田畑の混在する地区である。近年、都市化の波に洗われ、これまでの田畑の多くが新興住宅地と大型店舗に変わりつつある。その影響で、他地区からの人の流入と大資本の流入がめざましい。なかでも、大資本による大型店舗の急増で、万引きや深夜徘徊などの行動が増加してきている。

そのような環境の中で、当校は何度か”荒れ”を経験してきているが、3年ほど前から1年生から3年生まで、さまざまな問題行動と授業不成立に近い状況が深刻化してきた。

特に、学習（授業）に関しては、学級の半数以上の生徒が塾や家庭教師といった学校外の教育を受けている（受けさせられている場合も多いが）にもかかわらず、基本的事項の習熟や基本的な学習習慣の定着はかなり悪い。さらに、学習成果（いわゆる成績）について劣等感を持っている生徒がかなり多く、それらの要素の複合的な結果として、学習意欲の著しい低下をきたしている。

教科書や筆記用具を満足に用意しない生徒、宿題や予習などの課題に取り組まない生徒、あるいは、一心に友人と話にふける生徒などなど、通常の授業のやり方では、なかなか授業の形にならない状況であった。

（2）授業の実態

そのような状況の中でも、英語の授業はかなり深刻な影響を受けていた。つまり、“しゃべらない” “読まない” “書かない” “そして” “表現しない” という状態では、なかなか理想とする学習活動まで行けないのである。2年生の4月の段階での調査では、小文字のdとbの書き間違いが1～2割、maked、goedなどといった基本的な文法の間違いが、4割程度、book,dog,deskなどといった基本的な英単語が書けない生徒が2割以上といった具合である。また、かなり学習能力の高い生徒であっても、授業中は机に突っ伏している場合が多く、質問されたら答えるがその後はまた机に突っ伏すというような場合も少なくない。

他教科も似たような状況であるが、大きな声で、時に叱責を交えながら授業を進める場合がかなり多く、多くの教師が1時間終わるとぐったりしてしまう。たまに、静かに授業が進んでいるようなので覗いてみると、いわゆる“こわい先生”が自習監督をしていたりする。

3 対策

（1）生徒の実態をどうとらえるのか

上記のような状況の中で、どういった対策を立てていけばいいのか大変迷う所なのだが、私なりにいろいろな状況の生徒に対しあれこれと対策を考え、まず“生徒の心を考える教師”であろうとした。

たとえば、

- ・教室に一步足を踏み入れて、あまりの乱雑さに怒ったりしない。
- ・黒板が消していないからと怒らない。
- ・教科書が出ていないと嘆かない。

- ・鉛筆くらい小学生でも用意するぞ、などといやみをいわない。
- ・たとえ話の腰を折られても、生徒の話を聞いてみる。

などなどである。

突然奇声を発するような生徒は、「存在だけはアピールしようとしているのだなあ。」と
考え、近寄って教科書のページをめくってやり、授業に関係のないことを質問する生徒に
は、一応その話を聞いてやり、「ところで・・・」と黒板の内容についてこちらから質問
してやる。小さな声でしか音読しない生徒がいたら、「声はとても小さいけれどとても上手
に読んでいる生徒がいますね。」とクラスの前で話し、「あれくらい上手なら、どんなに大
きな声で読んでも恥ずかしくない。このクラスにはそういう人が大勢いる。」などと話す。
この辺までくると、それまで音読なんてと不機嫌な顔をしていた生徒の中にも、少しづつや
る気が見えてくる。また、少し教材に手を付けてもものの5分もしないうちに「ああ、もう
わかんねえ！」と叫ぶ生徒には、近寄って行って分からないところを徹底的に個人指導す
る。その時にわざと大きな声で指導して、似たような状況にいる生徒にも聞こえるようにし
て励ましたり、「教師は分からない生徒も大事にしている」という事を学級全体にアピール
する。

つまり、意欲がない生徒の行動を否定的にとらえる教師でなくなろうと懸命に努力をして
いく。ひたすら忍耐と努力である。こんな事を4月いっぱいやっていくと、5月の連休が終
わる頃には少しは授業らしくなってくる。

生徒の心（特に中心的に騒いでいる生徒たちの心）の中に、「この先生は叱りに来たので
はない。英語を勉強させに来ているのだ。」という認識が正しく芽生えてくれば、後は何と
かなりそうだという感触を持てるようになる。

（2）小集団を取り入れる

現在の多くの中学校の英語の授業は、**canned sardin class**（いわしの缶詰学級）と言わ
れるくらいのオーバーサイズの学習者の集団を相手にし、しかも**native speaker**の言語習
得に近い形で英語を習得（学習ではなく）していくには、あまりにも短期間に多くの内容を
詰め込もうとしているカリキュラムの状況の中でおこなわれていると言える。また、小学校
入学以来6年間以上の間に、徹底して学力差（著しく知識・理解・技能面に偏重した意味
で）による対人関係の認識の習慣が形成されているように思われる。

そのような中で、生徒たちを少しでも純粋な学習活動にいざなうには、生徒相互の共同や
励ましなどを使って、より質の高い練り上げられた思考・授業をめざす実践に学びながら、

正確にそのような相互作用の発展段階を追って実践していくことが、対策の大きな柱になるように思えた。

4 相互作用の必要性のある学習活動の設定

(1) 速読練習（初歩的なペアを使った活動）

これは、Hという中学2年生の生徒の教科書のあるページのコピーである。この生徒は、昨年、家庭的にも大変深刻な問題を抱え、小学校以来の学力も大変劣っている生徒である。カタカナをすばやく書くことも他の生徒に比べると相当の時間を要するのだが、夏休みを過ぎた現在、彼の音読は中学1年生後半の平均的段階にまで到達しようとしている。

(この活動のねらい)

- ・意味のあるひとまとまりの部分をできるだけ速く読むことで、感覚的に理解を助ける。
- ・音そのものを重視して、英語本来の音のつながりを自然に身につける。
- ・適切な音量と舌・口唇の豊かな動きを繰り返し練習する。
- ・継続することで、音読技能の向上を自覚する。
- ・自分で選んだ相手と、気楽にそしてある時は真剣に競い合いながら、英語を読むことの楽しさや読めたことの満足感を味わう。

(方法)

- ・基本の発音を、教師と練習する。
- ・”意味のあるまとまり”で、テキストを区切る。（初めのうちは教師が指導する。）
- ・それぞれの”まとまり”を、速読練習する。
- ・自分の机の上を整理し、隣の机と向かい合わせて「島」を作っておく。
- ・その日に練習する相手を互いに探し、ペアが決まったらどこかの「島」に座る。
- ・欠席の状況や人間関係でペアが変わることもあるが、この活動に関しては全く自由である。
- ・2人でもういちど読み方を確認し、互いに読み合い、時間を計測しあう。
- ・ペア毎に、教師の所へ通過テストを受けに来る。
- ・合格したペアから、次の活動に移る。

(2) 訳を練り上げる (3~4人の自由集団による活動)

生徒のテキストの日本語訳を見ていて、表面上の”英語⇔日本語”の変換作業にのみ終始していて、自分の頭(こころ)の中に自分の訳文が入り込んでいないと思うことが多いのは、多くの英語教師の共通するところではないだろうか。せっかく辞書を引きながら時間をかけて訳してみたのに、その結果がなんにも感動や満足感をよばないとしたら、それらの作業は英語嫌いを大量生産する有効な手だてになってしまうのではないだろうか。

ペアによる音読練習や3~4人の小集団での文法事項の簡単な運用練習程度ができるようになった段階で、4月から少しずつ変化してきた生徒たちが、その意欲を持続できるように、生徒が高まりあう喜びを持てるようにするには何が必用なのかを考えて、徹底的に訳文を練り上げる活動を入れている。

3~4人の自由な集団(主に人間関係や基礎学力で分かれる傾向)で、たっぷり時間をかけて教科書や投げ込み教材のテキストの訳をおこなう。

たとえば、EVERYDAY ENGLISH BOOKⅢの中に、

” They are not shy when they are born. But they become shy because they want to be good boys and girls. Their parents always tell them , "Don't say things that people won't like. ”

という文がある。生徒個人に、「この **they want to be good boys and girls.** とは、たとえばどんなことを指すのか。」と訊ねても、「さあ。わからない。」などの答えがほとんどで、積極的に考えようとするエネルギーはなかなか引き出せない。

なにせ、そのように深く考えることは彼らにはかなり面倒なことだし、そのための動機付けもうまくできにくい。これを、班単位でどんどん発表させたり、机間巡視で優れたものを大きな声で取り上げたり(まだきちんと発表のスタイルまで持っていけない場合が多い)するなかで、今まで英和辞典を使うのを嫌がっていた生徒の中に、少しずつ変化が見え始める。辞書をうまく使えない生徒につきっきりで指導しなくても、同じ班の中で教える生徒が出てきたりするからなかなかおもしろい。少しでも辞書を活用して、より上級の訳文ができたら、「おお、その訳は高校レベルだぞ。すごい。」などと宣伝?!をする。生徒たちはこの手の宣伝には結構乗ってきて、別の英和辞典を探したりしてまた工夫をする班が出てくる。

このような作業を生徒主体でやっていくうちに、教師の様々な指導(字を丁寧に書くこと、他の班のじゃまをしないこと、一度習った文法事項はその日のうちにワークブックの練

習問題で勉強しておくこと・・・)が、とてもスムーズに生徒の間に浸透していくように感じる。つまらない教材や、生徒自身ののりが悪くて授業のトーンが上がらないときには、このような指導はなかなかうまく行かないが、生徒自身が満足しているときなら反応が全然違ってくる。また、訳の練り上げの場面でなら、基礎学力の積み上げの少ない生徒でも感覚的に優れた表現力を持っていればその部分が活かされる機会が出てくるので、そういった生徒の個人学習の意欲を高めるきっかけができるというような効果もある。

この活動を1学期中にどのくらい軌道に乗せられるかが、その学級との1年間あるいは2年間の授業がうまく進展するかの大きな鍵を握っている。

学級によっては、“大物”がいて、かなり時間がかかることも多いが、時間をかけて粘り強く働きかけることや、他の生徒たちのがんばりに助けられながら何とか取り組んでいる。実際には、テストまでに進度が間に合わなくなりかけたり、自信を持って与えた教材(詩、歌の歌詞、他のテキストなど)が、全然うまく行かなかったりと、四苦八苦しているのが現状である。

(3) 修学旅行への取り組み(目的班別の活動)

2年生までの英語学習のまとめと力試しをかねて、3年生の春に行われる修学旅行で、実際に自分たちの使う英語がどのくらい使えるのかを試す活動を行っている。個人の英語力を試すこともさることながら、修学旅行の活動班(男女混合4~5人編成)で、協力しあって一つの課題を成し遂げる点に大きな比重を置いている。

事前の準備として、挨拶から質問事項、そして返事を書き留めたりお礼を述べるところまで、基本的に生徒自身に自力で行うことを要求している。そのため、取り組みの最初の段階ではかなり困難を極めるケースが多いが、根気強く動機付けを続けながら、毎年何とか本番に間に合わせている。

(事前の取り組み)

まず、3年生の4月の授業開きから2週間ほどした段階で、今年度も修学旅行で外国人の方と自分たちの英語でコミュニケーションをはかってみようではないかと提案をする。

この段階で、生徒の半数は恐れおののくのだが、結構興奮して楽観的に挑戦したがる生徒もでてくる。この生徒をうまく対話に引き込めれば半分は成功したようなものである。実際に活動を進めていく中で、困難さから音を上げるのもこのタイプの生徒が多いのが分かっているため、ここで「自分からやろう」と言わせておくことが大変重要になってくるのであ

る。

話が何とかまとまったところで、先輩たちの実践の記録（レポート）を見せながらその様子を話して聞かせる。本当は、VTRが残っていると一番よいのだが、自分の担当学年の修学旅行以外ではそうもいかない。

次に、基本的な準備の過程を説明し、自分たちだけの力で準備することが大切なのだと強調しておく。まず、和英辞典や、英会話の文例などを使って挨拶を考えるところから始める。名前や国籍を訪ねるだけでも生徒には結構大変である。

その後で、どんなことを聞いてみたいかを班で話し合う。ここが大変に難しい。ほおっておくと、とんでもない質問が続出する。ここでプライバシーや日本の常識が通じないケースや普段の日本に対する自己認識の浅さなどについて考えさせたり、理解させたりする絶好の機会が訪れる。普段は結構威張っている男子生徒でも、実際に自分が質問するとなると以外と真剣にこちらのアドバイスを聞くものである。なにせ、アドバイスを受ける動機がはっきりしているので、滅多にお目にかかれなような彼らの真剣な眼差しに接して、話しているこちらの方がいい加減なことを言えないくらいである。

こうして準備が整ったら、実際の会話の分担を決め練習にはいる。ここで生徒たちは、互いの英語力をちゃんと考慮しながら公平に決めることが多く、感心させられたりする。

班で何度か練習したら、私と練習、その後外国人の講師が来校していれば、その先生と練習し本番に備える。

本番では、何度か話しかけてやっと英語を話す外国人に会える場合や、最初から親切的な英語話者に出会えたりと様々であるが、最終的に会話を終え記念写真（証拠写真?!）を撮影して、レポート提出となる。

実際には、それぞれの準備段階で、音を上げたり安易な方向に流れたりするケースもあり、そこでどのくらい班のメンバーが励まし合えるかが大きなポイントとなるし、教師と生徒の信頼関係が大いに試される瞬間の連続でもある。

この取り組みを初めて今年で6年目になるが、2年生の段階でどのくらい生徒の学習集団としての質を高めておけるかが成功のための重要な要素だと感じている。その点でも、平素の授業の質の向上を心がけている。

5 おわりに

なんだか、トントン拍子に実践が運んでいるかのようなレポートになってしまったようで、書いた本人としては困っている。

現実には、クラスの”大物”と対決したり、せっかく手応えが出てきたところで、学級の人間関係の混乱などで4月の状態に戻ったりと言う具合に、試行錯誤の毎日である。

また、優れた教材を発掘したり開発するには、相当の時間とエネルギーを要するので、生来怠け者の私としてはなかなか教材が良くならない。

とにかく、教師生活14年目の今、様々な問題を抱える生徒たちに切り込んでいく自分の手数の一つとして、小集団を活用した授業展開がとても有効であるという確信を持ってきたのが大きな収穫である。

6 参考文献

「インプット理論の授業」渡辺時夫 他共著、三省堂

「バズ学習の理論と実際」塩田芳久・梶田稲司編著、黎明書房

「バズ学習による授業改善」塩田芳久・横田證眞編著、黎明書房

「新英研教育講座、15巻（学習集団づくり）」新英語教育講座編集委員会、三友社出版

「明日の英語教育を考える」黒川泰夫著、三友社出版

「斎藤喜博全集、別巻2（教育と人間 他）」斎藤喜博著、国土社

英語科のスクランブル学習－英語科におけるバス学習の活用〈会話活用力を高めるための人間関係づくり〉

岐阜県中津川市立坂本中学校教諭

可 知 達 也

1、英語科のスクランブル学習

- (1) スクランブル活動とは、時間内に生徒個人が対話相手を求めて教室内を動き回り、次から次へと新たな相手を探して、会話活動することを指している。スクランブルとは、英語でいくつかの意味を有するが、英語学習の上では「奪い合う・かき集める・かき混ぜる」という意味から、「多くの仲間と会話する」という意味で使う。
- (2) 英語科としても、人間関係改善の授業の手立てとして、スクランブル学習を取り入れてきた。

2、はじめに

(1) 坂本中学校の位置と地域（東濃東部地域）

岐阜県中津川市立坂本中学校は、県下の公立中学校として岐阜県の東濃東部に位置する。中津川市は、長野県と隣接する地域で山々に囲まれた自然豊かな地域である。

(2) 学校の状態（平成7年度まで）

平成7年度まで、いわゆる「荒れ」の状態にあった。不登校・登校拒否・校内の備品等の破損・授業エスケープ・いじめなどが何度か起こっていた。例えば、授業が始まる時に、まだ教室に来ていない生徒がいて探しに行く。発見して、その場で話をする。何か自分の気に入らない出来事に話が及ぶと、自分の非を認めないで、回りの物に当たり散らす。仲間同士の喧嘩で、生徒が鼻血を出している場に出くわす。喧嘩を止めて、原因を聞こうとする教師に対して、他の仲間が「鼻血を出している生徒を心配しないのか」と、一方的に怒鳴る。仲間が何かの悩みで学校を、欠席することがある。友達として見過ごせないということを理由に、学校から友達の家へ授業中であろうが行ってしまう。指導すると、「先生は、何で友達の苦しみを解ってやろうとしな

いの」と反発する。学校を抜け出すことは、仲間のために当然なことと考える。この生徒達には、自分の感覚が優先するのである。

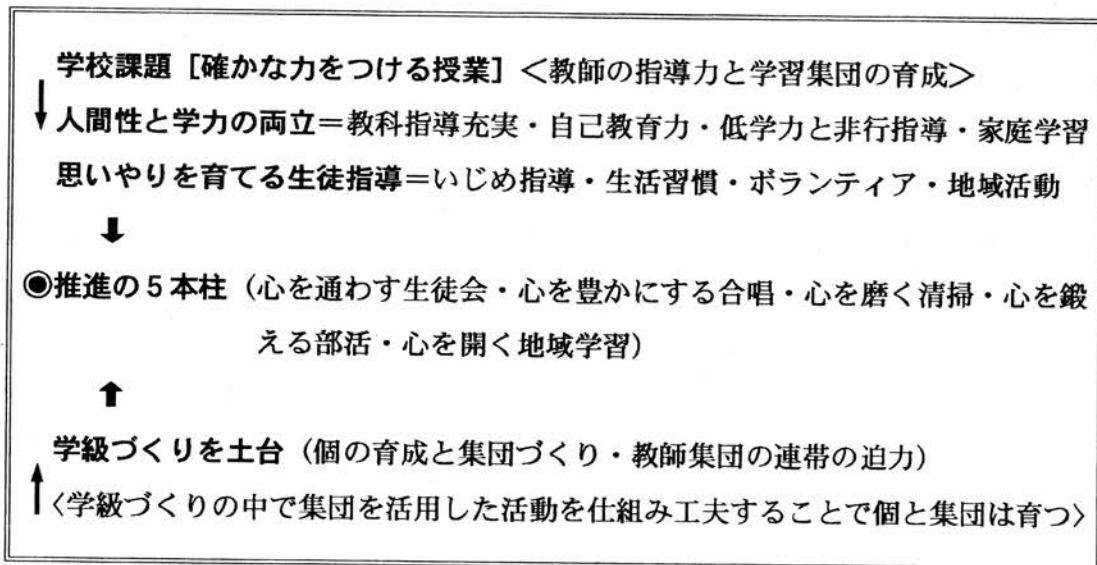
平成7年度に赴任して、学校長以下全職員で、この「荒れ」状態を打破すべき、荒れからの立ち直りに努力してきた。

(3) 生徒の実態

活力や活気がある生徒達であるが、基本的な生活習慣や学習習慣が身に付いていなかった。物事に対する価値観が定まらず、視野が狭いということである。自己中心的でまわりの事を考えたり、仲間の気持ちに立った言動ができにくいということである。また、リーダーの意味が理解できていない面もあり、仲間との活動を通して生徒の視野を広げることが大きな課題であった。

(4) 「荒れ」を原点とした立て直し（新しい学力観をもとにした学校づくり）

①坂本中学校の教育全体構想づくりの推進（抜粋）



②授業づくり（新しい学力観を取り入れた学習活動づくり）

(a)授業改善と小集団活動を用いた学習活動作り→東濃教育事務所研修校指定

(b)新しい学力観の中心は、体験づくり・活動づくり

(c)「発表・活動・助け合い」の場を設定

- ・授業に生徒が意欲的に参加するために、小集団活動を各教科で位置付けた。
- ・小集団活動の中で、体を動かすことと自分で判断する場面を設定した。
- ・小集団活動によって、自分の意見や考えを多く発表するように仕組んだ。

- ・自分と仲間の発表から学び合う相互理解のステップを取り入れた。
- ③校内体制の充実（班を生かした活動を仕組む→仲間との人間関係づくり）
 - ・教師集団＋特別活動分野（特に生徒会活動）で小集団活動に着目した。
 - ・一班一委員会制・一人一役制等、組織的な活動の中でリーダーを育てる。

④開かれた学校づくり

- * 中央教育審議会の第一次答申の中にもあるように、学校・家庭・地域社会の役割と連帯の在り方が重視されている。
- ・地域内に住む人材の活用として「町の先生」に授業補佐していただいた。具体的には、美術の授業での水墨画指導。家庭科実習授業の中での寿司屋さんの模範実習であり、有線放送のアナウンサーの参加による国語の音読授業である。
- ・家庭教育の充実に関しては、授業の内容を保護者に体験していただき、新しい学力観を知っていただくための「夜間中学校」を実施している。
- ・保護者との信頼・協力関係を充実させるために、地域のお祭りでは「風流おどり」を地域指導者のもとに、地域の伝統的行事と体育祭で実施した。

⑤教育経験年数の少ない教師の学ぶ力の育成

- ・学年を主体とした学習会（学級経営・学級活動・道徳指導・行事・常時活動等）

3、人間関係改善こそ最重点課題

生徒は、自己表現がうまくできないばかりでなく、仲間や集団に対して適応する力が不足している。その実態を打開するためには、仲間と本音で話したり、自分のことばかりでなく相手の立場になって考える力を育成する必要がある。そうした互いに尊重できる人間関係を築くために、バズ学習の理念を取り入れた小集団学習を全教科で授業時に取り入れることにした。英語科としても、人間関係改善の授業の手立てとして、スクランブル学習を取り入れ、人間関係の改善に努力をしてきた。

4、学校の現状（平成8年度の姿）

生徒集会が、生徒会主導のもとに行われた。体育祭の中で、生徒達が勝敗に関わらず、まとまって応援・声援を送る姿が見られた。授業の取り組みが委員会や学級で位置付けられてきた。帰りの会での、学級の合唱が定着してきた。すべてが改善されたわけではないが、当たり前前のことが当たり前前に近付いてきている。さらなる指導の充

実が今後の課題である。

5、研究主題設定の理由

英語学習では、言語の特質として、話したり読んだりする活動が欠かせないものである。授業の中で、英語を使って相手に内容や意志を伝達する会話活動を仕組み、会話の練習と表現力を養っていく。そうした時に、人間関係が端的に現われる。生徒は、まず初めに親しい仲間と会話に入る。しかし、英語の中では、育てたい力の一つに、誰とでもわけ隔てなく表現活動（会話活動）ができることがあげられる。そうした国際性を養うことも含め、人間関係の改善を図る指導の充実を小集団活動に求めた。

また、人間関係の土台づくりとして短学活（朝の会・帰りの会）での班討議を仕組み基本的な討議の仕方を学ばせ、英語学習における人間関係づくりの援助をするとともに生活班の活動を円滑にするように試みた。

6、具体的方途

*英語学習における小集団の種類と活用方法（別表参照）

英語科の小集団活動では、ペア・班・コース・コーナー等があげられるが、今回はペア活動の発展的な活用方法としてスクランブル活動を取り上げる。スクランブル活動は本質的には、バズ学習の一つであるにとらえるからである。

(1) スクランブル活動

①スクランブル活動のねらい

・スクランブル活動では、時間内に会話相手を求めて教室内を動き回ることであることは先に説明した。もし、生徒によりよい人間関係が育っていれば、スクランブル活動ごとに、対話の相手を変えて自分の表現が通じるかどうかを試したり、多くの仲間の表現から学ぼうとしたりする意欲や行動がうかがわれるはずである。

②スクランブル活動でめざす人間関係

・スクランブル活動では、自由に誰とでも会話できるという良さもあるが、逆に好きな者同士が優先してしまうというデメリットも起こってくる。本当の意味で、より良い人間関係を育成するためには、自分の話しやすい人ばかりでなく、誰とでも自由に対話できる、雰囲気作りのための手立てや条件が必要となってくる。誰とでも会話する力をつけ、自覚を促すためには、意欲を喚起させるような工夫が大切となる。誰と

でも自由に対話する力は、国際性を養うもととなり、楽しみながら授業に参加するという意味では、意欲を高める指導にもつながる。更にそのことで、テーマをもってじっくり話し合える力と、テーマを多くの人に広げる力を育成するための人との接し方を学ばせることができると考えた。

(2) 短学活における班討議の方法（別表参照）

①班討議の意義と方法

・学校生活の中では、生活班で活動を作り出すように組織化されている。一班一委員会制のもとに、教科係や給食当番など班活動で学級を支えている。そこで、班内の人間関係を正常化して、より質の高い人間関係を作り出すことが、班活動の活発化につながる。班内のトラブルを適切に処理していける人間関係づくりを目的として、班討議をもうけている。班討議は、活動上の改善のみならず、学習面でも教え合い学習ができるように工夫してきた。

②班討議でスクランブル活動を支援

・班討議は、生活班を生かし固定したメンバーである。一定期間の間に固定したメンバーが討議を重ねることで、互いの考え方や行動を知り合ったり支え合ったりする温かい人間関係づくりをねらいとしている。一方のスクランブル活動は、多くの仲間とわけ隔てなく活動できることがねらいである。班討議の中で、相手の理解の仕方を学ぶことで、スクランブル活動が広範囲に、また自在に機能できると思われる。そうした意味では、班討議がスクランブル活動を支える基盤的要素をもっているといえる。スクランブル活動をよりよくするために、帰りの会などで班討議をもうけて、人間関係改善方法を学べるようにすすめている。

7. 具体的活用と実践例（学習指導展開案参照＋学習プリント参照）

(1) スクランブル活動の活用

①スクランブル活動（ペア活動の発展的活動）

生徒に英語で会話させると、自然発生的に仲間関係が浮き彫りになる。つまり、自分の親しいと思っている生徒と会話する。それは、男子同士や女子同士であり、時間があっても自分と仲のよい生徒との会話が終わってしまうと活動が終了してしまう。そこには自分の力を試してみようとする建設的な発想はうかがわれない。

②スクランブル活動の仕組み方

意欲を喚起させ会話力を高めるため、また楽しさを増すために、ゲーム的要素としてポイント制をもちいた。生徒の固定した人間関係を打ち破るための方策である。下に示したプリントの一部が、その条件を示したものである。

p o i n t s

girl⇔girl&boy⇔boy= 1点 / boy⇔girl= 2点 / teacher←you= 3点 / ?←you= 4点

	行 動	仲間の名前	Yes , No	得 点	⑤ ラジオ			
①	テニス				⑥ 洗車			
②	ピアノ				⑦			
③	テレビ				⑧			
④	勉強				⑨			

? = 秘密の生徒

Total (合計) _____点

③スクランブル活動による効力

このゲーム方式によるポイント制で、生徒が自分自身の特定の人間関係を打ち破りチャンピオンになることを目標に持って、会話を時間いっぱいやり遂げようとする姿勢を作り出し始めた。しかし、すべての生徒がチャンピオンになろうとするわけではなかった。仲間が、それまでの仲間関係の生徒だけでなく、新たな仲間と会話する姿を発見して、自分も会話する仲間関係を広げようとする者や、仲間との会話が終わったので、仕方なく他の者と会話を続けるようになってきた者もいる。意欲的な仲間の影響で、人間関係を克服していこうとする行動を起こしてきたことは事実である。

④英語の会話からアドバイスのできる関係へ

下のプリントの一部は、自分の英語表現を完成させるためにコース別学習（教え合い・アドバイス活動）を実施した後で、スクランブル活動に移るためのものである。知らないうちに学習上の関係も仲間としてとらえる力を養うように仕組みでみた。当初は、任意グループが成立するかどうか不安だったが、会話をスムーズにするためや

次のスクランブル活動で高得点を得るために、生徒が少しずつ意欲的になってきた。ゲーム化や活動化が人間関係改善の意欲付けにつながってきた。

.....コース別活動の内容（自分と仲間の音読を聴いてアドバイスし合う）..... ↓
 〈読み方=すらすら・速さ・強弱・抑揚・声の大きさ・区切り方・ジェスチャー・内容〉
 教え合いのルール → 読んで聞いもらう → アドバイスされた内容に○をうつ

スクランブル活動 (名前[○]の記入は会話終了後・暗記で会話ができたら+1点) ↓

	Aコース	Bコース	Cコース	Dコース	Eコース	Points
n a m e						
n a m e						
Point{boy [○] boy=1/girl [○] girl=1/boy [○] girl=2/you [⇒] teacher=3/you [⇒] ?=4}Total →						

⑤人間関係の変化の分析（大きく分けると、3つのパターンになった。）

- A=意欲的になり、たくさんの生徒と会話を望む生徒 → 増加している
- B=雰囲気や状況で会話相手を増やしていこうとする生徒 → かなり増加した
- C=状況に関係なく、自分の決めた仲間の順番に従って会話する生徒
→少数であるが固定化しつつあることが、一番の問題点である

(2) 班討議の活用

①短学活における班討議（1週間に、2～4回実施）

朝の会（10分間）・帰りの会（20分間）を、少しでも仲間関係の充実のために役立て、人間関係の改善につなげることで、スクランブル活動を円滑にしようとするのが目的である。スクランブル活動が多数の人間関係改善をめざすのに対して、短学活は、生活班の活動を円滑にするために、仲間の気持ちをより深く汲み取ることに主眼を置いている。いわゆる、従来のバズ学習の目的に従った班討議を実施してきた。

②生活班で班活動や当番活動を振り返る

本校の生活班は、5～6名で構成されており委員会班と教科班を兼ねている。また一役も班活動の中で、相互にバック・アップするシステムになっている。当然、十分

に活動できない場面は、その責任者だけでなく、班員の支援を振り返ることになる。
トラブルが起こってこそ、班の存在意義が問われ、班討議が活発化する。

③生活班での班学習（教え合い学習）

その日の学習の振り返りや学習の確かめを、班長を中心に学習リーダー（教科による）が問題を出しあったり解らないところを教え合ったりする。

④初期の班討議の仕方

班討議を実質的に開始したのは、昨年度の2学期の終りからである。基本的な生活指導や学習指導に多くの時間を使い、また班活動の仕方を学ばせるのに時間がかかってしまった。したがって、班討議を学ばせるために当初の形として、班長中心に司会・進行をするようにさせている。

8、成果と課題

(1) 成果

①スクランブル学習では、ゲーム的要素が生徒の実態に合っていたこともあるが、最近では、時間いっぱい多くの相手と会話ができるようになってきている。

②生徒の人間関係を表す「○○という人」という言葉が少しずつ減り、固定された人間関係の改善が英語学習の上では見られてきた。

③班討議では、仲間の姿を振り返ると同時に、自分自身の行為についても振り返るきっかけとなってきた。

④生活班の活動の中で、相互に支え合うすばらしさを体感してきたことが、リーダーを支える姿となり、仲間関係における価値ある姿が具体化してきた。

(2) 課題

①スクランブル学習では、自ら活動できることが前提となっているが、消極的な生徒については、学級の仲間が支えることによって成立する。そうした仲間関係のさらなる育成の工夫が必要である。

②班討議において、討議の仕方の種類や工夫を班長に理解させながら、討議の内容やテーマによって、使い分けられる力をつけることが必要である。

③人間関係の特定化や固定化を切り崩す工夫ができてきたものの、生徒に仲間の気持ちや自分自身の言動を振り返ることの大切さを理解させ、考えさせる指導の工夫が必要である。

バス学習をとり入れた人権教育－ディスカッションを 中核に据えた社会科授業を通して

愛知県春日井市立南城中学校教諭

堤 泰 喜

1 研究のねらい

私が勤務する春日井市立南城中学校は、これまで全校態勢で「国際理解教育」「環境教育」の研究に取り組んできた。私も、稚拙ながらこれらの分野の授業実践を重ねてきた。その中で私は次のように考えるようになった。価値観が多様化する現代社会、そしてさらに複雑な問題に直面するであろう未来社会において、“主権者”として生きていく子どもたちにとって大切な資質は、“確かな人権意識”ではなかろうかと。

国連は、1995年からの10年を「国連人権教育の10年」と定めその推進を提唱している。わが国においても、“いじめにどう取り組むか”という緊急の課題に代表されるように、「人権教育」は、学校現場における重要課題になってきている。もちろん、人権の学習は、道徳や学活など学校教育全体で取り組まなければならないものであるが、ここで私が追究したいのは、「社会科に何ができるのか」「社会科においてどのような人権学習をすすめるべきなのか」ということである。

これまでの先行研究を概観してみると、「差別はいけないと思う」という“タテマエ論”に終始する授業や「差別を絶対に許すな！」という価値注入型の授業などが多くみられる。しかし、私たちがめざすべきは、教材を通して生徒の認識や価値観をゆさぶり、「自分はこの問題に対してこう考えるんだ！」と意思決定をさせる授業や、未来社会をつくっていく責任ある1人という自覚の上に、「どうしたら解決できるか」というプランを個々の生徒が模索していく授業ではなかろうか。

私は、こうした授業の具現化のために、次の3点に力点を置いた。

- ① 生徒の発達に応じた「育てたい人権認識」を明らかにする。
- ② 「国際人権」という視点からの素材の教材化をすすめるとともに、「身近な社会事象を人権視点からとらえさせる」ことを目的とした素材の教材化も図っていく。
- ③ ディスカッションを核とした「参加型学習」の授業実践を構築する。

2 研究の方法

(1) 『人権認識構成表』の作成

1時間の単発的な授業実践で、「確かな人権意識」を育成することは不可能である。また、どんなに良い教材を用意しても、それが子どもの発達にそぐわぬものであるなら効果は半減してしまうであろう。「確かな人権意識」は、小学校からの段階的な積み上げによって少しずつ醸成されていくものである。そこで、「どの時期にどのような人権認識を育てるべきか」という、教師側の構えを明かにし、それに基づいて系統的な学習をすすめることができないかと考え、『人権認識構成表』（別紙資料）を作成した。

(2) 生徒の認識や価値観をゆさぶる素材の発掘と教材化

わが国には、国際的視野に立って解決しなければならない人権問題として「元従軍慰安婦への補償問題」がある。その解決法をめぐる価値対立の根は深い。また、日常生活の中で、とかく見過ごされがちな人権問題として性差別があるが、とりわけ「夫婦別姓」を目玉とする民法改正案は、賛否両論が入り乱れ、大いに国民的論議をよんでいる。

このように、議論が真二つに分かれ、大人でも容易に“正解”が出せない問題を、素材として扱えば、生徒の追究意欲は高まり、話し合い活動が活性化する。また、「自分はこう考える、こう思う」という“意思決定”をしていく良い機会となる。

(3) バズ・セッションを基盤とした「話し合い活動（ディスカッション）」の充実

バズ学習の数ある有効性の中で、特に私が実感しているのは次の2点である。

- ① 少人数による短時間の話し合い活動を導入することによって、学習集団全員がいわゆる自我関与を体験し、積極的な態度で学習に参加することが期待できる。
- ② バズ学習は、仲間と協力して目標を達成するという「協同的経験」の機会を与えるだけでなく、学習の中で付随的に起こる「同時学習」が期待できる。

「自分が人権を持っていることを自覚することが人権学習の基礎」とよく言われる。自らの生命への思いは、隣人もまた同じであるという認識につながっていくからである。

授業も同じで、自己実現のできた生徒は、友達が自分と全く違った意見を持っていても、それを1度は“是”として100%受け止め、その上で自分の考えを練り直そうとする。このように、異質のものを受容的に受け止め、多様性を認め合おうとする気持ちが学習集団の底流に流れているか否かが人権学習をすすめる上でのキーポイントなる。しかし、そうした学習集団をつくりあげるのは容易なことではなく、参加度の高い話し合いの地道な積み上げが必要である。ここにバズ学習の教育的意義を確認することができる。

3 研究の内容 授業実践例 単元「男女平等について考えよう！」（公民的分野）

(1) 単元構造図



(2) 授業の展開

今回の人権学習をすすめるにあたってその理論的なバックボーンとしたのは、オーストラリアの人権教育の第一人者、Ralph Pettman 法学博士の著書である。その中の一節を本単元の導入に使用した。

私たちは、ステレオタイプ(固定化概念)でものごとを考える場合がしばしばある。

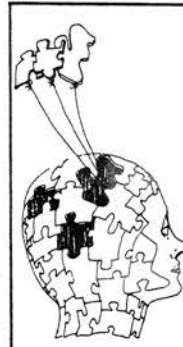
「裁判官は男になるもの」という意識で読むと上の文章はとて理解できない内容である。

このようなステレオタイプこそが性差別をなくす上での足枷となっているが、私たちは呼吸したり水を飲んだりするように、ステレオタイプを自然に受け入れてしまっている。例えば、男の子は、勇敢で活動的で力強く辛抱強くあるべきということを学び、将来“男性的”な仕事につくことを教えられることが多い。女の子は、多くの場合、協調的でやさしくお行儀よくすることを学び、“女性らしく”成長し、結婚して子どもを持つように教えられる。知らず知らずのうちに周囲から“社会のルール”を学んでしまうのである。

第1時では、「男の子だから」「女の子だから」というステレオタイプにはどのようなものがあるか、「男の仕事」「女の仕事」と思われがちなものには何があるかなどを、バズセッションで話し合った。

その中で生徒は、女性が不利益を被るような性差別構造が社会の中にあること、憲法第14条の理念が実現されていないことに気づき、「人権問題の一つ“性差別”について、具体的な実態とその解決方法を調べたい！」という問題意識を持つようになった。

そこで、第2時では、この問題を深く考えるための有効な資料として「新聞記事」があることを知らせ、夏休みの課題として、性差別に関する新聞記事のスクラップを収集することを確認した。また、興味深い事柄については、図書館等で調べてレポートを作成するとよいことをすすめた。(オリエンテーション)



何 が書いてあるか意味がわからないようなものを読んだことがありますか？ うまく書かれていないものを私たちが、読んだこともあるでしょうが、私たち自身のもつ意識が原因となって、混乱をひきおこしている場合もあります。

二人の裁判官が、夕食後、仕事のことについて語り合っています。

「今日の裁判の男をどうしましょうか？ もし、あなたが私だったら、どのように裁きますか？」一方の人が、片方の人に話しかけました。

「あなたは、私が答えられないということを知っているはずですよ。」と返答がありました。「彼の父親は、5年前に死んでしまったというだけでなく、彼は、私の息子でもあるのです。」

- C1 男のだから泣くな！と言われても、泣きたい時は泣きたい。
- C2 女だからお行儀よくしなさいとか言葉づかいに気をつけなさい、おとなしくしなさいと言われる。
- C3 女だからお手伝いをしなさいと言われるから兄がうらやましい。
- C4 市長や社長など、高い地位の人は男になるというイメージがあるが、女が能力的に劣っているとは思えない。
- C5 タクシーの運転手のように「男の仕事」と思えるものがあるが、女にも十分できるのではないか。
- C6 男は外で働き、女は家庭を守ると考えている人が多い。働く場合でも“パート”が多い。
- C7 ドラマでは、OLがお茶を入れたりコピーをとる仕事をしている。
- C8 女は短大を出ていればいいのか、家庭に入って子どもを生んで一人前と考える風潮がある。

新聞記事を使う授業は、ふだんから行ってきたが、それは、教師が用意したものをプリントして配布するという、生徒にとっては受動的な学習であった。また、2年前に新聞スクラップ帳をつくらせたこともあったが、展示発表をただけで、それをもって授業で社会認識の共有化を図るには至らず、言わば“やらせっぱなし”の実践であったと反省している。

今回の実践は、導入の授業によって生徒が共通の問題意識を持ち、夏休みという長いスパンの中で、個々が主体的に課題にいどんで資料収集し、それを持ち寄って授業の中で意見交換するということに特徴がある。

性差別に関わる新聞記事のうち、特に「夫婦別姓」については、現在最もホットな話題になっているので、見落とさないように指示した。しかし、必ずしもこの期間に関連記事が掲載されるとは限らないと考え、民法改正案が出された今年の2月27日前後の新聞を、図書館の縮刷版で調べるとよいことを知らせた。実際に、改正案の国会提出が見送られたこともあって、夏休み中は関連記事が少なく、縮刷版を調べてコピーしてきた生徒のスクラップ記事を増し刷りして配布し、授業の補足資料とした。

教師も、この間「中日新聞」「朝日新聞」を中心に、スクラップをファイルに綴じていったが、何と言っても中日新聞のデータベースが大変役に立った。過去2年間の「夫婦別姓」に関連する記事を検索し、その日付・頁・文字数・見出しが一目でわかるデータを、春日井支局が提供してくれたのである。本社では、NIEの担当者に依頼すれば、必要な新聞記事の文を検索してプリントアウトしてもらえる。

NIE (エヌ・アイ・イー)

Newspaper in Education (教育に新聞を)

NIE発祥の地はアメリカである。若者の活字離れ対策として誕生した。日本でも、教育界と新聞社が協力してさまざま実践が積み重ねられている。NIEは「学習指導要領」が目指す社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間を育成するための教育活動の一つとなっている。

《NIE学習の教育的意義》

- ① 文字を読んで知識を得ることの大切さを体得させることができる。
(=生涯学習のツール)
- ② 生徒が自分で問題を発見し考える学習を保障する。(=主体的な学習)
- ③ 多量の情報の中から適切に情報を選択し活用する能力が身につく。
(=情報処理能力)
- ④ 記事や投書欄、社説に掲載された様々な意見は、生徒の思考に広がり深まりを与える。
(=意思決定・客観的判断力)
- ⑤ 教科書の内容を現実の出来事と結びつけて考えることができる。
(=教科書と実社会を結ぶ懸け橋)
- ⑥ 親子で新聞を開けば、家庭が学習の場となる。(=家庭の教育力)

教育の情報化というと、コンピュータと直結して狭くとらえる傾向があるが、情報活用の基盤・中核は、やはり文字情報である。思考力は活字を読むことで育つ。

00041	中日新聞 朝刊 19960308 生括面	029頁 0541 字 00	CR19960402015600
生括／ 夫婦別姓意識調査 貴札には別姓表示 電話受けたら名乗らない			
960308-NXT000000-2901			
00042	中日新聞 朝刊 19960228 3面	003頁 0369 字 00	CR19960229020100
夫婦別姓客申 自民から異論			
960228-N203000000-0304			
00043	中日新聞 朝刊 19960227 特集5面	005頁 0738 字 00	CR19960228072000
民法改正案調の賛否			
960227-N750000000-0551			
00044	中日新聞 朝刊 19960227 1面	001頁 0759 字 00	CR19960228069500
憲法の夫婦別姓を客申 法制局「5年調議」懸念可憐に 民法改正案調			

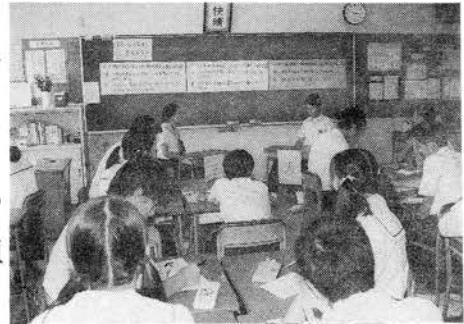
▲中日新聞のデータベース

さて、**第3時**は、夏休み明けの9月に行うこととなった。新聞スクラップ作業によって生徒の意識や思考は、1学期からつながってきているとは言え、やはり、第2時との間に1か月半のブランクがある。

そこで、2学期の言わば導入として、性差別をテーマとしたロールプレイ（役割演技）の授業を行った。それぞれの立場を役割演技することによって、その人間の立場に立っての判断や決定を迫られるので、切実感が増し、実感的理解を促すのではないかと考えたからである。そして、それが次時の学習につながっていくと考えた。また、生徒が提出したスクラップをチェックする時間的余裕もできた。

ロールプレイは、下に示したように、3つのケースのそれぞれの立場になりきり、2人の会話の“続き”を考えて演ずるという内容である。

まず、生徒個々が3つのケースについて自分なりのシナリオを書く。そして、バズ学習の班の中で2人組（演ずる2人組とそれを見る2人組）に分かれてロールプレイを行う。



▲ロールプレイをする生徒

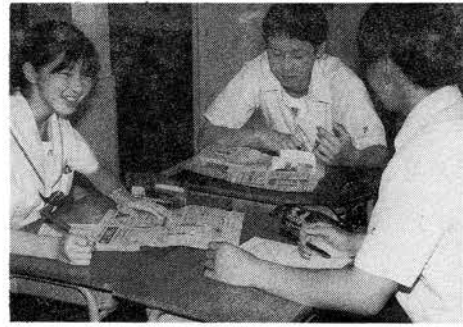
しかし、実際のロールプレイでは、相手の出方によって返す言葉を“アドリブ”で考えなければならないので、自分が描いたシナリオ通りとは必ずしもならない。どの班も、生徒は大変意欲的に取り組み、教室のあちらこちらで、笑いや拍手がわき起こった。班での活動が一通り終わったところで、代表で、何人かの生徒に前に出させて演じさせた。（写真）

<p>テーマ① 家事の分担について —— 共働きを前提とした結婚直前の男女の会話</p> <p>男 僕は残業が多いし、どのくらいの家事ができるかなと思う。</p> <p>女 私だけに家事の負担がかからないように分担を決めてほしいわね。</p> <p>⋮</p>
<p>テーマ② 子どもはどう育てるか —— 子どもが生まれることになった共働き夫婦の会話</p> <p>女 子どもは保育園にあずけて仕事を続けたいと思うわ。</p> <p>男 子どもは母親が育てるのが一番いいんじゃないか。</p> <p>⋮</p>
<p>テーマ③ 会社の中での男女の地位 —— 会社説明会で採用担当者と就職希望者の会話</p> <p>男 結婚されたらお仕事はどうされますか。</p> <p>女 結婚後も働きつづけるつもりです。</p> <p>⋮</p>

この授業によって、性差別の問題は一筋縄では解決できないこと、男女間の認識の溝を埋めるには十分な話し合いが必要なこと、問題を解決するためには社会という大きな枠組みの中で考えなければならないことを生徒は実感的にとらえた。

第4時では、生徒が持ち寄ったスクラップ記事をもとに、現在どのような性差別があり、何が問題となっているのかを、具体的に事例を挙げながら話し合うこととなった。

授業は、まず、バズセッションで性差別の事例を列挙した後、それを全体の場で発表して、問題点等を確認するという流れをとった。



▲ 性差別について班で話し合う生徒

生徒は、新聞記事という具体的な資料を手元持っているので、皆が同じ土俵で話し合うことができ、社会科の得手・不得手を問わず、自信を持って発言していた。したがって、バズセッションは、どの班も大変活発であった。

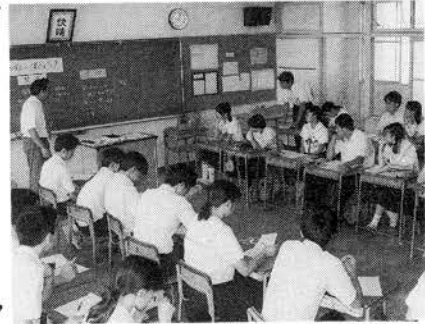
- C1 男女雇用機会均等法ができて今年で10年になった。この間に、女性の雇用者は、500万人も増えて、全体の4割を占めるようになった。
- C2 3月に大学や短大を卒業する女子の就職は、やっぱり「氷河期」みたいだ。求人倍率は大卒男子が1.80倍なのに対して大卒女子は0.64倍、短大卒女子は0.58倍となっている。これは、就職差別だと思う。
- C3 国際労働機関（ILO）の調べによると、女性の平均賃金は、男性の4分の3にすぎない。管理職に女性が占める比率も6%に満たないそうだ。
- C4 パートタイム労働者の65%から90%を女性が占め、新たに増えた職業女性もパートタイムが多いそうだ。パートは正社員にくらべて、立場が弱く、待遇も悪いと聞いている。
- C5 今の均等法では、募集や採用や昇進を均等にするように求めているけれど、やっぱり罰則をもうけないと徹底できないと思う。同じレベルの労働には同じ賃金をはらうというきまりも必要だと思う。「女子保護規定撤廃」と書いてあったが、少し内容がわかりづらい。
- C6 「育児休業法」という法律があって、男女ともに育児のための休みがとれるけれど、実際には、「子育ては女性の仕事」とか「男が育児で休んだら上司に何かいわれる」とかの理由で、実際にとった男性は少ないらしい。北欧などでは「パバクオータ制」といって、育児休業期間の一部を必ず父親がとるように義務づけているらしい。
- C7 セクシャルハラスメント（性的嫌がらせ）の防止策について検討している企業が少しずつ増えてきているらしい。でも、朝日新聞の世論調査では、職場のセクハラは「会社の問題」とする見方は、アメリカで53%、日本は18%と、まだまだ意識が低い。
- C8 労働省も、セクハラ問題を「男女のコミュニケーションギャップ」ととらえて、対策を強化しているようだ。
- C9 名古屋市営地下鉄に女性車掌が誕生した。愛知県の三好町や長久手町に女性消防団ができた。国連の事務総長に緒方貞子さんを推す動きもある。女性判事も今年は100人を突破した。女性の社会進出は少しずつ進展している。
- C10 日本航空が女性客室乗務員の呼び方を「スチュワーデス」から「フライトアテンダント」に変えた。世界一流のウィーン・フィルハーモニー・オーケストラも150年の「女人禁制」の伝統をすてた。女性差別を改めようという動きは世界中で始まっている。
- C11 夫婦別姓の問題は、賛成する人と反対する人が真二つに分かれているみたいだ。じっくり考える必要があるな。

一つ一つの問題点を具体的に考えることができたが、それぞれの解決方法にまで、深入りすることはできなかった。そこで、今日の課題である「夫婦別姓」に絞って、次時で考えていくこととした。

価値観の対立するテーマについて討論する場合、最近では「ディベート」が用いられることが多い。私もこれまで、「原子力発電」や「愛知万博」の是非を問うディベートを行ってきたが、その中で、ディベートが自己教育力の育成につながる優れた教育技法であることを実感した。しかし、次の2点を理論的に克服することができなかった。

- ① 自分の考えとは全く異なる主張をすることが社会科として本当に価値があるのか。
- ② ディベーター以外のいわゆる聞き手の“参加度の低さ”にどう対処するか。

そこで、**第5時では**、「夫婦別姓」の是非について、賛成派・反対派に分かれ、ディベート的要素とバズセッション的要素の両面を合わせ持つディスカッションを行った。これによって生徒は、自分の“思い”を本音で主張することが可能となった。しかし、議論が必ずしもかみあうとは限らないので、生徒の考えを記載した座席表を活用し、ディスカッションが停滞した時、意図的に指名して討論をつなげた。（＝教師の出場^{でば}）



▲「夫婦別姓」について議論する生徒

賛成グループの主な論点	反対グループの主な論点
<ul style="list-style-type: none"> ◇ 個人の自由を尊重すべきで、一方の姓を押しつけるのは、男女平等の考えに反する。 ◇ 実家の姓を大切に思うのは夫婦とも同じ。 ◇ 名字が変わって仕事に支障が出た女性が多い。別姓にすれば女性の社会進出が進む。 ◇ 法の上で別姓が認められれば、その影響は計り知れない。従来^{でば}の嫁・妻という感覚や、働く女性に対する見方も変わる。 ◇ 別姓を認めている国が比較的多い。 ◇ 改正案は別姓・同姓を選択できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 夫婦や家族の一体感が薄れる。家族の絆が崩壊すれば、社会の崩壊につながる。 ◆ 今の同姓制度は社会に定着しているし、今の民法は、男の姓を強制していない。 ◆ 子どもの名字をどちらにするかが難しい。いじめにつながる可能性もある。 ◆ 表札・電話・お墓・近所づきあいなど不便なことが多くなる。 ◆ 離婚が増える原因になるのではないか。 ◆ 国民的な議論が十分なされていない。

第6時では、「ウィルあいち」（愛知県女性総合センター：名古屋市東区上野杉町1）で借用したVTR『ならんで一緒に歩きたいー男女共同参画社会づくりに向けてー』（日本広報協会）を視聴し、同タイトルのブックレットを読んで、単元のまとめとした。

4 研究のまとめと今後の課題

『人権認識構成表』の作成と、バズセッションをはじめとする“参加型”の授業構築は、方向性としては間違っていないと確信している。人権意識は、実践の積み上げによって、スパイラルに醸成されていくものと思う。単発に終わらせないことが今後の課題である。

第5分科会

バズ学習を取り入れた保健体育科指導法の工夫
堺水尾祐文（東京都青梅市立青梅第一中学校教諭）

保育の授業を通して「こころ」を育てる
朝日 啓子（菊華学園菊華中学校高等学校教諭）

発展的なバズ学習による多様なバズ学習形態の工夫
橋本 勇治（岐阜県土岐市立泉中学校教諭）

助言者

小石 寛文（神戸大学教授）

鹿内 信善（北海道教育大学教授）

伊藤 信彦（岐阜県土岐市立泉中学校校長）

上原 健夫（東京都教育庁体育部指導主事）

司会者

長縄 秀孝（愛知県春日井市立鳥居松小学校校長）

記録者

長谷川貢一（東京都杉並区立泉南中学校校長）

バス学習を取り入れた保健体育科（球技） の指導法の工夫

東京都立青梅市立第一中学校教諭

堺水尾 祐 文

1 主題設定の理由と実践のねらい

今日、学校教育に求められていることは様々であるが、特に重要な課題として、一つは「生きる力」を育むことである。21世紀という厳しい社会を生きていかななくてはならない子どもたちにとって、変化の激しい時代を切り開き、新しいものを創造していく力を身につけていくことが大切である。そのためには自分で課題を見つけ、その課題を解決していく課題発見力と課題解決能力を持つこと、つまり主体的な思考力を身につけることが必要である。

二つめは「社会性」を育むことである。今の子どもたちの実態として、自らを律しながら他人と協調するということができない子どもたちが増えている。これは、生活体験・社会体験が非常に乏しくなり、社会性が十分に備わっていないからである。

このような課題に対して、私は「バス学習」の考え方・方法を取り入れた学習活動が極めて有効であると考え、保健体育科の授業で活用した。生徒が相互に教え合う中で、自己の考え方を持つ場を多くし、その課題に興味を持ち、主体的に授業に取り組みさせることで課題がにせまることができると考えた。

バス学習を保健体育の授業に取り入れたねらいとして、

- (1) バス学習は、生徒の学習活動に対する参加意欲をより高める。
 - ① 少人数になることで気後れせずに発言できる。
 - ② わからないことを気軽に聞ける。⇒わかりやすい⇒やる気が出る。
- (2) バス学習は、人間関係を深める。⇒社会性
 - ① 一人一人の良い考えや態度が育つ。
 - ② 話し合いが多い⇒人の立場がわかる⇒素直に聞ける⇒良い人間関係ができる。
- (3) バス学習は、知識・技能を高める。
 - ① 話し合いで理解度が高まる。
 - ② 友達の見解から自分の考えを反省し、自分がだんだん良くなる。
- (4) バス学習は、自己教育力を高める。⇒生きる力
 - ① 自ら学ぶ意欲は、興味・関心・意欲・態度・知識・技能を高められ、学ぶこと

の喜びを感じたときに育つ。

② 自分の考えが持てることで、課題発見力や課題解決能力が身につく。

以上のようなことがあげられる。

2 実践の概要

(1) 球技の目標と授業形態

上記のねらいにもとづき、私は保健体育科の授業の中で球技（バレーボール）と集団行動の領域にこのバズ学習を取り入れて指導の研究を実施した。今回は球技についての概要を述べる。

球技は、もともと集団で競技するものが多い。学習指導要領にあるほとんどが集団競技である。したがってその目標も「チームにおける自己の役割を自覚して、その責任を果たし、互いに協力して、計画的に練習やゲームができるようにするとともに、勝敗に対して公正な態度がとれるようにする。」とある。まさに小集団における人間関係を重視した目標といえる。

従来の授業においては、試合や試合前、また授業中の一部で、チームとして学習する以外は、個人単位の一斉指導がほとんどである。例えばバレーボールのオーバー、アンダーパス、サーブは最も重要な基礎技術であるが、その練習の単調さに生徒はすぐに飽きてしまうし、興味を持つまでにいたらない場合が多い。さらに、試合においてもかなりゲームを重ね、その技術が高まらなると、バレーボールの特質から、十分に楽しむにはいたらない。苦手な生徒はますます得意な生徒との技能の格差が広がるばかりである。もちろん一斉指導は大切であり、私も日常用いているが、一斉指導だけではその目標は達成されにくい。

(2) バレーボールの授業にバズ学習の活用

バレーボールの授業にバズ学習を用いるには、単元の指導計画の中でどこの部分でバズを使い、どこで一斉指導を使うかということを確認にする。取り扱う学年にもよるが、このポイントは必ず教えるというような技術解説は一斉指導でおさえ、その練習についてはバズを使いながらという方法をとった。特にオーバー・アンダーパスを反復練習する際には、お互いのフォームの長所・短所をチェックし合い、それらを班員で教え合うという方法は、生徒にとって興味深く、しかも一生懸命にやる。また、ここで班の中での簡単なパスゲームなどを取り入れると、楽しみなが

ら授業を進めることができる。もちろん、その他の技術（サーブ、アタック等）も同じように技術解説は一斉指導、反復練習はバズで、という方法で進めた。

ここで重要なのは、バズ学習は教師が意図的に生徒相互の働きかけや、協力によって個々の生徒や、その集団全員の能力を高めていくことを目的としていることである。学習の主体は生徒であるが、話し合いの時間や班員の構成、班長、人数に至るまで教師が関わるのがバズ学習である。ただ単に機械的にグループに分け、特に意図的な目標も持たせないで放任する事とは全く違うのである。

（3） 学習カードの活用（学習記録・自己診断表）

バズ学習をすすめていく上で、生徒の自由な発想による練習形態は大切であるが、その時間に何を目標にして、どのような技術を修得するのかを理解させなければいけないし、せっかく出た班員の良い意見やアドバイスを、そのままにしておくのはもったいない。また、自己評価や相互評価の記録もほしい。そこで、学習カードが有効な手段となる。

バズを行った時には必ず、はじめと終わりに記録の時間を設ける。本時の目標や自分のめあてや考えだけでなく、友達から受けたアドバイスもしっかりと記録しておく。

3 実践例

（1） 指導計画（3年生男子 バレーボール）

1～2時間目 オーバー・アンダーパスの復習（一斉指導）

3～5時間目 バズ学習によるオーバー・アンダーパス練習（含む一斉指導）

6～8時間目 バズ学習によるサーブ・アタック練習（含む一斉指導）

9～12時間目 試合及び技能試験

（2） 指導内容

① 班編成

班の人数は6～8人。運動能力の偏りがないように配慮し、教師が編成する。また、バレーボール部員がいる場合はできるだけ均等に分散させる。班長はバレー部員もしくは、その班をまとめられようなリーダーになれる者を選出。

（教師）また、身長なども、班によって偏りがないように配慮する。

② 指導の重点

- ア. 一斉指導時に基礎基本事項は十分に説明、徹底する。
- イ. バズに入ってもその時間何回かは一斉指導を数分行い、めあて等を明確に意識づけをする。決して放任するのではない。
- ウ. バズにおいては常に話し合いをまじめにさせることがポイントであるので、巡回し助言を与える。
- エ. 生徒の自由な発想や、お互いに協力し、教え合うことを援助する事を忘れず、教師の多すぎるアドバイスは注意する。

③ 評価

- ア. 単元のはじめにプレテストを行う。(2、3年のみ)
- イ. 学習カード(学習記録・自己診断表)による事後評価及びプレテストとの比較。
- ウ. 技能試験による教師の評価

4 実践のまとめと今後の課題

バズ学習の授業への導入は、私は今回紹介した保健体育の球技以外の授業においても、集団行動、器械体操で実施し、さらに道徳や学級活動にも取り入れたが、いずれも生徒一人一人が生き生きと興味を持って学習し、技能も向上することを確認している。いくつかのルールにしたがい、自由な発想で協力して学ぶ過程で、生徒の持っているパワーとエネルギーを感じた。

バズ学習を保健体育科の球技の授業に応用し、生徒自らが主体的に授業に取り組む指導法の実例として述べてきたが、これからの教育において、このような人間関係を基盤とする指導法は、保健体育科に限らず他教科においてもますます重要と考える。

生徒相互による働きかけや協力によって、個々の生徒の技能や、意欲を高め、主体的な思考力を身につけることは、これからの変化の激しい時代を切り開き、新しいものを創造していく力、すなわち「生きる力」や「社会性」を育むことにつながる。また、このことは「いじめ」や「不登校」というような問題の解決の一助ともなる。

しかし、まだまだ課題は多い。導入種目の検討、男女共修、評価などである。今後、これらの課題を教育の様々な場面でバズ学習を活用しながら追究していきたい。

- * 参考文献
- ・バズ学習の理論と実際 塩田芳久、梶田稲司 編著
 - ・授業活性化の「バズ学習入門」 塩田芳久 著

保育の授業を通して「こころ」を育てる

菊華学園菊華中学高等学校教諭

朝 日 啓 子

実践活動Ⅰ 折り紙絵 個人活動

実践活動Ⅱ 児童文化財の製作 グループ活動

日本の現代社会では「育児、保育は女性の仕事」という概念が、実質的に男女の性役割として方向づけられてきた。「女性が産む機能を持っている」という生物学的な違い以外に、男女の差は、基本的にはないという認識のもとに、これからの家庭、家族を考える必要があるのではないだろうか。しかしながら、「一人の人間を育て上げる偉大な仕事」として男性よりも女性の方が、より多くその機会に恵まれている現在の社会機構の中で、女性は育児、保育にかかわることが出来ることを誇らしく思い、責任の重大さを認識しなければならないと思う。

本来、男性の役割が社会の公的分野を担う一方で、女性の役割が家庭を中心とする社会の私的分野、即ち家事、育児、介護といった資質を持っているとされ、前者が後者よりも高く位置づけられて来た。そのため、女性は、妻として、母親として、社会的に評価されることなく、すべて無償の労働として甘受していたため、子育てのような大切な仕事であっても、どうしてもやり甲斐のないことに思われてしまうのである。しかし、「三つ子の魂百まで」といわれるくらい、子どもの人格の基礎は、極く幼少時に出来上がり、子どもをとりまくすべてのものが、この時期に強く影響を与えることは周知のとおりである。そこで、保育に携わる者は、自分自身の人格を磨き、情緒豊かな円満な人間性を持つとともに、より良い環境の中で子どもを育てるように心掛けたいものである。

「こころ」を育てるなどとは、簡単に口にすべきではないかも知れない。しかし、善悪、思慮分別、判断力、相手を思いやる気持等こうした感情は、あらゆる機会をとらえて育んでいかなければならない。

現在の教育に期待されるところは、自分自身の意識や価値観を育てながら、生きていく過程のいろいろな場面で、自ら判断し、選択する力をつけさせる。そして、これからの社会の中でいきいきと生きながら、その社会を支えていかなければならない子どもたちの「こころ」を、すくすくと育てる手助けをすることが、保育者の使命であると思う。

保育の授業といっても、年間50時間余の授業時間では、どれ程理解できるかどうかは非常に難しい。保育の実践活動は作品完成を目的として、個々の性格をグループの中で触

来ないものは、自宅へ持ち帰り完成させる。

発展 出来上がった作品について、各ペアになって母子の対話をしてみる。上手に対話が成り立てば、目的達成と見なす。

- 感想**
- 1 忘れていた折り紙を久し振りに触り、自分の思ったものを創り出すのに苦労し、折り方の本と首っ引きで、悪戦苦闘していたが、穏やかないい顔つきで終始楽しそうにやっていた。
 - 2 出来上がった絵は、やはり生徒の心のありようが伺え、考えさせられた。幼児体験の豊かさ、貧しさがはっきりと現れている。

実践活動 II 児童文化財の製作

授業形態 グループ活動 **配当時間** 10 時間

テーマ ① 創作絵本

- ② 昔ばなし 日本語から英語へ
- ③ 童話 外国版 英語から日本語へ
- ④ かるた 犬棒かるた、 創作
- ⑤ 紙芝居
- ⑥ 遊具

動機

現代のように国際化した社会の中で、私達はいろいろな機会をとらえ、異文化と触れ合い、感動や驚異とともに、自国の伝統文化の素晴らしさを知ることができるが、日本人は特に古いものを片隅に追いやり、新しいものへと簡単に飛び付いていく。これは適応力があって良い点でもあるが、客観的に日本を眺めてみると、「日本ってどんな国？日本の良いところは？」と聞かれても仲々即答出来ず、結局は何も知らないことに気づき、恥ずかしく思う。

しかし、私たちは次世代へ文化を伝承していく役割を持っている。

乳幼児の遊びは生活そのものであり、大切な学習の場でもある。児童文化財は子どもの

れ合わせ、円満な人間関係のあり方を学び取ることが出来ると思い設定した。

対象 実践活動Ⅰ、実践活動Ⅱにおける対象生徒は、この授業方法をとってから3年目になるが、過去2回は総合コースの3年生で、生徒の卒業後の進路はそれぞれ異なり、必修科目の1単元として実施した。実施にあたり、目的意識の異なったメンバーで製作意欲、関心度等教育効果を上げるのに必要な要件が欠けていた。そのため、話し合いによる意志統一を図るのに、かなりの時間を要し、製作時間の配分に苦勞した。しかし、今年度はカリキュラムの変更により、3年生の選択教科「幼児教育」として科目を設け、卒業後の進路が一応保母、幼稚園教諭等を目指す生徒27名で編成された。そのため、全員の目的意識が一致しているため、指導目標に従い、方向付けることが容易であった。

動機づけ

(1) 児童憲章の理念の理解。

人の命の尊さ、人は等しく幸せになる権利を持っていること。

(2) 先ず自分自身を知ろう。

親子関係は？ 兄弟関係は？ 友人関係は？

(3) 幼い頃の思い出。

(4) 自分の性格について考えて見よう。

以上のことを考えさせ、自分自身を好きか嫌いか。

自分自身を愛することの出来ないものは、他人を愛することは出来ない。

他への思いやりはここから始まるのだということをいろいろな角度から話して聞かす。

実践活動Ⅰ 折り紙絵 教材 画用紙 折り紙

折り紙教材が幼児期の指先を使って行なう好ましい教材であることを説明し、童心に還って一枚の絵を仕上げる。折ることを中心として、創作絵話しを考える。

展開 個人製作 配当時間4時間で完成させる。

相談する時間は必要ないが、得手、不得手の個人差がはっきり現れ、時間内に完成出

遊びを助長し、心の栄養となり、質の高い文化的刺激を与えるものである。

特に、テーマに示した児童文化財の昔ばなしや犬棒かるたなどは、日本人の「こころ」が脈々と流れ、現代の若者が嫌う真面目さ、我慢、頑張り、正義、努力、他への思いやり（あらゆる人間関係の中で産み出される他人への関心や援助性）、優しさ等をグループ活動により、作品の製作を通して体験させたかった。

展開 (1) 各個人が何を作りたいか考えさせ、それぞれの作品でグループを作る。

(2) 2人～5人で6グループが出来た。

(3) 最初の2時間は、グループ作り、構成、材料、製作時間の予定表作り。

(4) お互いに意見交換がなされ、製作にあたり得意とするものの役割分担をする。材料等の購入分担も各自可能な範囲で引き受け、次の授業までに支障のないよう準備する。

(5) 製作開始

「ああでもない、こうでもない。」「ああしよう、こうしよう。」「こっちの方がいい。いや、そっちの方がいい。」一斉授業では見られない騒々しさ。他クラスへ気遣いつつ、じっと我慢する。

(6) 進行状況を観察しながら、机間巡視し、適度に助言する。

(7) 軌道に乗り出すと、黙々と真剣に取り組む。

(8) ゆとりが出だすと鼻歌さえ飛びだし、穏やかないい顔つきをして来る。

(9) 完成に近付くと、普段は教師から居残りや休日登校を指示すると不満をいうが、自発的に申し出て、完成へと取り組む。

(10) 初めの考えよりも、もう少し、もう少しと工夫を凝らし他のグループよりもいいものをと、競争心も湧いてくるようだ。

指導留意点

(1) 動機づけがきちんとなされていること。

(2) 手作りの価値、児童文化財製作によりこどもを知ることの意義。

(3) グループ作りの際、どうしてもグループに入って行けない生徒が必ず出てくる。そうした生徒が、自然な状態でグループに入れるように配慮する。

(4) 教師の柔軟な発想の転換が必要。

教師の要求以上のよいものが、生徒のアイデアとして出て来ることがしばしばある。その折りは、柔軟に対応し、素直に認めて褒めてやる。

生徒は、それによって喜びと得意の感情を表現し、一層の意欲をかりたてることができる。

- (5) 出来上がった作品の優劣よりも、活動を通してプロセスが大切であることに着眼して、適切な観察をする。

結言

いつの時代も、家庭教育、学校教育について各方面の有識者が論議し、研究されているにも拘らず、子ども達に関する諸問題は非常に難しくなっている。私も20年弱、現場にあって、日々生徒の諸問題に対処しているが、常に「なぜ?」「どうして」「どうすれば?」と迷いつつ、これといった解答も見いだせぬままに、ただただ力不足を感じている。

急速な科学の発展とともに、目まぐるしい情報社会の中であって、人間の価値判断が機械化され、ややもするとスピード、便利さのみを追い求め、人間の「こころ」の入り込む隙間さえ与えてくれない現状から、個人の尊重という理念は益々遠ざかって行くような気がしてならない。

最近、特に人間関係で悩む生徒が増えたことである。人間は生後6～10か月の間に、特定の一人の大人との愛着関係を通じ、愛され、大切にされることを経験する。後にこの関係が土台となって、人間関係を広げ、やがてバランスのとれた社会人として成長して行くのである。この事実を真摯に受け止め、過保護や放任によって幼児の貴重な体験を奪うことなく、大人にとって都合のよい子どもを育てるのではなく、子どもにとって何が幸せなのかを見極めて、より豊かな幼児体験をさせ、厳しさと優しさを兼ね備えた養育がなされるべきである。

また、敢えて付言するならば、養育に父親の積極的な参加が望めるなら、子ども達はどんなにか幸せなことだろう。現実には、父親の陰の薄さには心を痛めるものである。

発展的なバス学習による多様な学習形態の工夫

岐阜県土岐市立泉中学校教諭

橋本 勇治

1 はじめに

泉中学校は、10年ほど前に本研究会の会場として授業公開をさせていただいたこともある「バス学習」の学校である。数十年間にわたって本校に脈々と続いてきた、この「バス学習」を中心にした研究実践は、現在も引き継がれている。年に数度、講師の先生をお招きして「校内バス研修会」を実施することで、諸先輩方が築かれた伝統を守ると同時に、形にこだわることなく、その理念を幅広く生かした発展的なバス学習によって、個に応ずる多様な学習形態を模索してきた。

本校の遅々たる歩みの研究実践ではあるが、以下にその一端を紹介させていただくこととする。

2 本校の研究実践主題について

平成8年度 泉中学校校内研修 研究主題

自ら学ぶ力が育つ学習指導

現在、学習指導要領では「自己教育力の育成および基礎・基本の重視と個性を生かす教育の充実」が非常に大切にされている。とくに『個性を生かす教育』についてはもっとも重点的な課題として位置付けられ、教育課程においては必修教科の弾力的な運用、選択教科の幅の拡大等が大幅にすすめられている。本校においてもその趣旨を生かして、子どもの実態に即した特色ある教育課程の編成を積極的に検討してきており、同時に校内研修を具体的な実践研究の場としてとらえ、その推進に数年にわたってつとめてきた。

昨年まで、私たちは「基礎・基本」の徹底を常に土台としながら「自己教育力の育成」を大きなテーマとし、さらに子ども達が「熱中する授業」、「個性が生き、伸びる授業」をめざしてきた。そのために、一昨年度は「個性を生かす」指導計画や授業形態の位置付けを主眼に実践を積み重ね、子どもを主体とした授業の実現という面で大きな成果をあげてきたと考える。つまり「自ら学ぶ力を育てる」ために、重点的に実践してきた指導計画

や授業形態への取り組みは、めざす子どもの姿を具現する方途として非常に有効であることを実証できたと考えられる。そして、昨年度はさらにその成果を生かして、自分自身で課題を選択したり、課題に対する自分の考えの足場や解決の方法を自己決定する場を位置付けたりしながら、子どもの個性を生かす授業を創造してきた。さらに、2月の授業公開では、その個性を伸ばす「学び合い」の場の位置付けを大切にし、ここまで本校が培ってきた「バズ学習」理念を生かした多様な学習形態を工夫していくことで、テーマに迫っていくことを考え、実践してきた。

昨年度、国語科では「学び合い」（学習バズ）を授業の中心に据えた実践が数多く行われた。文章を読み取る活動の中で、自分の課題を持ち、その課題に対する考えを自分自身がはっきりとさせながら、仲間と学び合っていく授業であった。自分なりの読み取りを基盤としながら、いくつかの少人数の集団と学び合い、最終的に自分の班に学び合いから得たものを還元することで、さらに新しさや深まりのある自分の考えへと磨いていく。生き生きと、しかも熱中して子ども達が語り合う姿がとても印象的であった。

自分の課題を持って主体的に選択決定し、活動できる場が保障されるような教師の指導・援助があれば、主体的にしかも熱中した学習をし始める本校の子どもたちである。確かに日頃の授業では、子どもたちの受け身的な学習姿勢が気になることもある。しかし、それは、私たち教師が主体的に学習することのすばらしさを経験させていないことが原因であると考えたい。子どもたちは、だれもが「わかるようになりたい。自分でできるようにしたい。」と願っている。それを真摯に受けとめ、援助できる私たちでありたい。

さらに、自分を取り巻く生活環境や社会がめまぐるしく変化しつつあるこの時代に生きる子どもたちにとって、その変化に主体的に対応していくための能力が身につくことは非常に大切なことである。そして「自ら学ぶ力」はその能力に密接に結びつく力である。本校の学習指導のなかで、こうした力を子どもたちが身につけることは時代の要請でもあり、非常に意義深いことである。授業において、まず子どもたち一人一人が自分の課題をつかむ。それを解決するために、それまで身につけてきた知識や技能などを存分に駆使して解決のための足場を選択し、自分なりの考え・表現・動きを決定して示していく。そして、それらを仲間のなかにだし、互いに学び合い、高めあって深化させながら追求していく。つまり、それは子ども達一人一人の個性を私たちがとらえ、生かし、のばすことである。それをいかに私たちが指導し、援助できるかの実現を願いながら本研究主題を設定してきた。以下に研究実践の構想図を示す。

研究の全体構想図

研究推進委員会

自ら学ぶ力が育つ学習指導

教科経営

【柱Ⅱ】 一人一人の個性が伸びる指導計画の充実

- ・ 意欲を喚起し、学ぶ意識が連続するために教材（題材）の精選や単元の構造化を図る。
- ・ 個性が生きる指導過程や授業形態を工夫する。

【柱Ⅲ】 一人一人の個性が生き、学び合う中で伸びる授業の創造のための指導と援助

- ・ 一人一人の願いや多様な考えが生きると同時に、それを仲間と学び合うなかで自分の伸びが実感できる授業を組織的に作りあげるために、教師の指導と援助はどうあるべきかを教科の目標や本質に照らして実践、究明する。

学び合い

<泉中のバスの精神はここにある>

- ・ 一人一人が自らの課題に向かってその子らしさを発揮し、その願いや考えを出しあう中で、互いに高め合い、深め合って、さらに自分らしさを磨く学び合いを実現していく。

子どもづかみ

- ・ 教科の本質に照らし、さらに教材の特質から、子どもの個性をとらえる。
- ・ どの子の、どの個性を生かし、伸ばすかの意図をもつ。

見届けと確かめ

- ・ 学習状況を教師が評価する。
- ・ 自分の伸びを自己評価したり、仲間と認め合う場を位置づける。

はたらきかけ

- ・ 個性を生かし、伸ばすために、教材そのものや課題の解決の方法を複雑化するなど、個に対応するはたらきかけを工夫する。

【柱Ⅰ】 基本的な学習姿勢と教科の本質に立った学習姿勢の確立

- ・ 教科の本質に立った学習姿勢の確立とその手立てを明確にする。
- ・ 基本的な学習姿勢を確立する。

学級経営

- 学級活動指導 **……支持的風土の醸成**
仲間を大切にし、仲間との生活の中での自分の在り方についてみつめると同時に、集団への高い所属意識をもてるようにする。
- 道徳指導
よさを生かし、伸ばすことで、自らよりよい生き方を求める道徳の指導を実践する。

3 発展的な「バズ学習」の工夫

(1) 帰りの会に位置づける「生活バズ」

以下は、昨年行われた帰りの会の実践である。公開にあたって書かれた指導案の一部を紹介し、発展的な「バズ学習」の工夫の実践の一端として示す。

○ 泉中学校の「帰りの会」

本校では、教育課程編成の中で「帰りの会」を重要な時間としてとらえ、週時程に毎日25分間を位置付けている。つまり、このことは、本校のとらえる「帰りの会」が事務的な連絡の時間だけで終始するものではないことを意味している。私自身、本校に赴任して2年目となるが、25分間の「帰りの会」が本当に持つ意味をやっと考えはじめた今日この頃である。

少し前の月曜日の帰りの会のことである。学級委員の司会で、「給食委員会しめくくりの活動」の振り返りをおこなった。一週間の取り組み期間のうちの第一日目だったこともあって、特に給食当番を担当する班の子ども達に対して、「素早い配膳」への意識の掘り起こしをしたいと考えていたが、最初のバズから、ゆっくりとエプロンをつけている上に、手際の悪い当番たちのことが話題に上った。全体の話し合いになったときに、司会者が「全体的に遅れている中でも、頑張っている給食当番が誰かということはわかりました。ただ、本当に遅かった人が誰かはわかりません。当番の班の班長さん、どうですか。」その問いに対して、5班と6班の班長がみんなの前で言い合いをはじめた。つまり、事実上、両班とも班長が一番遅かったと言うことである。それがわかったおかげで、次の日から、走って教室に戻り、着替える姿が目につくようになった。

このように、泉中学校の「帰りの会」は、学級経営に密接に関わりながら、ある意味で速効性のある指導の場であると考えることができる。それは、「中学校指導書 特別活動編（文部省）」のなかの「第1節 学級活動」に記述されている内容にも、裏付けられている。その内容は、学級活動の指導計画作成上の配慮事項として記されている。

ケ 朝の会、帰りの会などの時間との関連を図ること。

活動内容の(1)をはじめ、学級活動における活動は、教育課程内の時間割の中に位置付けられている学級活動の時間以外の、例えば、朝の会や帰りの会などにおける活動と相まって行われることによって効果が高まることが多いと考えられる。（後略）

以上のとらえから、泉中学校の「帰りの会」の時間は、学校の教育目標具現や円滑な学級経営のために重要な意味を持つことになる。私たち教師は、泉中学校が大切にしてきたバズの指導とともに、いかに「帰りの会」を指導していくかが大きな課題であると日々感じている。

○ 泉中学校の「生活バズ」の歩み

泉中学校では「帰りの会」のなかでの「バズ」の活動を非常に大切にしている。それは、今までの泉中学校の「バズ」に対する研究実践の成果によって裏付けられ、位置付けられてきたものである。平成元年度の第24回全国バズ学習研究大会の研究紀要にも、諸先輩方の実践の成果が力強く記されている。

現在もこうした成果と精神は受け継がれており、本校の「帰りの会」の中心的な場面として「生活バズ」が位置付けられている。そして、その内容と流れについては、現在もよりよいものを求めて各担任が模索を続けている。

○ 現在の「帰りの会」と「バズ」

以上のとらえから、今、泉中学校では「帰りの会」を次のように考えている。

1日の生活を振り返り、お互いの頑張りを認め合ったり、励まし合ったり、また、内省（自分自身のなかで、振り返り、反省する）し合ったりすることで、一人一人が成長し、明日からの生活を高めていく時間

そして、こうした意味付けにもとづいた実践の中から、次のようないくつかの「帰りの会」の流れを見いだした。

流 れ	主 たる 内 容	具 体 例
認め合い型	頑張った仲間をお互いに認め合い、その子の気持ちや行いから学び合っていく。	・ 組織決めの頃の「係の歩みだしの事実」の認め合いなど
提案連絡型	生徒会委員会の提案報告等を中心にして意見を求めたり、共通理解を図る。	・ 委員会からの「しめくくりの活動」の提案など

評価点検型	諸活動について班や学級全体で評価したり、点検しあっていく。	・生活委員会を中心とした生活点検など
問題解決型	係から提示された問題点を話し合い、解決していく。	・活動中の問題点(「よびかけが少ない」等)の話し合い
追求型	一つの行為を徹底的に学級で討論していく。	・学級内の出来事(「ガラスが割れた」等)を追求する
内省型	自分や仲間の弱さを出しあい、お互いに内省しあっていく。	・出来事や事実に対する自分の考えをじっくりと振り返り、書く
感動型	教師が感動的な事実や資料等を提示したり、説論をする中で心を耕していく。	・人として価値ある生き方を、事例をもとにしっとりと語り込む

さらに、こうしたいくつかの流れの中で、重要な役割を果たす「生活バズ」を次のようにとらえた。

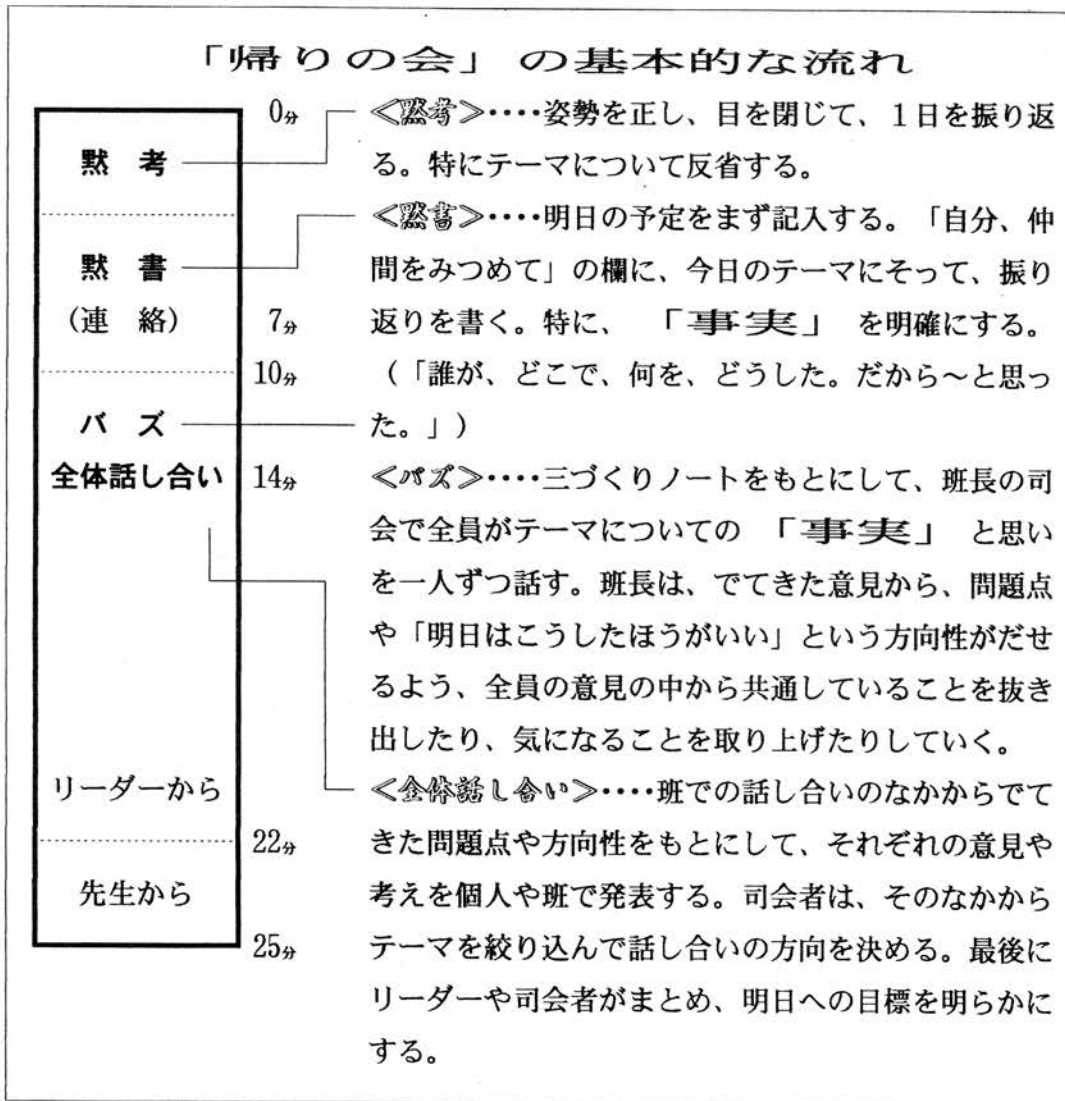
自分や班員、あるいはクラスの仲間の事実を出しあい、交流し合う中で自分の思いを素直に語り、班として問題点や方向性をはっきりと持つ時間

本来ならば、「生活バズ」そのものにも「帰りの会」と同様に、いくつかの流れや方法等があると考えられるが、まずは『事実をもとに、素直に語り合う』ことをめざして、こうした位置付けをしてきた。

本校では、校内の研究実践の土台として学級づくりを中心にすえ、よりよい人間関係の育成を願って、「支持的風土の醸成」をめざしてきている。この「事実をもとに、素直に語り合う」という生活バズの位置付けは、まさに「支持的風土の醸成」に寄与するものであると考えている。

以上のとらえから、本校では25分間の「帰りの会」や「生活バズ」をおおまかに次のように運営している。

「帰りの会」の基本的な流れ



(2) 多様な学習形態としての国語科の「おでかけバス」

本校国語科では、長年のバス学習に対する研究実践の積み重ねの成果と、本年度の研究推進の重点である「学び合い」を融合させ、新しい学習形態としてのバス学習「通称 おでかけバス」なるものを授業の中で実践した。教材の読み取りの場面で、一人一人の主体的な読みを大切にし、さらに、それらを広く、深く学び合う学習形態として創造されたものである。

以下に、その授業実践の展開を参考までに示す。

過程	学習活動	育てたい主な意識	指導・援助
個人読み	<p>◆学習の方向を把握する。</p> <p>◆音読する。</p> <p>◆言葉を取り出し、自分の考えをつくる。</p> <p>○筆者の主張の読み取り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・㊸段落への着目 <p>○説得のための工夫の読み取り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文末への着目 ・修飾語への着目 ・段落(㊸㊹)の働きへの着目 ・考察の視点への着目 	<p>育てたい主な意識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「中核の学習」の最後だから頑張りたいな ・いろいろな言葉に目をつけて、自分なりの読み取りをもちたいな ・自分なりの読み取りをもつことができて良かったな 	<p>指導・援助</p> <ul style="list-style-type: none"> *学習の方向の確認 ㊸段落から最後まで筆者の考えを読み取る *音読の指示 *「個人読み」の指示 *個別支援 <ul style="list-style-type: none"> ・価値付け、励まし ・読みの視点の示唆 ☆言葉を取り出せない生徒には、語の指定 ☆操作のできない生徒には、操作の指定・示唆
仲間読み	<p>◆「第一バス」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自グループ内で意見交流をする。 ・筆者の主張の中心を明らかにする。 ・説得のための工夫を明らかにする。 <p>◆「第二バス」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メンバーの移動をして意見交流をする ・自グループの考えを伝える。 ・他グループの考えを取り込み考えを広める。 <p>◆「第三バス」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自グループ内で深め合う。 ・「第二バス」で得た考えを交流し、読み深め合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「第二バス」に考えをもっていくことができるように頑張りたいな ・「第一バス」で得た読み取りを頑張つて伝えたいな ・自分の班に考えが持ち帰られるように頑張りたいな ・「第二バス」までで得た考えを出し合つて、さらに読みを深めたいな 	<ul style="list-style-type: none"> *「第一バス」の指示 *必要に応じて机間支援 <ul style="list-style-type: none"> ・発言の促し ・読みの視点の示唆 *「第二バス」の指示 *必要に応じて机間支援 <ul style="list-style-type: none"> ・発言の促し ・メモの促し ・読み深めの視点の示唆 *「第三バス」の指示 *必要に応じて机間支援 <ul style="list-style-type: none"> ・理解の不十分な生徒への個別支援
まとめ読み	<p>◆ノート下段に、読み深めたことを文章にまとめる。</p> <p>◆まとめを発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで考えを出し合つて読み取りが深まってよかったな 	<ul style="list-style-type: none"> *「まとめ」書きの指示 *個別支援 <ul style="list-style-type: none"> ・書き出せない生徒への *評価

第6分科会

生徒一人一人が生き生きとして楽しめる授業－いじめ対策とバズ学習

田中 博（東京都清瀬市立清瀬第四中学校教諭）

助言者

石田 裕久（南山大学教授）

越智 昭孝（元広島県立広高等学校教諭）

長谷川秀一（東京都立教育研究所指導主事）

小池 和夫（東京都文京区中学校PTA連合会長・文京区立第六中学校PTA会長）

司会者

吉田 幸彦（愛知県春日井市立白山小学校校長）

記録者

八木 久於（東京都清瀬市立清瀬第二中学校教頭）



生徒一人一人が生き生きとして楽しめる授業 －いじめ対策とバズ学習

東京都清瀬市立清瀬第四中学校教諭

田 中 博

1 主題設定の理由

今日、いじめの問題が社会問題となり、その対策をいろいろな分野から取り組まなければならない。地域の人達の呼びかけ。家庭においてはいち早く察知し、学校との連絡をとり、原因を突き止め、早急な対応が必要である。また、その原因を解決できるよう、地域、家庭と手を取り合ってその生徒や保護者に対する指導も必要である。学校においては、学校生活全体を通して、いじめをなくす事の呼びかけや、ほんの些細なことも見逃さないためにも学年会で常に話題に出し、個々の生徒への対策が大切である。その中で教科指導においてもいじめ対策として「特に学校においては、まず、日頃から一人ひとりの個性を尊重し、分かりやすく楽しい授業を行うとともに、深い児童生徒理解に立ち、児童生徒がいきいきとした学校生活を送ることができるように努めることにはじまり、日常の学校運営、教育指導、生徒指導の在り方一つ一つの改善に努める必要がある。」

本校においても大きく発展するいじめはないが、小学校の違いからのいじめや無言電話やいたずら電話などは実際にあった。本校でも「いじめを起こさせないための指導の工夫・改善」として4項目あげ、その中の各教科の学習指導で「教科の目標の達成の過程において、グループでの協同学習、体育でのチーム・プレーを取り入れ、援助と協力関係を大切にしようとする態度を育て、好ましい人間関係を育成するよう配慮する。」とある。これはまさにバズ学習の根本であろう。班の中でまたはクラスで自分の意見が認められ、他人の意見が認められるようになれば、いわゆるいじめが克服できるのでは？ という仮説を立ててみた。

2 実践のねらいーバズ学習を数学の授業に取り入れたねらいとして

- (1) 笑顔で入室するなど生徒との出会い時の態度に気をつけているか。
- (2) 否定的な言葉や態度で授業をしてはいないか。

- (3) 学習準備、学習態度ができていない生徒に対し、原因を探り、援助・指導をしているか。
- (4) 教師の思惑と違う考えや誤答を大切に学習にしているか。
- (5) 生徒が安心して発言できる学習の雰囲気づくりをしているか。
- (6) 学習の遅れがちな生徒も学習中に活躍できる場を確保しているか。
- (7) 学習に遅れがちな生徒、つまづいている生徒に個別指導を行っているか。
- (8) 生徒の多様な考えが発揮できる場を意図的に設けているか。
- (9) まとめの段階で、生徒の理解度を把握するよう努めているか。

(1)～(9)を踏まえて、数学だけでなく他の教科でもバズ学習と自己評価を行い、多様な生徒の動向を掌握する。その中からいじめを早く見つけ、その対策をクラスだけでなく、学年から学校にさらには家庭や地域にも広げて対応できれば…
これがねらいである。

3 実践の概要

「数学への興味・関心・態度の評価」について。

興味—物事に心がひかれておもしろいと感じること。おもしろみ。おもむき。

関心—物事に興味を持ったり、注意を払ったりする。気にかける。

態度—ある物事に対するときの、人のようす。動作・表情などの外面に表れたふるまい。

「評価とは物の値打ちを認めてほめること」とある。 [大辞林より]

数学恐怖症という言葉もあるくらいで、数字や文字式を見るだけで拒絶反応に近い生徒も残念ながら少なくない。また何となくセンスで解けてしまう生徒もいる。そんな教科であることは昔からよく分かっているが如何に一人一人の生徒に興味、関心を持たせ意欲的に学習に取り組む態度を養うか考えていきたい。それには柱として3つある。

- (1) 知識面の評価、情意面（興味・関心・態度）の評価とともに社会性を入れる。

学校での評価が社会に出て何も役にたたなければ意味がない。社会性を身に付けるためには、生徒相互の人間関係や、教師（社会に出たならば上司）との人間関係がうまく作れ

るようにしなくてはならない。その手段として班員による小テストのまるつけや、生徒同士で教えあい学び合う等の方法で人間関係を学び、それを評価に入れる。

(2) 生徒の自己評価を活用する。

自己評価できる力は自己教育力にもつながり、自分のつまづいている箇所を見つけだし、克服することにより興味、関心を持てるようになるのではないであろうか。そのために自分を評価するアンケートを毎時間の授業で実施する。

内容は、授業でやったことと、「どこまで理解できているか」の確認や、「予習、復習ができていないか」、「忘れ物やおしゃべり、集中できたかできないか」など簡単な形式をとって生徒自ら自分の学習態度や到達度を評価させる。

またSP表（縦軸に点数の高い生徒を順に並べ、横軸には正答率の高い問題を順に並べる。）を使用し、生徒個々にあった適切なアドバイスを送れるよう努力したい。このような評価は学習や、指導の進行をコントロールするためのフィードバック情報を得るためにも必要である。

(3) 指導教師への評価を入れる。

上記(2)のアンケートの中に私自身の授業の評価を生徒にしてもらい、次の授業にとり入れられる。授業を教員からの一方通行にするのではなく、お互いで創りあっていく。自分の意見の入った授業ならば興味も湧いてくるであろう。また、SP表により、作成した問題も適切であったかどうか確認できるため問題作りにもとても役に立ち、また生徒にも還元できる。

以上の3点は如何に生徒一人一人に興味・関心を持たしてともに授業を作りあげことを目的としている。

問題を解くテクニックにだけに終始するのではなく、楽しい授業、分かる授業、生徒自ら自分を評価でき、生徒と一緒に作り上げていく授業——そんな楽しい授業を展開できれば、生徒一人一人の存在も認められいじめが無くせるのではないか。現代の生徒の置かれている状況を我々も試行錯誤しなくてはならない。授業を通して数学に対する興味や関心が湧き、楽しく学べる授業ができれば。さらにそれは数学だけでなく、この先、生きていく人生の中で、自己教育力を身に付けることは、自分に足りない事を自ら補い、そしてさらに発展させるためにも重要なことである。

4 実践例

まず笑顔で教室に入り、必ずこちらから挨拶をしてその日の出会いを大切にす。一斉授業では分からない所も質問できず、間違えれば恥ずかしい。という生徒の固定観念を捨てさせ、分からないところは聞いてみよう。間違えてもいいから発言する事は素晴らしいことなんだ。という意識を徹底させるバズ学習を取り入れ、よりよい人間関係が作れるようになれば、そして生徒一人一人が自分自身の存在を集団の中で認めてもらえれば（認めあえるような集団）いじめが無くなって行くのではないかと思う。

また他の教科でもこのバズ学習の中の自己評価を実施し、特に配慮が必要な生徒を学年会で話し合い、共通理解を持って生徒や保護者に接する。また自己評価を家庭に対しても行い、親子のコミュニケーションが保てるような学校と家庭、さらには地域との信頼関係がより確実なものになるのではないか。という仮説を立ててみた。

実際に、いくつかのポイントをあげてみる。

- (1) まず単元見通し学習として今回は中学3年で学習する2次方程式をとりあげる。全体で13時間を予定しているが、最初の2時間を導入とする。第1時に全体の指導案を生徒に渡し、いつ、どこを学習するかを説明、そして1時間の授業の流れを（班を作り、司会を輪番で回すなど）説明。
- (2) その中で重要なポイントは、自己評価を行うということ。（その自己評価を通して、目では見れないような心の訴えがつかめればと願っている。その中には教師に対する評価も入れ、次回の授業の参考にしていきたい。）
- (3) そしてプリテスト（事前テスト）、ポストテスト（事後テスト）を実施するとともに、生徒相互採点で行うことを説明。そこで注意しなくてはならないことは2点ある。解けない生徒や間違ってしまった生徒は決して恥ずかしいことでは無いこと。できている生徒は人に教えることにより、より確実に問題を解けるようになるということ。この2点をしっかり生徒に示していないと、かえって逆効果になってしまう恐れがある。生徒相互の人間関係が、班の中で円滑に行えるような配慮が大切である。
- (4) 教師側も、授業中に出てくる様々な質問、誤答に対して、発言した勇気をほめる。なぜ間違ってしまったか、どこから分からないかを個人的に、時には全体を中断させ解明していく。教師側のそのような姿勢も大切なことだと思う。

5 実践のまとめと今後の課題

このバズ学習を取り入れ、生徒の自己評価の中でこういう意見があった。「この方法は班の人達と仲良くなれるね。」「数学の授業が楽しくなってきた。」「〇〇君に教えてもらって良くわかった。」など多くの生徒の評価は高い。

1日が終わると120～150枚程度の自己評価が集まり、その処理に追われる中でこのような意見が大半であることは本当に嬉しい限りである。その中には「今日の数学の授業楽しかったですか？」という質問に、いつも1を付ける生徒が学年で1～2名いるがその生徒に関しては原因の追求が必要である。

今後の課題として、数学の授業だけではなく、理科や英語、その他クラスの学活などでもこの自己評価を行い、生徒を多面的にとらえ、個々の長所を認め、伸ばできるようにすることが、いじめをなくす第1段階なのではないか。

学年会で自己評価に出てきた情報を活用し個々の生徒に対して話し合い、学級担任も教科担任も生徒一人一人の細かな動向も察知できる学年になればと考えている。

さらには校内研修で取り上げ、学校の全体に広げ、全員の教職員が全学年の生徒の細かな事を知り、対応できることが大切な事であり、また自己評価を保護者にも行ってもらい、家庭での様子の情報も得て接することも今後の課題としたい。

いじめ克服のためには家庭と学校、そして地域との相互の連携が最も重要であることはまちがいない。バズ学習と自己評価を学校教育のいろいろな場面で取り入れ、悲惨ないじめで心悩ます事のない学校ひいては地域社会を築き上げることは緊急な課題である。

6 資料

(1) 単元名二次方程式 使用教科書 東京書籍

学 習 計 画 (11時間)

時	学 習 内 容	予習した内容
1	<ul style="list-style-type: none"> ・バズ学習の授業の説明 	
2	<ul style="list-style-type: none"> ・プリテスト実施 2次方程式 教P.54~P.66 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ・平方完成のやり方 教P. 5657 ・ $x^2 + 6x + \quad = (x + \quad)^2$ ・ $x^2 + 3x + \quad = (x + \quad)^2$ 	
4	<ul style="list-style-type: none"> ・平方完成を利用した2次方程式の解き方 教P.57 ・ $x^2 + 6x - 7 = 0$ ・ $x^2 + 3x + 1 = 0$ 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ・2次方程式の解の公式の導き方 教P. 58 ・ $3x^2 + 5x + 1 = 0$ ・ $ax^2 + bx + c = 0$ 	

6	<ul style="list-style-type: none"> • 解の公式の使い方 教P. 59 • $2x^2 - 3x - 1 = 0$ • $x^2 + 4x - 2 = 0$ 	
7	<ul style="list-style-type: none"> • 因数分解による解き方 教P. 6061 • $(x - 2)(x + 3) = 0$ • $x^2 - 6x + 5 = 0$ • $(x - 4)(x + 1) = -6$ • $x^2 - 4x + 4 = 0$ • $x^2 = 9(x - 1)$ 	
8	<ul style="list-style-type: none"> • 2次方程式の応用 教P. 63 64 65 (班で討議する時間) • 大小2つの数がある。その差は7で、積は144になる。この2数を求めなさい。 • 横が縦より4cm長い長方形の紙がある。この紙の4すみから1辺が3cmの正方形を切りとり、直方体の容器を作ったら、容積が96cm^3になった。紙の縦の長さを求めなさい。 • 1辺が6cmの正方形ABCDにおいて、点PはAを出発してAB上をBまで、点Qは点Pと同時にDを出発し、Pと同じ速さでDA上をAまで動く。点PがAから何cm動いたとき、$\triangle APQ$の面積が3cm^2になりますか。 	

9	・応用問題の発表 質問
10	・演習 問題集
11	・ポストテスト教P. 54～66

(2) 毎時間終了後の自己評価カード

自己評価 ()月()日()曜 ()時間目

今日の内容						
評価項目	5	4	3	2	1	よかったところその他何でも
授業は楽しかったか						
問題は理解できたか						
班で意見が言えたか						
わからない問題があれば右に記入して下さい 先生にも一言						
年 組 番名前						

第2目全体会

分科会報告

根深 得英（東京都調布市立第五中学校教頭）

阪神大震災からの報告

谷口 寛二（兵庫県尼崎市立武庫北小学校校長）

記念講演

学校は変わるか

藤田 英典（東京大学教授）

司会者

青野 宏康（東京都清瀬市立清瀬第四中学校校長）

記録者

根深 得英（東京都調布市立第五中学校教頭）

分科会報告

東京都調布市立第五中学校教頭

根深得英

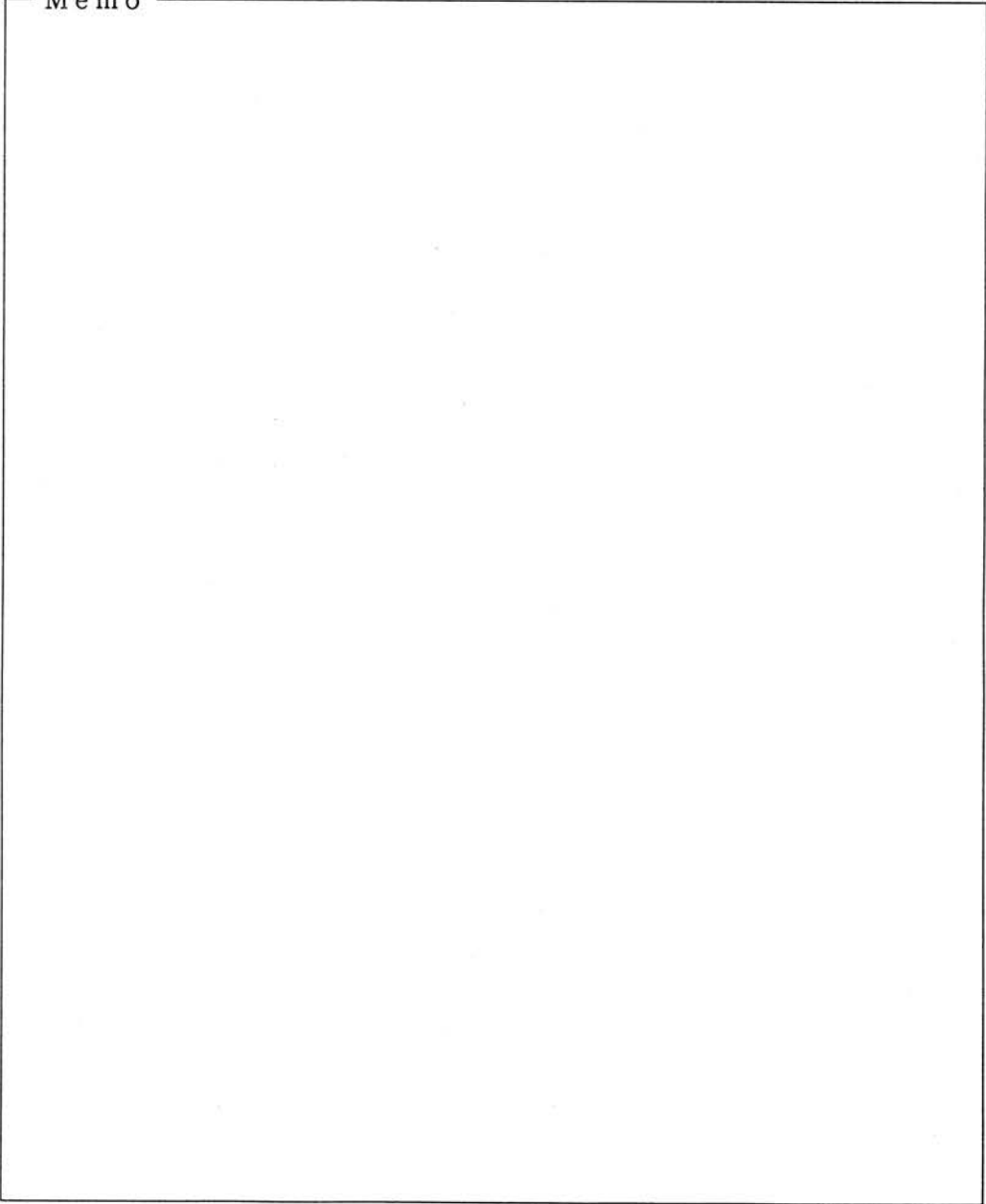
Memo

阪神大震災からの報告

兵庫県尼崎市立武庫北小学校校長

谷 口 寛 二

Memo



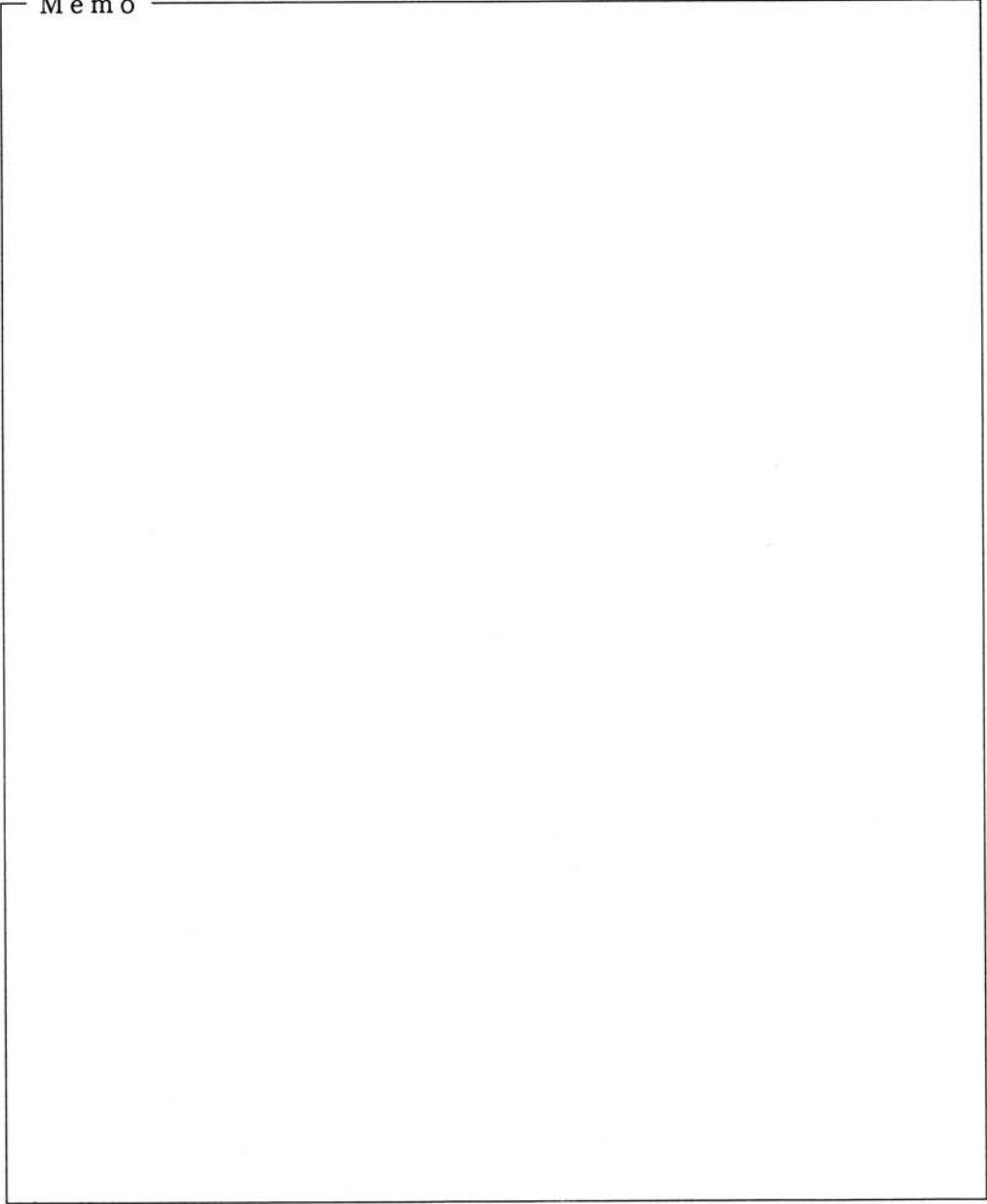
記念講演

学校は変わるか

東京大学教授

藤田英典

Memo



役員一覧

第28回全国バス学習研究大会

会長	有元 佐興	(東京都文京区立第六中学校校長)
副会長	岡野 仁司	(東京都世田谷区立梅丘中学校校長・東京都中学校校長会副会長)
副会長	村越 正則	(東京都新宿区立四谷第六小学校校長・ 東京都公立小学校連合校長会厚生部長)
副会長	久保田 滋	(芦屋大学教育研究所主任研究員・全国バス学習研究会常任委員)
副会長(会計担当)	青野 宏康	(東京都清瀬市立清瀬第四中学校校長)
副会長(庶務担当)	木村 幸夫	(東京都豊島区立道和中学校校長)
副会長(会計部長)	望月 和三郎	(東京・菊華高等学校・全国バス学習研究会常任委員)
講師	杉江 修治	(中京大学教授・全国バス学習研究会常任委員)
事務局長	小林 一英	(東京都文京区立第六中学校教頭)
会計	稲田 瑞穂	(東京都清瀬市立清瀬第四中学校教頭)

全国バス学習研究会

会長	加藤 孝史	(愛知県春日井市立南城中学校校長)
研究者代表	梶田 正巳	(名古屋大学教授)
事務局	堀場 正美	(愛知県春日井市立玉川小学校校長)

全体会・分科会の助言者、司会者、記録者は、各全体会・分科会の扉に記載

大会記録(写真)

伊藤 憲弘	(東京都文京区立第六中学校教諭)
藤尾 玲子	(東京都文京区立第六中学校教諭)
八木 久於	(東京都清瀬市立清瀬第二中学校教頭)

第28回全国バズ学習研究大会要項

学校は変わるか

編者 第28回全国バズ学習研究大会準備委員会

発行日 平成8年11月15日

発行

印刷所
